

時代に生したる衰頹の結果は其弟ゼームス二世の在位三年間に於て之を回復する能はず而かも此他に更に英國政事的狀況より生せる一層困難の原因ありき當時ゼームスは自ら謂らく英國海軍の士官兵士は共に自己に心服せりと此思想の正當なるや否やは未詳なりと雖も此想像は現在君主ウリアム及びマリイの信する所となり現在君主は英國海軍中多數將士の忠實と否とを疑ひ之を信任せざるの狀態ありしを以て海軍の行政は大に亂れむとするの傾向あり故を以て當時英京の有力なる商賈が駭ふる所の不平はウリアム政府一々之を採用し又海事に慣れざる不適任者を擡擢して英國海上權力の基礎たる海軍士官に任用するの愚を行へりと云ふ是れウリアムが自ら疑ふ所の海軍々士を排除して以て其弊を醫せむと企てたるものなるも是徒らに多年海事に老練なる海員將士をして不信用の地に陥りたるを自覺せしむるものにして斯る醫療は疾病其者よりも却て不長有害なりき是に於て嫌疑は内閣及び市府に充ち朋黨と狐疑不決とは滔々として將校間に流行せり不運に陥りたる人若しくは進みて事を爲す能はざるものは叛逆罪を其身に負はしめられむとを覺知し民心洶々として疑懼したり。

ラブリックの戦争以後聯合艦隊の直接なる戰畧は専ら三箇の方法に由りて之を行へり。

第一の方略は佛領の港を攻むるに在りて殊に英吉利水道の海岸及びブレスト附近の諸港を攻撃することを務めたりしか是等の擧たる單に其一地方を損害し或は通商を妨げ若しくは捕拿船の根據地を失はしむるの目的に過ぎず而して時として陸兵の派遣せらるゝ者頗る多きとありしもウリアムは緩かに此の如き示威運動を試みルイをして兵を戰場に收めて海防に趨かしむるに止れり要するに當時ウリアムが佛國海岸を扼せむとするの企圖は此戦争に於ても亦た其後の戦争に在りても徒らに虚喝のみにして一も其効果を現はせるもの無し加之佛國海岸を伴攻し以て佛軍の意を海防に轉せしめむとするの策も遂に佛國の陸軍勢力を弱むるに足らざりき若し當時佛國にして其諸港の守備此の如く完からざる乎或は其水利は國の中心に達すると猶我國チネサビーク灣及びヒデラウエール灣若しくはサウザーンサウンドの如きものならしめむには其攻撃は蓋し之と異なる結果を來したるならむ。

第二に聯合艦隊が一戦を交へずして其軍事上の直接大價値を生したるは一六九四年ルイ十四世が西班牙に進撃するの決意を爲したる時に在り蓋し西班牙は甚だ孱弱にして恐るゝに足らずと雖も佛國の後部に位するを以てルイは亦懸念なき能はず故にルイは

西班牙の東北海岸なるカタロニアに攻め入り遂に講和の止を得ざるに至らしめむと欲しツールヴェルをして艦隊を帥めて陸軍の應援を爲さしめたりしかカタロニアの地たる元來險要の地なりと雖も忽ちにして降を乞へり然るに此時聯合艦隊は大優勢を擧げて其背に出たりしを以てツールヴェルは止むを得ずしてツィロン港に歸りパーセロナ府は爲めに其危難を救はれたり爾來此二海國民は其平和の議を決するに至る迄艦隊を西班牙海岸に碇泊して佛國の侵入を防止せり一六九七年ウリアム和を講せむとするに際し西班牙之に從はず此に於てルイ再舉して西班牙に入り聯合艦隊は復た之を救はずしてパーセロナ府は遂に佛軍に陥れり同時に佛國の海軍遠征は南米カルタチナ港に向ひ海上より攻撃を加ふると前後二回西班牙遂に和を乞ふに至れり。

第三に聯合艦隊の軍務とする所は海上通商の保護に在りたりしか此點に就きては大に失敗したるに似たり試に史を繙きて古今を通觀するに通商撲滅に對する戦争及び其結果は此時より大なるは莫く其及ぶ所甚た廣濶なりき前に述べたる如くラフグ戦争の翌年佛艦の全く蕩盡に歸したる時に當り佛國が鹵掠する所最も多かりしは實に奇異の現象にして通例の場合と矛盾するものとす何となれば通例の場合に於ては強盛なる艦

隊の後援或は近傍の港灣に據るに非ざれば到底鹵掠を行ふ能はざるを通則とすればなり抑も蘭英二海國民をして遂に講和の念を生せしめたる所以のものは主として佛國捕拿船が此二國の商業を妨害したるに因るを以て此點は吾人の宜しく攻究すべき所なり蘭英二國が商業を以て自己の軍隊を維持し合せて大陸出征の兵士に支拂を爲すを得たると同しく佛國が能く彼二海國との戦争を永續し而かも屈撓せずして以て之を久しきに維持したるものは商業撲滅策の結果にして之に依り佛國は遂に平和の局を結ぶを得たり抑も此海上通商の攻撃防禦の問題は今日に於て尙未決の疑問として存するものを知るべし。

吾人の茲に第一に注意すべきとは(一)佛國海軍の衰頹甚た遅々たる(二)其英吉利水道に現出する無形の結果(三)ピーチーヘッドの大捷及びラフグの勇敢なる行爲が深く聯合軍の腦裡に感透して數歳の間は之を忘るゝ能はざりしこと則ち是なり此勇敢なる行爲の配臆は蘭英の艦船をして一隊と爲り敢て離散して敵の巡邏艦を追撃することなからしめたり佛艦は之に依り海上の眞戦争に因りて得たると同一なる利益を得たり既に述

へし如く英國海軍は其効力甚だ薄弱に陥り其海軍的行政も亦完良ならざりき加之英國内ゼームスに黨する所の叛徒が佛國に内應せるを以て佛人は英國内部の虚實情形に關し常に利益なる報知を得爲めに利する所少からず其一例を擧ぐればラフリングの戦後に於て佛艦隊は敵國の大護送商船隊のスマイルナに航することを聞知し五月ツールヴェルを遣はして之を要撃せしむ此時に當り聯合艦隊はツールヴェルをアレストに封鎖せむと企てしか其未だ至らざるに先たちてツールヴェルは既に去れるか故に遂に其目的を達する能はざりき此遅緩は他無し英國海軍行政の不整頓に基因せるものにして之に加ふるに英國政府の不幸なりしは自國の商船既に出帆せし後に至り始めてツールヴェルの出發を知られること是れなり此に於てツールヴェルは護送船を英吉利水道附近に襲撃し四百隻の内百隻を破壊し或は之を捕獲し其餘は之を撃散せり是れ實に單純なる巡洋的戰役と見るべからず何と云はれはツールヴェルは明らかになり七十一隻の艦隊を以て堂々として事に従ひたる者なるか故なり畢竟英國か此大失敗を速きたる原因は全く英國海軍行政の不能なるに在りたると明らかなり。

佛國巡航艦の鹵掠を逞ましふすると最も其猖獗を極めたるは實にラフリングの戦後に在

り其理由蓋し二あり即ち第一は當時聯合艦隊は共にスピットヘッドに碇泊すると二月餘其間大陸に送致すべき陸兵を招集するとにのみ盡力したるを以て佛國巡航艦は些少の抵抗をも受けざりしこと是れ第一因なり又第三は佛國か此夏再び艦隊を派遣する能はざるを以て其有爲の海員に許して私船に乗りて巡航の任務敵船奪掠の事に従はしむ故に捕拿船の數は俄に増加したりしこと是れ第二因なり此二原因は相合して佛國の捕拿私船は敵國の商業妨害を恣まにし其向ふ所敵なく英人をして覺えず困哉を絶叫せしめたり故に英國海軍史家の語に曰く前年佛艦は海上を横行したり而かも我商業の害を蒙る甚だ多からず然るに今年に至り佛國艦隊は深く港内に封鎖せらるると雖も海上に於て我商業を妨害するとは却て前年よりも甚だしと然れども此理由を考ふるに佛國は其海上の商業盛ならず且つ比較的多数の海員を有し此海員は主に海軍事業のみに従事する者なるか故に艦隊の碇泊に際しては直ちに此海員を巡航艦に用ふることを得るに由れり而かも連年戦争費用の負擔彌々重大と爲るに及ひルイ王は其海軍力を減せり之か爲めに方向を商業撲滅の業に轉するもの多きを致したり當時佛國の艦船及び士官は捕拿事業に賛成する所の私立銀行又は會社に計り一定の條件を以て其費用を支出

せしめ内閣諸大臣と雖も亦此企業を贊助し此捕拿企業の資金の應募を嫌ふもの無く而かも彼等の此事を爲すは國王の喜悅を買はむか爲なりと云ふ所謂條件とは何ぞ即ち艦船使用料として捕拿利益の一部を國王に配當することは是れなり斯る事業は通例之か爲めに海軍正經任務の衰頹を來すものなれども必ずしも急劇に其結果を生せず是に由りて一時は捕拿船の氣焰を大に盛にしたりと雖も亦恒久なる能はず實に此政略たる當時の海軍費の缺乏より止むを得ず不用の材料を供し人民の資本に依りて敵を鹵掠して利益を収めむとしたるなり故に此戰爭中に於る拿捕事業は一兩艦の業にあらす三四隻乃至六隻の分艦隊合して一將の下に働けるなり加之チャンバル氏ホルマン氏ヂェグートルリアン氏の如き著名なる海軍男兒が各其指揮を執りたるを以て之を見れば彼等は單に劫掠せむよりは寧ろ敵と戦ふことを望めるものなるへし此等の私設遠征軍中最大にして而かも遙かに佛國海岸を去りたる者は一六九七年西班牙本國に於るカルダチナに對する者にして即ち七十隻の戦列艦六隻のフリゲート艦其他の小船より成立ち二千八百の兵士を搭載せり其主要なる目的はカルタダチナの市府に課税するに在りしと雖も此舉の勢力が西班牙政府の政略に及ぼしたる効果は甚大にして西班牙政府は恐怖狼狽

し之か爲に講和を成就せり此の如き運動の性質及び一致は艦隊の援助と殆むと同一の効力を有したりと雖も全然同一の効を奏する能はず何となれば蘭英聯合艦隊は活潑の運動を爲す能はずと雖も戦争の進むに従ひ海軍行政を漸次に改良し來れるを以て商業撲滅の佛國政策は一定の範圍内に制限せらるゝに至るを以てなり是を以て無保護なる拿捕艦船は此後に及びて漸次に蘭英聯合軍の拿捕に逢ひ一英人の報に據れば此戰爭中五十九隻の佛國軍艦を捕獲したりと云ふ然れども佛人は僅に十八隻なりと云へり佛國海軍史家は此計算の差異を説明して英國人は眞正の軍艦と私立會社等より借受けたる船舶との區別を立てざるか爲なりと謂へり故に此戰爭に於る商業撲滅策の特種なる點は佛國巡航艦の一艦隊を作し遠く其根據地を離れずして運動したると敵も亦其艦隊を分離せずして務めて兵力を集合したるとに在り而して吾人の特に注目すべきは英國海軍行政の尙ほ不整頓なるにも拘らず佛國艦隊の一度ひ退くや隨て佛國巡航艦は自から其勢力の根源を滅し漸々英艦隊の控制する所と爲りたること是なり故に一六八九年より一六九七年に至る戦争の結果は左の如く之を結論するとを得へし曰く巡航艦が商業を撲滅せむには自國艦隊の後援なかるべからず我が有効艦隊の後援あるを以て敵

は其兵力を散ずるを得ず。従て我巡航艦は其敵の商業に對して其捕獲を逞ふするを得。』と此事は戦争の終りに至り真正の傾向益々明瞭を加へ而かも其翌年佛國艦隊の更に微弱に陥るに及び此傾向は一層疑ふべからざるに至れり。

蘭英二海國民は其失ふ所甚大なりしに拘らす遂に能く其勝を終局に制せり戦争の初めに當りては佛國は攻戰の地位に立ちしか今や到る處に防守の位置を取るに至れり是に於てルイ十四世は止むを得ずして其頑固なる僻見に反し又其正當なる政事的願望に背き而かも彼が積年煽強の勁敵とし視且つ篡逆者として之を嫉視せし所のウヰリアムを英國王と承認せり表面上より大體に就きて觀察するときは此戦争は西班牙領テリダ、ルランドよりライン河を經、伊太利のサポイ、西班牙のカタロニアに及へるものにして全然陸戰なるか如く而かも其英吉利水道の海戰及び遠隔に於る愛蘭争鬭の如きは其關係甚だ薄く譬へば挿話の如きのみ殊に海上通商貿易の潜横的動作は外面に表はれざるを以て人の注意を惹起することなく唯其困難に泣くの叫聲に依り商業の如何に妨害を蒙むれる乎を知り得へきのみ貿易運漕の事業は困難なる負擔を受けたるのみならず大陸に於て當時佛國と抗戰したる陸兵の供給をも支辨したり而して此等兩國國民の富源は流

れて聯合軍の金庫に入るに至れるは其初め堂々たる佛國海軍の方針を蹙りたるに由れり蓋し佛國は其優等なる海軍を以て敵の未だ備へざる間に一大打撃を以て之を壓倒するの策を執るべかりしならむ然れども當初佛國は既に其無二の好機をして逸去せしめたり聯合艦隊の確乎たる海上權力益々確實と爲り其根柢の彌々鞏固と爲るに及びては佛國は復た之を奈何ともするを得ず連合軍は綽々として終局の勝利を占むるの時機を獲たるなり。

一六九七年ライヌウヰックの講和條約は佛國に最も不利益なるものなり之に由りて佛國は十九年前ニメーゲンの條約に依りて得たりし所の總ての領土を失ひ獨りストラスブルクを留保するのみ是より先き多年路易十四世が平和の間に乘して或は詐術を以て或は威力を以て之を占領し之を獲得したる所のものは悉く之を放棄し日耳曼及び西班牙は爲に莫大なる其舊領地を回復することを得たり特に西班牙がチーダルランドを回復したるは直接に和蘭聯邦の利益となる所にして又實に歐洲全體及び西班牙の利とする所なり而かも蘭英二海國は之に由りて通商上の利益を享け彼等の海上權力をして彌々擴張せしめ隨て佛國の海上權力を害すること彌々大なるに至れり。

佛國は此戦争の間實に未曾有の争奪を爲し從來既に幾度か試みし如く孤立して以て全歐洲に敵したり是れ實に大偉業なりと稱せざるを得ず此戦争に由り和蘭聯邦は吾人に教ゆるに如何に活潑有爲の國民と雖も若し其實力に缺くる所あらは獨り外部の助けに依頼すべからざることを以てし又佛國は吾人に示すに凡そ國民は如何に内部の勢力に富み兵數に裕なりと雖も隔絶の地に在りては大事を成遂する能はざるを以てせり。

是より先きコルベール一日牒に凭りて沈思す友人見て其故を問ふコルベール答へて曰く今我れ眼前の沃野を見て曾て目撃したる所の豊饒の地域を想起せり佛國は實に豊饒の地に乏しからすと此確信は氏の生活中種々の困難に遭遇するも尙ほ彼をして屈せざらしめたり是を以て國王の奢侈及び征外戦争の莫大なる費用は佛國財政上の大恐慌を生じたりしも彼れコルベールは從容として能く之を處理したるとは是れコルベール時代以還彼が死後の歴史に徴して其真なることを知るに足れり實に佛國は天然の豊沃に加ふるに國民の勤勉と節儉の性質とを以てせり然れども各一個國民又は一箇人は其同儕同類と交を絶ち孤立して獨り昌榮を享くるを得ず故に如何なる健全の軀と雖も其發

育強壯及び一般の福祉を享けむか爲めには之に適切なる外國の健全及び其國其身の榮養生長健強と安寧とに必須なる事物を吸入するとの自由を要す單に内部機關が満足動作せざるべからざるのみならず心意上に於ても形骸上に於ても相共に新陳代謝と運動循環の働きは平滑に行はるゝと同時に適切にして且つ各種錯綜せる養料を外部の淵源より其心身に受くることを要す佛國は大に天然の富を有したるに拘らず之を盡盡せり何となれば當時尙ほ其國自身の諸部の間に恒久的活潑なる交通なく他邦の人民と恒久的交換を行はざりしを以てなり此交通と交換とは所謂内外の商業なり吾人は此等の缺點の原因は大體戦争に在りと謂ふと雖も是れ僅かに一部分の眞理を表言せるものにして未だ能く其理由を悉し得たるものに非ず戦争より生ずる困難は一にして足らずと雖も就中其國民をして他邦との交通を絶ちて孤立せしむるを以て最も太甚たしとす或は斯る激動と雖も時として却て其國民の勢力を支持するの結果を生ずるの時期なきに非ずと雖も此くの如きとは固より例外にして又假令之れ有りとも亦長久に繼續すべきものには非ず故に一般に前記の論定を下すとは固より理の當然たりルイ十四世が戦争の終りに於る孤立は即ち之を證明したるものにして佛國は爲めに大に疲弊せ

り而して佛國を此停滯不助の狀態より救はむとするものは是れ實にコルベールが畢生の一大目的なりき。

若し國家内外の循環作用は確定せず其活潑なる運用を爲さざる時は假令戦争を繼續すると稍々久しきを得るも決して之を長久に維持すると能はずコルベールの始めて其職を奉したる際に當ては所謂國家の運轉作用なる者は絶て存せざりしなり之を創設し之を確立するは寔に其急務なりき然れども彼が大猷宏圖を成すべきの時は未だ至らず而かもルイ十四世は柔順心服なる臣民を其賢相の企圖に従ひて指導するを欲せず故に一大事件の起り來るに方りては英國の如く諸々の方法を以て勢力を蒐集して外事に當り其費途を商賈及び海員より收めて以て外國を壓倒するの策を取らずして空しく自ら退却したるか故に英國和蘭の海軍の爲に外國との交通を遮断せられ又大陸に於て四圍の敵に苦しめらる此時に方り漸次饑渴に逼るの國民を救済するの唯一の手段は強盛なる海上權力を回復するに在り即海上の覇權を有効に掌握して始めて國家の富力を増加し以て人民の勸業を奨励するを得べし蓋し此點に於て佛國は其三面皆海岸に頻して自然の利益を有せり三面の海岸とは英吉利水道及び大西洋并に地中海是なり加之佛

佛國は政事上和蘭を招きて其海上權力を合同し以て英國に敵せしむるを得少なくとも和蘭をして英國を厭はしむるの念慮を生せしむるの好機會を有せしなり然るにルイ王は徒らに其強力を待み絶對的主權を以て着々如意に之を運らし得べきとを自から知ると雖ども敢て之を施さず而かも此強力なる良援を自國に誘引するを爲さず頻りに其侵伐を恣まゝにし以て遂に全歐洲をして自己に反對して兵を動かさしめたり而して當時佛國の狀勢たる此自信の虛ならざるを示し歐洲を敵として能く其地位を保持し乃ち敢て進まずと雖ども亦大に退かさり然れども佛國は之か爲に國民の財力を枯渇したると莫大なり是れ全く國內の財源に依頼して海外の利を收むるとを努めざりし結果なり此後戦争再び起るに及び佛國は亦同一なる氣勢を示せりと雖ども同一なる活力は復た見るへからず乃ち到る處に遷退せられて佛國は終に荒墟の近崖に近接するに至れり抑も是等の戦争始末と其原因結果とを見れば國民も亦一箇人と均しく假令何程強健なるも外部の活動を掣肘せられ且内部の勢力を維持すべき要素を消磨するときは速かに零落するに至るを知るへし既に上文に述べたりし如く國民は國民を離れて孤立生存する能はず必ずや他の國民と相交通せざるへからず而して他の國民と交通を保ち且つ

其國強力を更張するの最も容易なる方法は他無し唯海上權力を得るに在るのみ。

○第五編

西班牙王位繼承の戦役(自一七一〇年—一七二一年)

マラガの海戦

第十七世紀の末凡そ三十年間は總へて是れ歐洲列國海陸軍及ひ外交政略の争闘に外ならざりしか此間に於て將來非常の新結果を現出すへき一事件の起り來らむとするとは明かに先見せられたりき其非常事件とは何ぞや曰く他無し當時西班牙王位に在る所の國君即ち埃地利家の直系繼承者將さに斷絶せむとする是也即ち此時身神羸弱にして後嗣無き西班牙現王にして崩殂せむには之に代りて新君主たらむ者は果して誰たるべき或は之をボルボン家より撰ふへき乎或は日耳曼に於る埃地利家より採るへき乎是れ實に一大問題たりしなり而して之と同時に其王位繼承者は其前代君主の遺産全部即ち西班牙全帝國を相續すへき者なる乎或は單に其廣大なる領域の一部のみを繼續襲領せ

しむべき乎の問題も亦之を歐洲列國權力平均の利害に考へて之を決せざるへからず爰に吾人が權力平均と云ふは是より先き歐洲大陸領地のみに止まりたる所の狹隘なる意味に於てするに非ずして商業航海業の新配置及び太平洋并に地中海の制海權等より生ずる結果をも包含せるものなり而して是等兩海海上權の勢力及び其利害の性質は歳を逐て益々其明瞭を加へ來れり。

爰に今や將さに決せむとする戰畧問題を了解せむと欲せば吾人は當時西班牙の所領は何々の邦國何々地方なりし乎を回想するを要す即ち其所領は歐洲に在りてはチーデルランド(今の白耳義)チーブルス及び伊太利の南部ミラン及び他の北部諸州地中海に在りてはシ、リ、島サルシニヤ及びパリアリツ島を包有せり但しコルシカは當時セノアに附屬せり又西半球に於てはキューバ島及びポルトリコ島は勿論尙ほ其他に現時西班牙亞米利加諸邦の間に分割せられ將來に於ては大商業地たるへしと認めらるゝ該大陸の部分は當時皆西班牙の所領たり此他亞細亞群島中にも巨大なる領土を有せしと雖も此等は本題に關する所少きを以て今爰に之を説かず是より先き西班牙國は其中央王國の衰退の爲めに非常に微弱なりしか故に他の歐洲列國は此時に至るまで西班牙の此廣

大なる領土を輕視せり然れども將來西班牙が歐洲の一強國と同盟して其後援を得以て一層其施設を鞏固にせむとするに至りては他の歐洲列國は決して之を等閑に附し従前の如く輕視する能はざりしなり。

抑も當時歐洲に於て流行せる所の列國權力平均の計畧として其各處に於る土地人民を甲帝國乙王國の間に頻々更換轉移し以て平和の間に政治均勢を得せしめむとする外交手段を爰に詳説するは本題に對して必要なかるべきを以て吾人は唯爰に當時各國政略の骨子を左に擧げて止まむとす即ち當時西班牙内閣及び其國民は帝國を分裂せしむべき總ての分割方法に反抗し蘭英二國は佛國か西領チーデルランドに於て其領土を擴め又西領亞米利加貿易に於て專占權を得るとを拒めり蓋し此二事は共にボルボン王家をして西班牙王位を得せしむるの結果を生ずるの恐ありたればなりルイ十四世は若し此分割にして行はるゝことを得ばチーブルス及びシ、リ、島を其一子に割與し地中海上の好地位を得むとを欲せり然れども此希望たる海上權力の獨り左右し得へき所にして苟も之に依らずむは決して其望を達するを得ずウリアム三世早く已に茲に見る所あり安むして此要求を承諾せむとせり然るに煥皇帝は是等地中海の好地位をして其家族

の手裡より脱せしむるを肯せず分割條約に對して絶對的に反對を表せり是等の處理未
 た一も完成せざるに當り偶々西班牙國王は逝去せり其死に先たち西國大臣等は王に迫
 りて一遺書を作らしめ是に由りルイ十四世の孫當時のアンソヨール公即ち後の西班牙王
 フカリッソ五世に全帝國を傳へたり蓋し西國は此手段に依り歐洲強國の一にして又自
 國に最近なる一邦國を攪き以て自國の防衛と爲さんと望みたるなり噫西人は佛國を以
 て最近國と爲せり然れども是れ海洋を支配する邦國を除きたる場合に於てのみ之を言
 ふことを得べきものにして海洋を支配する國に在りては距離の遠近の如きは殆ど問ふ
 を要せず苟も其船舶の通すへき港灣あらむか是れ最も我に近接せるものなり。

ルイは此遺産を受くるを承諾し而かも同時に西班牙領地の分割に關する諸企圖を排止
 せざる可からざるを感せり此の如く兩王國の一家族の下に結合せらるゝは將來佛國
 の爲に大利益たること言ふを俟たす何となれば從來佛國は其後方の敵國の爲めに東境
 の擴張を妨けられしも今や一朝其掣肘を脱し全く後顧の恐なきに至りたればなり而し
 て其後實際に於て佛西兩國は其親族關係の結果として常に相同盟し殆むど之を破るこ
 となかりき唯その實際上歐洲諸國に危険を被及すること無かりし所以は單に西國の衰

弱不振なりしに由れるのみ苟も西國にして少しく其勢を増し來らむ乎歐洲列國は決し
 て枕を高ふするを得ざるに至らむと必せり而かも今や他の歐洲各國は忽ち形勢の危殆
 を認知し若し此際佛王にして謙遜的方針に出でるときは直ちに戰亂を惹起すへきの
 勢と爲れり是に於て危機一發戰亂將に起らむとし而して其戰爭は一に蘭英兩國の富力
 に依らざるへからさりき此時是等蘭英兩國の政治家は提議を爲して曰く伊太利諸州は
 之を埃國皇子に與へむ白耳義は蘭英兩國之を占有せむ又西班牙の新王は印度に於る商
 業に關し他の歐洲列國に與ふる所の各般權利よりも大なる特權を佛國に賦與するとな
 かるへしと案するに上述の提議を案出せる蘭英政治家の技倆は大に賞揚するに足る者
 あり實際上此等提議は是より以降十餘年の戰亂後に及て果して其大躰上最良の政略た
 るとを發見せられたり此等の點を熟視するときは海上よりする所の國力の膨張なる者
 か歐洲に於て歳を逐て彌々重視せらるゝに至れるとを知るへきなり然れどもルイは此
 提議に従ふとを肯むせず否な單に肯むせざるのみならず彼は西班牙政府の默許に依り
 和蘭軍か西班牙との條約に依りて保有せるチーデルランドの諸市を占領せり其後幾何
 もなく一七〇一年正月英國議會は召集せられ乃ち英國は斷然地中海上の領土に關して

嘗て佛國に約せる總ての條約を破棄したり(和蘭)も亦兵備を整へ(埃國)は其兵を進めて北部以太利に入らしめ尋て此方面に一戰鬪を開きしかルイの兵は大に敗れたり。此年(一七〇一年)九月蘭英兩海國及び埃帝は一の(秘密條約)を結ひ西班牙半島の戰爭に關するもの、外更らに將來歐洲の戰鬪に關する作戰計畫の大畧を定めたり此條約に由り同盟國は蘭佛兩國間に於て障壁を造らむか爲め西領チーデルランドを征服し又埃帝の國外領土を安固ならしめむか爲めミランを征服し此目的及び蘭英二國臣民の航業商業保安の爲めチーブルス及びシン、リ島を征服せむことを謀れり又兩海國は互に商業及び航業の利益の爲め西領印度に於る州郡市町等を征服することを認許し且つ其占有したる地方を其有と爲すべきことを約せり是に於て三國の同盟成立し戰爭は此情況に於て開始せられむとす然れども同盟國中孰れの一邦に在りても他の力を假らずして獨力能く戰を爲すとを得ず又正當の豫算成立するに非されは之を行ふ能はざりしなり而かも其目的とせる所は第一佛西兩國か一君主の下に結合せらるゝは何等の場合に於ても常に之を妨ぐべし第二佛國か西領印度の主權を握り又其船舶を遣りて直接間接に商業に従事するは何等の場合に於ても亦之を妨ぐべし第三蘭英二國の臣民は前西班牙王の

治世の間該國に於て得たる商業上の特權を確保すべしと此三件に在りたりき。茲に注意すべきは此等條件中に當初西國政府の推立し蘭英兩國の承認せるボルホン家君主の權位に關して拒否の條件を包まざること是なり然れども獨り埃帝に在りては自身至大の關係を有せるものなるか故に決して其從來の主張を放棄することなかりき此同盟に於て其陸戰に關しては日耳曼軍の兵力に依らざるへからず隨て日耳曼の要求をも亦之を考察せざるへからざりしならむ然るに此條約の條項に於て特に商業上の利益を保護せるを見れば當時蘭英二海國の主張は最も歐洲列國の爲めに重視せられたるとを推知すべし佛國一史家の摘示する所に據れば

是れ實際分割の新條約なりき(中略)ウリアム三世は全局を指揮せるか王は埃帝をして西班牙王國を回復せしむるか爲め蘭英二國の國力を疲弊せしむることなきを期したり而してウリアムの提議せる終局の條件は新王フリップを貶して單に西班牙本土を領せしめ且つ蘭英兩國をして西班牙領下の各地に於る商業上の利益を確收せしめ併せて佛國に對する陸海軍戰略上重要な場所を得せしめむとするに在りき。(マルタン氏佛國史)

此の如く戦争の氣運は切迫せりと雖も同盟諸國は尙ほ躊躇して容易に起たず和蘭は英國と共にするに非されは敢て發せず又英國は佛國に對し非常の惡感を抱きたりと雖も其商工業者は尙ほ前回戦争の爲めに榮りたる大損害を忘れず爲めに逡巡する所あり斯の如く歐洲政界の天候は陰晴未だ決せざるに際し偶々ゼームス二世逝去せり此時ルイは坐るに同情を催し又其近親の勸告に由り公然ゼームスの子を以て英國王と認めたりしか英國人民は此舉を以て佛國王か凌辱を英國に加ふるものと爲し大に激昂し其謹慎なる思慮を放棄するに至れり上院は「西班牙の篡奪者をして其罪に服せしむるに非れば國家の安寧は保ち難し」と宣言し下院は五萬の陸兵と三萬の海兵を整へ別に日耳曼及び丁抹の補助軍に援兵を送るべきとを議決せり其後忽ちにして一七〇二年三月ウヰリアム三世崩し女王アンに繼ぎて立ちしかアンは前王の政略を襲ひ此政略は蘭英兩國人民の共に準據する所と爲れり。

ルイ十四世は日耳曼列國中に於て局外中立同盟を作り戦亂を未發に防止せむとを企圖したり然れども煥帝は敏捷に日耳曼の感情を利用しブランデンブルク侯を認めて普魯西王と爲し以て自黨に加らしめ爰に北部日耳曼新教王家は創設せられたり何ぞ圖らむ

將來他の新教諸邦は自然に集りて此王國に歸し而かも四五十年の後、煥國に對する強國と爲るに至らむとは今回の事件の起れる所以は固と西佛兩國に對するものなるを以て是等兩國は僅かに彼のペ、リアの援助を得たるのみにして其他一の同盟もなく單行獨立戦闘に従事するに至れり此歳五月和蘭は佛西兩國王に對して戦を宣言し英國は兩國王に對せしして佛西兩國に對して宣戦せり蓋しアンは大にフリップのゼームス三世を英國王と認めたるを怒りしか故に宣戦を爲すに方りてもフリップを西國王と認むることを断して肯せざりしなり而して煥帝に至りては特に甚しく帝は佛國王及びアンマヨール侯に對して宣戦せり此に於てか歴史上有名なる西班牙王位繼承の大戦争は始められり。

其區域殆むと全歐に涉り其歲月凡そ十餘年に亘れる此一大戦争を茲に叙述するに當りて全般事歴の中より特に本書の主旨に關する重要なる部分のみを摘出し而かも此部分と全体との關係を失はざらしめむとするは頗る難事たり然れども此困難を排し極力此事を努めずむは本書の研究せむとする目的は遂に達せられざるに至らむとす何ぞなれば吾人は單に海事に關する事蹟の編年史を草せむとするに非ず又一般歴史に於る原因

結果の關係を離れて單に或海事問題の戰術的若くは兵器的紛争のみを決せむとする者に非ず吾人の目的とする所は實に海上權力なる者の戦争全局に及ぼす結果及び其國民の隆替に及ぼす効能如何を研究するに在るを以てなり吾人今爰にウヰリアム三世の企圖せる所を再言せば當時の事情を明かにするに便なるへし即ち王は西班牙王位に對するフヰリップ五世の要求是は海權力に對しては其關係比較的になかりし故に反抗せざりき然れどもウヰリアムは自國商業の利益の爲め及び自國植民政策の利益の爲めに西領亞米利加の諸部を得むと欲し且つ西班牙新王國に課するに或條件を以てし是に由りて少くとも蘭英二國が塊太利家帝系の西班牙先王時代に於て既に之を占有せる特權を失はざらむことを努めたり此の如き政略に據れば海國民の精神は寧ろ主として米國に向ひ西班牙半島上には傾注せられざるへく且つ聯合艦隊も海峡を經過して西班牙海岸に到るの理なかるへく又シ、リ島及チーブルスは英國に歸せずして埃國に歸すへかりしなり然るに此後或原因より此全般の計畫は全然變更せらるゝに至れり即ち一七〇三年日耳曼皇帝の一子は同盟國に推されて新候補者と爲りカール三世と稱し西班牙半島海岸には蘭英艦隊常に来りて徘徊し該半島は爲めに修羅の巷と爲れり而して其

海上權力に及ぼせる結果を畧述すれば西領亞米利加に於ては重要な事件の起ること無かりしも他の一方に於て英國は之が爲めにツララルター及びマホン港を其手裡に握收したるか故に爾來英國は地中海の一強國と爲ることを得たりカール三世の西國王として宣言せらるゝや英國は之れと同時に葡萄牙と一條約を締結せり是れ世に所謂メツエン條約なり此條約に因り英國は實際葡萄牙國商業の獨占權を得且つブラシル産の黄金はリスボンを経て倫敦に送達せらるゝに至りしか此利益たる實に莫大なるものにして大陸戦争を繼續するに於ても又海軍を維持するに於ても實質上非常の財源と爲れり之と同時に海軍の力大に増加したるか故に當時海上に於る佛國巡洋私艦の英國商船に加ふる損害は大なりしにも拘はらず今や英國は之に苦惱することの甚しきを覺へざるに至れり。

戦争の破裂するやウヰリアム三世は其初志を貫徹せむとして海軍中將ジョージ・ロークに命し五十隻の戦列艦より成れる艦隊と一萬四千の兵を搭載せる運送船とを帥めてカヂスに向はしめたり蓋しカヂス港は當時西領亞米利加の商業に對する歐洲の一大中心にして西半球の正金及び其他の諸物産は一旦此港に集り而して後歐洲を通して散布せ

られたるものなりウヰリアムは此外尙ほ西半球に於る西領亞米利加貿易の一要素たるカルタマナ港をも略有せむと欲し其死に先づ六ヶ月即ち一七〇一年九月其海軍の勇將ベンボーをして一艦隊を帥み之に向はしめたりベンボーは偶々カルタマナの援助防守の爲め派遣せられたる佛國の艦隊に會し該地の北方に於て開戦せり然るに其優勢なりしに拘はらず部下の艦長數名彼れに叛して戦に從はさりしか故にベンボーは遂に其企畫を水泡に歸せしめ其艦は遂に救ふへからざるの損害を蒙り其身も亦重傷を蒙るに至る迄血戦せしも佛軍は遂に通逃しカルタマナは安全なるを得たりベンボーは其死するの前佛國艦隊代將官より一書を受取り其意に曰く「昨や僕唯貴兄とケビンに於て共に會食するの榮を得むことを望めるのみ豈他あらむや若し夫れ君が部下の卑怯未練なる艦長等の如きに至りては罪實に死に當る須らく神明を仰き之を絞殺す可し」と而して其二人は實際絞罪に處せられたりカチスに對する英將ルークの遠征も亦失敗せしか是れ初めより殆むと成算無かりしものなり何となれば彼は西班牙人民を降服せしめ且つ彼等をしてボルボン家の王を嫌厭するに至らしむへしとの命を受け常に此の曖昧朦朧たる訓令の爲めに拘束せられたればなり然るにルークは此失策の後に際し偶々銀及び其

他の商品を搭載せる西班牙船が佛國軍艦に護衛せられて西印度より來りツイゴイ灣に入れることを探知せしか故にルークは直ちに轉して之れに向ひたるに果して敵船の港内に碇泊せるを發見せり然るに其港口は僅かに一哩の四分の三に過ぎず且つ之を固むるに砲臺並に防材と鐵鎖とを以てせり危險此の如きも敢て之に屈撓せずして同將官は能く敵の砲撃を冒し鐵鎖及び防材を破りて突進し遂に之を陥れ多量の正金を積載せる船舶を捕獲擧沈して殆むと一隻たも遺さず是れ實に歴史上ツイゴイ港殲滅事件と稱せらるゝものにして固より有趣にして又赫々たる一武勳たりと雖も唯西佛兩國の財富と名聲とを害したるに止り而かも特別に説述すべき軍事的特標あるに非ず。

ツイゴイ港事件は軍事上に影響を及ぼせること大ならざりしと雖も之が爲に重大なる政治的結果を生し既に述べたる海上權力の全般計畫に變更を來さしめたること尠ならず即ち其著るしきものを擧ぐれば是れより先き葡國王は佛國の威力を怖れてフナッア第五世を承認したりと雖も竊に此強國の漸く侵入し來るとを恐る此時に方り葡國王を誘ふて佛西兩國と其同盟を分離せしむると英將ルーク任務の一部なりしか今や葡王は自國々境の近港に於てツイゴイ港事件の起れるを見同盟海軍勢力の偉大なるを感

知するに至れり事實に於て葡萄牙は西班牙に接する距離よりも却て海洋に近く隨て其海上を管制する強國の勢力を被受せざるを得ず是を以て諸國は葡王に對し勸誘を施せり即ち埃帝は之に西國領土の若干部分を讓與せむと云ひ兩海國は之に保助金を供せむと説けり然れども葡王は此際尙ほ兩端を抱き而かも埃國家の要求者カリスボンに上陸し同盟諸國が半島並に大陸に於て堂々として戰に従ふに至れる迄は公然其勸誘に従ふことを肯せさりき既にして埃帝は其諸要求を第二子チャールズに移しチャールズは即ちカールス三世なることを知るへしは維也納に於て先づ蘭英兩國の承認を受けたる後同盟艦隊に護衛せられてリスボンに到り一八〇四年三月を以て茲に上陸せり於て海上權力上の企畫は重大なる變更を要するに至れり蓋し其艦隊は爾來カールスを衛るが爲め又其商業を保護するが爲め常に半島の海岸を離るゝを得ず而かも西印度に於る戰爭は些々たる小鬪と爲り何等の効果をも生せず此時より葡萄牙は深く英吉利と相結托し英吉利は此戰爭の間に於て非常に其海上權力を増し諸競爭者を壓倒するを得たり當時葡萄牙の諸港は英國艦隊の避難所にして又其保護地たりしか後年英國は那翁と大に半島戰爭を爲すに當り此國を以て其根據地と爲したり爾來凡そ一百年間葡

牙は英國に依り利益を受けたること尤も多く又之を畏れたること尤も甚しかりき蘭英兩海國に至大なる海上權力か此戰爭の全結果に及ぼせる効力殊に此後一世紀間海上に獨歩せる英國に及ぼせる効力は實に驚くべきものありと雖も軍事的趣味を有する海上の活動乃ち海戰なるものは此戰爭中に於ては一も之を見ると能はざるなり唯一回彼此大艦隊の會せることありしも確乎たる勝敗の結果を生ずること無くして止みぬ而かも其後佛蘭西は海上の爭鬪を止めて専ら商業撲滅策の履行に従事せり西班牙王位繼承の亂に於る此現象は殆ど十八世紀全躰の特性とも云ふべきものにして唯其例外なるは亞米利加革命戰爭の一のみ當時海國の行へる所は専ら陰險執拗を以て而かも敵を困弊せしむることを勉めたりき即ち或は敵の資糧を遮斷し或は陰微の間に於て或は背後より敵を襲撃するを務め而かも公然の攻撃を加ふるか如きは殆むと稀なり此事たる世間多數人の等閑に看過する所なりと雖も苟くも能く慎重に此戰爭中の諸事件を觀察し又此後半世紀間の事件に能く注視する讀者は必ず之を剴切に感知するならむ英國の卓絶なる海上權力は此時代に於る歐洲歴史の由りて以て決定せらるゝ大要素にして該國は之に頼り外は能く其戰を維持し内は其國民の繁榮を保ち現時吾人の見るか如き大

帝國を建設するに至り然れども當時英國の働作は常に反對を避くるに在りたるを以て其真正の偉大は往々世人の注目を脱すると無しとせず而かも其戦に與れるは甚だ僅少の場合のみなりと雖も苟も之に關せる場合に於ては他國の艦隊に對して非常の優勢を表はし恰かも猛鯨の蝦群に對するると一般にして而かも之を戦争と稱するを得ざる程なりき是を以てミノルカ島に於る英將ヒングの働きとキペロン灣に於る英將ホークの働きとを除く外は一七〇〇年乃至一七七八年の間は英國艦隊に對して同等の勢力を有する敵艦隊との間に於て軍事的趣味ある一大決戦の起れるとは一も之れ無しと謂ふて可なり。

蓋し西班牙王位繼承の亂は其特性此の如くなるか故に吾人が研究の主意より之を觀察せば唯其概要殊に艦隊運動の概要を説くに止め其他を詳説するの必要なきか如しアラバ、日耳曼及び伊太利に於る戦争は固より海軍に關係無し而かも是等大陸の同盟諸國は同盟國の商業を保護し陸戦を維持するか爲めに蘭英兩國より受くる所の援助金の流通支辨に障礙を來さしめるときは同盟の規約に對する義務を盡したるものなりと雖も西班牙半島に於ては其事態大に之と異なるものありカール三世のリスボンに

上陸するや英將ルークは直にバルセロナ港に向て出帆せり蓋しルークは同盟艦隊到着と同時に此地の歸順すへきを豫想せしに事全く意外に出て同港府知事は西國王に對し忠義を守り直ちに埃國黨を拒みて之を斥けたり是に於てルークは已むを得ず佛國艦隊の碇泊せるツィロンに向て航行し途に佛國一艦隊のプレストより來るに會し直ちに之を尾撃せるも遂に追及する能はず故に敵の兩艦隊はツィロン港内に連合するを得たり茲に注意すへきは英國海軍か冬期佛國諸港を封鎖するは此より遙かに歲月を経て後常に慣用せる所と爲れりと雖も當時ルークの頃迄は未だ此の計畫を爲さざりしことにして此時代に於ては艦隊も亦陸軍の如く冬期休戦を行ふを常とせり。

是より先き英國少將クラウズレイ、シヨヴェルは春時に於てプレストを封鎖する爲め派遣せられたりしか惜い哉其之に達すると遅かりしか爲め敵艦隊は夙く已に他に出て去りて其跡なし於是彼は直ちに地中海に向て進行せり又中將ルークは此際優勢なる佛國の聯合艦隊に敵し難きとを自から覺りたりしか故に一と先づ英吉利水道に向て退却せり何となれば當時英國は未だ地中海上に於て一の港灣を有せず一の根據地を有せず且つ又恃むへき同盟もなく其最退の避難所は彼のリスボンなりしを以てなり然るに此時

退帆の途中ルークはラゴス沖に於て偶然にシヨヴェル少將と相會し爰に軍議を開きし
 か中將ルークはシヨヴェルに向ひて自己は本國政府より西班牙及び葡萄牙兩國王の同
 意を得るに非されは何事をも企行すべからざるの命令を帶ふるものなることを告げた
 り此の如き英國政府の命令は是れ實に海上權力を束縛するの甚たしきものなりしなり
 然れども此時ルークは脾肉の慨嘆に堪えず又碌々事を成すなくして空しく國に歸るを
 恥ぢ三理由に因つてシブラルターを攻撃せむと決心せり三理由とは何ぞ曰く第一シブ
 ラルターの守備充分ならざる事實を聞きたる第二該地は現在の戦争に對し非常に緊
 要なる港たる第三之を占領せば英王軍隊の威名を回復するを得べきと是れなり此に
 於てシブラルターは英軍の爲めに攻撃せられ砲撃せられ次て陸戦隊の突入を受け遂に
 陥略せられたり是れ實に一七〇四年八月四日にして英國は此時以來之を領有するに至
 れり此偉蹟はルークの英名を無窮に傳ふるものにして英國か地中海の鎖鑰を得たるは
 一にルークの英斷と其責任に對する勇毅とに由らすむはあらず
 ホルボン家の西班牙王は直ちに之れか回復策を回らしツィロメに在る佛蘭西艦隊を招
 きて其攻撃を助けしめたり然るに佛國の名將ツィルヴェル氏は已に一七〇一年に死去

したるを以てルイ第十四世の庶子にして僅に二十六歳なるツィルリス伯該艦隊を指揮
 したりルークも亦東方に進み兩艦隊は八月二十四日を以てヴェレッツマラガ沖に於て相會
 せしか同盟艦隊は東北風を受けて上風に在り兩艦隊は船首を北東及び東方に向け左舷
 に開きて進航せり双方の艦數其多寡如何は未だ詳らかならざるも佛軍は五十二隻の戰
 列艦を有し敵は之に超ゆる五六隻なりしと云ふ同盟軍は各艦個々其の敵に向ひて戰を
 爲しルークは些しも戰術的操縱を保たむと務むることなかりしや明なり要之マラガの
 海戰は別に軍事的趣味を有するものに非ず唯彼のクラーク氏の批評せる如く全然非學
 理的戰鬪方法即ち第十八世紀を通して流行せる戰鬪方法か英人の能力に藉り充分發達
 を爲せることを始めて表示する所の第一戰たるのみ茲に注意すべき點は他無し苟も戰
 争にして同様の主義に據れるものは其結果皆同一般に出で些も異なる所なかりしこと
 是れなり此戰に於て先隊は中軍と離れて一大間隙を生し而して佛軍は此間隙に突進し
 以て先隊を孤立せしめむと企てたり蓋し此運動たる佛人の爲せる唯一の戰術的運動な
 りき吾人はマラガ戰鬪に於ては愼密巧妙なる戰術の形跡は一も之を看出す能はずマラ
 ガの海戰は往昔の諸名將モンク氏ルイテル氏ツィルヴェル氏等の行へる良好なる艦船

結合の時代より寧ろ一轉して徒らに堅忍勇を恃む所の單純なる海員的時代に退歩せ
ることを明示するものにして唯歴史的記述の必要を有するのみ嘗てマコーレー氏か之を
詠し且つ多年英國海軍の理想と爲りたる所の彼の原始的戰闘方法は此戰に於て恰かも
實行せられたり其時に曰く

兩軍陣を整へて進め進めの令響く手に揮る鎗や肩の楯進む歩兵そ勇ましき敵を蹄に
蹴散らして進む騎兵そ勇ましき兩軍今は入り亂れ短兵急に戦へは屍の山に血の泉修
羅の衝そすさまじき

人事は概して進歩的のものなれども時に或は退歩すること無きに非ず今日に於て尙ほ
多少此種の理想に類似せるもの、往々其痕跡を海軍定刊雜誌に見はすことあり願ふに
マラガの海戦は頗る激烈にして朝十時より午後五時に及び其間凡そ七時間の長きに亘
りたりと雖も勝敗全く不決着にして終れり翌日風向一變し佛艦は爲めに上風に立つ
を得たれども彼等は此好時機を利用して攻撃を加ふることを爲さざりき此事たる佛國
人の大失錯大耻辱とも謂ふべきものにして彼等か前日の戰闘は自己の勝利に歸せりと
主張するは假令充分根據有るものとすも尙ほ此大失錯あるか爲め其名譽は大に毀損

せらるゝを免れず蓋しルークは此日又戦ふの餘力を有せざりしならむ其所以は他無し
世の傳る所に據れば同盟艦隊の半數二十五隻は既に全く其彈藥を用ひ盡し就中數隻の
同盟軍艦の如きは前日の戰闘に於て業に己に唯一回の一齊放火に用ふべき彈藥砲丸を
も残さず之か爲めに戰闘線外に退去するの止むを得ざるに至れりと云ふ是れシナラル
ターの攻撃に際し凡そ一萬五千餘の彈丸を費し且つ軍用品を供給すべき根據地を缺き
たるに由るなり然れども英國は此戰争に由り新にシナラルターを占得したるを以て爾
後に於ては此種の缺乏に苦むとを免るゝに至れりルークのシナラルターを占領したる
は我北米合衆國か近世内亂の初めに當りポートローヤル港を得むと欲し昔日パーマ公
か千五百年代無敵艦隊を發するに先ち西班牙王に説き和蘭の海岸に於てフラッシング
港を奪取せむと欲したると同様の目的に出でたるものにして而かも當時若し西班牙王
をして能く該公の勸めに従はしめは英國の北部に向て彼れか如き悲惨にして且つ多禍
なる航海を爲すの必要無かりしなる可し是と同一の理由に由り將來若し我米國の海岸
に對し最も有害なる運動を試みむと欲する敵國は必ず先つガーチナー灣若くはポート
ローヤル港の如き大中心にして且つ我國防禦の豫しめ嚴整なるとを察知すべき港灣を

離れ且つ敵軍進攻に便なる要所を奪取するとを務むべきや疑を容れず而して此等要所は容易に其敵艦隊を以て之を保持し得るならむ何となれば我米國海軍は不完全なるを以てなり。

ルーク中將は途上に於て其糧食彈藥にして艦隊より節省し得べきものは悉皆之をシブラルターに残し平穩にリスボンに退却せり而かも佛將ツールース伯は其勝機(若し然りとせば)に乗せず唯シブラルターの攻撃を持續する爲めに僅かに十隻の戦列艦を遣りたるのみにして自から其他の艦隊を率ゐてツェロンに退却せり……既にして佛蘭西のシブラルター攻撃は徒らに瑣末無用の事に勞苦したるものにして一も觀るに足るべきの効果無きのみならず之を圍める艦隊は遂に逆撃破壊せられて大敗し陸上攻撃は變じて封港と爲れり佛國の一海軍士官は其著書佛國海軍大佐ラベルニス、ボンホルス氏著佛國海軍史に於て嘗て當時の實況を批評して言へるとあり曰く「此敗北の不幸以來憂ふべき海軍反對説は佛國人民間に勃興せり是より先き佛國の爲めに海軍の成せる偉績と其宏大なる任務効用とは共に之を忘れて顧みる者なく其價値を説くも復た之を信せず佛國民と一層直接に接觸せる陸軍は其好意と同情とを專收し佛國の興廢存亡は純に唯ラ

イン北方某地の得喪に繫れるものと信認するか如き誤説一般に蔓延し爲めに徒らに海軍任務に反抗する是等反對の觀念を増長せしめ而かも其實英國の強大と爲り我佛國の衰弱と爲りたる所以は是れ其海軍力の強弱如何に由るものたることを覺らさしめたり

此歳一七〇四年有名なるブレンハイムの戦ありしか佛國及びバツアリアの陸軍は英將マールボル公爵と煥將ユーシオン公の帥ゐたる英獨兩軍の爲めに全く撃破せられたり其結果としてバツアリアは佛國の同盟を離れ日耳曼は一般戦争の中心たることを脱し戦争は此後主としてチーデルランド、伊太利及びピレニース半島に於て行はるゝに至れり翌年一七〇五年同盟軍は二道より進みて專はラフネリッパ五世に對し即ち一はリスボンより一はバルセロナよりリスボンに向へりリスボンより爲せる攻撃は元來其基礎を海上に取りしも主として陸上に依りて之を行ひしか終に何等の結果をも得る能はさき而かも此地方に於る西班牙人は外國の擁立に係る國王を肯て歓迎せざるの決心を明白に表示したり然るにカタロニア港に於ては大に其事態を異にし當時カール三世は躬親ら同盟艦隊と共に此地に來りしか少數なる佛國海軍は深く同港内に閉居し其陸軍

も亦た敢て現はれ来らざりき是に於て同盟陸軍は其市街を圍み三千の水夫は艦隊より上陸して之を助け百般の軍需品も亦た艦隊より之を供給し即ち艦隊は陸軍に對する供給の根據にして又通信の利器たりしなり十月九日バルセロナ遂に降服しカタロニア全州は擧てカールスを歡待するに至れり之に反してアラゴン州の首府ヴァレンシアは此際カールスに對して反抗せるを以て同盟軍は進て之を鎮壓せむと企てたり。翌一七〇六年佛國は一面其陸兵を以て葡萄牙に通ずる山上の隘路を防守し他の方面に於て海軍を以てカタロニア州境より西班牙を攻撃せり當時同盟艦隊は既に去り從來之を供給支持せる援軍も亦在らざりしか故に同州海岸地方の抵抗は甚た薄弱なりき佛海軍は此處に乘して急にバルセロナ港を圍むの手段を取り此際戦列艦三十隻より成れる佛國艦隊はツローン港の隣港より軍需品を取り來れる多數の運送船と共に來りて入港し同市内に在る西班牙軍隊及び居住人民の佛國に黨する者を援助して之を圍めり此包圍は四月五日を以て始まり其初勢は大に望を屬すへきものあり而かも此時埃國派の君位要求者即ちカールス三世は實に此國中に在りしか故に陥落の日に至らば同要求者は佛軍の俘獲と爲るへきの望みありしなり然るに豈に料らむや五月十日優勢なる同盟艦

隊の同港に來着せむとは佛艦隊は大に驚き倉皇として錨を拔て去り重圍は混亂の間に解かれたり是に於てボルボン派王位要求者即ちフカリッポ五世は之か爲に復たアラゴンに留る能はず其領地を敵に委ねて遠く退きルーションを経て佛國に出奔せり之と同時に蘭英埃同盟軍の他の一軍は海上艦隊の援助に支持せられて葡萄牙の方面より進み來れり蓋し當時葡國は蘭英二國の海上權力か之を支配し又之を利用せる所の無双の根據地なりしなり此際西方の攻撃は一層好果を得エストレマデラ及ヒレオンに於る數多の市街は陥落し且つ同盟軍の諸將はバルセロナの包圍解撤せられたることを聞くと直ちに急行してサラマンカを經マドリッドに向て其兵を進めたりフカリッポ五世は一時佛國に逃走したる後又西部ビレニースを經て西班牙に歸り來りしも同盟軍の彌々進み近くを見て再び其首府を棄て、出奔せざる可らざるに至れり一七〇六年六月二十六日葡萄牙軍並に同盟軍はマドリッド府に入り同盟艦隊はバルセロナの陥落後更に進みてアリカント港及びカルタタナ港を攻圍せり。

同盟軍は此の如く着々其歩武を進め來りしと雖も其將帥は尙ほ西班牙人の性質を誤解し且西班牙國自然の形勢に由りて支持せられたる彼等の目的及自負心を未だ悟らざり

き西國人民の葡萄牙人に對する國民的厭惡心は熱發勃興し且つ英の陸軍將官自身も亦「ピューゲノット」派の避難者たる故を以て西班牙人か宗教上異端に對するの憎惡は勃然として興起したり是に於てマドリッド及び其附近の人民は皆英葡人を嫌惡し隨て同盟軍に和馴せず南部人民はホルボン王に誓を送りて忠節を誓へり今や如此其首府は殆むと敵地に均しく之に加ふるに其近傍の地は特に軍需品資物に乏しくして而かも擾亂絶えざるを以て同盟軍は長く首府に止まる能はず遂に東方に退却しアラゴンに在る所の埃家派要求者に近づくに至れり且つ此際又凶變相繼きて起り同盟軍は一七〇七年四月十五日アラマンサに於て慘刻なる大敗北に陥り一萬五千の兵を亡失せり此大敗の結果として西班牙は再ひフカリップ五世の手裡に落ち唯僅かに残れる所の者はカタロニア州の若干部分のみと爲れり翌一七〇八年佛軍は同方面に進軍せしもバルセロナを攻撃すること能はさりき然れどもヴァレンシア及びアリカントは終に佛軍の征服する所と爲れり。

一七〇七年に於ては海軍事件の一も擧ぐるに足るべき緊要なる者無し此歳の夏地中海に於る同盟艦隊は埃人及びピードモント人の行へるツィロン攻撃を助けむか爲め西班牙海岸より轉して之に赴むき即ちピードモント人は地中海岸に沿ふて伊太利より進み同盟艦隊は海上より側面を助け且つ軍需品を供給せりと雖も此役の包圍は失敗し一も其進攻の結果を收むる能はずして止めり此役に與かりたる英國艦隊の少將クラウズン、シヨトツェルは數隻の戦列艦を帥る此歳十月本國に向て歸帆する途中シ、リ島附近に於て同月廿七日夜非常の暴風波に遭ふて破船と共に溺死せり是れ實に歴史上著名なる大難破船の一なりき。

一七〇八年同盟艦隊はサルヂニア島を奪取せるか此島は甚た豊富にして且つバルセロナ港に近接せるか故に埃派主張者か同盟國の援助に依り海上に權勢を揮へる間は彼か爲めに富饒なる倉庫と爲れり同年ミノルカ島も亦た其要港マホンと共に英軍の手に略取せられ爾來凡そ五十年間英國の管下に在りたりき是に於てシアラルターはカヂスカルダチナの鎖鑰を握りマホン港はツィロンと相對せるか爲めに英國艦隊は此後地中海に於て強固なる根據を占むると佛西兩國に匹敵し以て能く佛西兩國と互に相角逐馳騁するを得るに至れり之に加ふるに葡萄牙は其同盟國たるか故に英國はリスボン及びシアラルターの兩要鎮を左右に控制主管し以て能く大洋及び内海の通商航路を監視せ

り此歳の末に及びて佛國は海陸の災害並ひ起り國內は非常の困弊に陥り戦争は唯佛國を衰微せしむるのみにして英國は些も痛痒を感せず然るに尙ほ此般の戦争を繼續するとは殆むと望なきに至れり於是ルイ十四世は遂に憤を忍び節を屈して非常の讓歩を爲し講和を得むことを希望しボルボン王フカリップ五世の爲めに唯チープルスを保ちし其餘は全西班牙王國を放棄すへしと提議せり然るに同盟諸國は之を拒みて敢て承諾せず果して講和を欲せばアンソヨイ公は宜しく其王號を放棄すへく且つ全西班牙帝國を放棄して一も殘す所なかるへしと主張し之に加ふるに佛國自身をして零落に陥らしむへき過重の條件を提出せりルイ十四世に屈辱此の如き條件に屈從するを得むや是を以て戦争は又進行せり。

此時より以後此戦亂の繼續年間に於る同盟國の海上權力の剛勇なる働作は殆むと唯英國の力に依り和蘭か僅かに之を助けたるのみにして其勇往的活動は前日の如き者有らざりき然れども其海上權の効力の實在は依然として變せず是れより先き埃家派の王位要求者は概ねカタロニアに籠居せしも英國艦隊に依りサルヂニア並に埃領伊太利と交通を保つとを得たり然れども其後佛國海軍は全く其跡を絶ちルイ王が海上に一艦隊

をも止めざるの意旨は彌々分明なるに至れるを以て英國は多少地中海艦隊を減し隨て一層海外貿易上に向て其保護を加ふるとを得たり一七一〇年及び一七一一年に於て英國は北亞米利加の佛國植民地に向て遠征進攻隊を送り之に由りてノヴスコシアを占奪するを得たりと雖も其クエベックに對する占略の企畫は失敗に歸したりき。

ルイ王は一七〇九年の冬より翌年に亘り西班牙屯在の佛國軍隊を撤去し爾後其王孫アンソヨイ公の爲めに西班牙王位を要求することを斷念せり此の如く佛國の形勢大に衰へ遂に非常の讓歩を爲し之か爲めに將來殆むと第二等國の地位に下らむとするに至りしか此際恰かも英國の代表者たる歐洲當時第一流の雄將の一人なるマールボロイ公が英國女王の寵を失ひ之か爲めに列國同盟の成立を危ふからしめたり其所以は同氏か英國女王の愛を失ふや其機に乗して英國非戰論者否な寧ろ戦争繼續論者は要官に進み之に代りて政權を専らにせり而かも此變動は一七一〇年の夏期に起りしか是より先き連年戦争の爲め當時英國は費用多端にして其得る所到底之を償ふに足らず且つ其國の地位も亦講和條約を首として締結するに最も便なりしか故を以て講和主義の傾向大に勢力を得たるなり此時に當り稍々劣弱なる同盟國和蘭は其國力の衰弊に隨ひ從來同盟に

従ふて其分擔すべき海軍兵力の補添任務を漸次に減止するに至れり是を以て英國人に
 して其活眼を永遠に注ぐ者は之れか爲めに海上に強敵の衰弱を喜ひしと雖も當時の人
 多くは偏に其國庫經費の直接に増加するとのみを憂へたり蓋し大陸並に西班牙の戦争
 に關し英國は常に列國の爲めに大に補助金を支出したるも其實該國は大陸に於て此上
 には毫も直接に利得する所なく加之西班牙人の感情を矯正してカール三世に歸服
 せしむるとは實に極難の業にして若し強ひて之を服従せしめむと欲せば英國は之か爲
 に得失不相償なる費用を擲たさる可らさり是に於て英佛兩國間に於る秘密交渉は開
 始せられしか偶々埃地利家西班牙王位要求者の同胞たる日耳曼皇帝の突然意外に逝去
 せられたるか爲め殊に其講和の進行を速かならしめたり蓋し皇帝の崩後其位を襲くへ
 き嗣子無かりしを以て其皇弟たるカールは直ちに入りて埃地利皇帝と爲り幾何もな
 くして更らに撰はれて日耳曼皇帝と爲れり然るに若し尙ほカールをして西王たらし
 めむとせば是れ實に埃地利家にして獨西二國の王冠を戴かしむるものなり英國安そ之
 を欲せむや英國は埃地利家なるか爲めに好むに非ずボルボン家なるか爲めに之を惡む
 に非ず苟も一人にして兩王冠を戴くとは英國は總て之を好まざりしなり。

一七一一年英國が平和條約の條件として要求せる所は該國が實に事實上純然たる一海
 國と爲れるを表示するのみならず自己も亦之を自覺するに至れるとを表示するものな
 り其要求に曰く(一)一人にして決して同時に佛國王たり又併せて西國王たるべからず(二)
 佛蘭西に對する防禦線として城砦ある數箇の市街を其同盟國和蘭及び日耳曼に讓與す
 べし(三)佛國の征服せる占領地は同盟國に還附すべし又英國自身に對しては(一)戰艦上並
 に海上の要地たるサブラルター及びポルトマホン港を公然引渡すべし(二)英國商業を侵
 略する私艦の巢窟ダンカーク港を破壊す可し(三)ニューファウンドランド及びハドソン
 灣及びノヴァスコシアの佛國植民地を英國に讓與す可し最後に佛西兩國は各英國と互
 に通商條約を締結すべく且つ一七〇一年西班牙より佛國に與へたるアシエンソト特權(即
 ち西領亞米利加との奴隸貿易の特權)を英國にも亦許容すべしと。
 此後に於ても抗敵の行爲は尙ほ繼續したりと雖も双方の談判は着々其歩を進め一七一
 二年六月英國及び佛國は遂に四ヶ月間の休戦を約せり此約に由りて英國は大陸に於る
 同盟軍中より其軍隊を撤去したり是より先き一年前英國の雄將マールボロ公は既に
 其職を去れり而して一七一二年の大陸戦争は佛國の勝利に歸せりと雖も何等事情の新

生せるに拘はらず英國は既に其兵を退却せしめたるか故に戦争の終局は將さに近きに在らむとせり英國は此際和蘭の不平に對し答へて曰く「一七〇七年以來和蘭は同盟の約に對して其當然供給すべき海軍配賦艦數の僅に三分の一より以内を出せるに過ぎず又和蘭か此十餘年間に於て實戰に従ひたりしとは僅々其半に止まるに非ずや如是にして尙ほ且つ英國陸兵撤回の不可を説くも英國は其の何の意たるを知らず」と又一七一二二年下院は上奏して不平を鳴らして曰く

陛下の王國は地中海上に於る海上權の優勢を保持し且つ敵のダンカーク若くは西部佛蘭西諸港に於て準備せる兵力に敵抗せむか爲め毎年大艦隊を機裝するの必要ありしか故に其海上の任務は此戦争中始終自國に不利なる方法を以て之を遂行せられたり陛下は何れの場合に於ても同盟義務として其擔當せられたる所の艦船を迅速に各部に派遣し以て迅速整完に其任務を盡し玉へるに彼れ和蘭は毫も之に倣ふことなく之を陛下か供給し玉へる數に比すれば其割合毎年甚だ僅少なり(中略)於是乎陛下は自國の艦船を増發して以て其缺を補はさる可らざるに至り又我英國幾多の艦船は常に遼遠なる洋上に久しく滞在し不順の氣候に遭遇し爲めに著るしく海軍の大損傷を招

くに至れり之か爲め貿易事業は減縮せられ海岸は巡邏艦の缺乏の爲め防備充分なるを得ず又西印度貿易は敵國か常に藉りて以て其財貨の供給を仰き戦争の經費を齎らし來れる最好最利の貿易なりしも當時前件我海軍の困難なるか爲めに陛下は亦之を妨ぐる能はさりき。

一七〇一年より一七一六年の間佛國は西領亞米利加貿易に由り事實四千萬弗の正金を獲たりしなり此種の不平に對し在英和蘭公使は僅に自國の狀態上已むを得ず其約を果す能はさりしと答辨するを得たるのみ英國は一七一二年の諸凶變以來益々其平和主義を確守するに至りしか和蘭も亦た遂に同主義に決するに至れり而して英國は同盟諸國に對して不満を抱きしも尙ほ佛國に對する惡感情を忘れず爲めに和蘭の至當なる要求を承諾するに至れり一七一三年四月十一日歴史上の一大分界標たる有名なるウトレクト講和條約即ち殆むと歐洲全般の平和條約は佛蘭西と英吉利和蘭普魯西葡荷牙及サツォイとの間に締結せられたり而かも日耳曼皇帝は尙ほ講和を拒みしも其軍資補助金の英國より出づるなきを以て自由に軍隊を動かす能はず大陸の戦争も海國の撤兵と共に自から鎮靜に歸せむとせしか此際佛蘭西は列國の拘束を被むると無き的好機會に乘し

其不羈自主的國策を振ふて一七一三年日耳曼と戦ひ赫々たる制勝の武勳を奏せり其翌一七一四年三月七日に於て佛埃兩國は遂に平和を結ぶに到れり。如此大躰其局を結ひたれども戦争の餘燼尙ほ未だ全く消えずカタロニア及びパリアリツク島はフキリップ五世に對して反旗を擧げしも佛軍一度之に向ふや忽ち平定せられたりバルセロナは一七一四年九月の攻擧を以て佛軍に陷領せられ島嶼は其翌年夏に至りて降伏せり。

此長年月の戦争及び其終局の講和條約の結果として之か爲に歐洲及び米洲其他地球上各處に如何なる變化を生ぜし乎今其主要なる點の大畧を左に述へむ第一ホルボン家は西班牙王位に就き西班牙帝國は西印度並に亞米利加に於る領地を保有せり英國先代の君王故ウリアム三世の西國領に對する野心は英吉利か埃地利皇子を助け又其海軍力の大部を地中海に屯在せしめたる爲め之を果す能はざりき第二西班牙王はチーデルランドに於ける其領地を失ひゲルデルランドは普魯西新王國に白耳義は埃國皇帝に歸し之か爲めに前の西領チーデルランドは一變して埃領チーデルランドと爲れり第三西班牙は此他地中海上の重要な島嶼を失ひサルデニア島は埃地利に讓與せられミノル

カ島は其良港と共に英吉利に歸し、リ島はサゾオイ侯に讓與せられたり第四西班牙は其伊太利領を失ひたり即ちミラン、チーネルスは共に埃帝の版圖に入れり是れ即ち西班牙か其王位繼承に關する戦争に由り蒙むれる結果の大畧なり。西國王位繼承主張者の後援を爲せる佛蘭西は此戦争の爲め非常の疲弊を來たし且大に其領土を失ひたり佛國は其王統に屬する者をして隣國の王位に即かしむるを得たりと雖も其海上權力は消耗し其人口は減少し其財政も亦廢壞するに至れり其讓與せる歐洲領土は佛國の北部並に東部の國界に在りき而して其巡洋私艦の戰鬪の中心として英國商人の大に畏懼したるダンカーク港も此後佛國は之を棄て、敢て使用せざることをなれり又佛國は亞米利加に於てノヴァスコシア及びニューファウンドランドを英國に割讓し半世紀の後加奈陀全部を失ふの端緒を斯に開けり然れども當時佛國は尙ほタイプント島及び其良港ルイスブルグを保有しセントローレンス灣及びセントローレンス河の鎖鑰を握れり。此條約及び戦争に依れる英國の所得は略ぼ佛西兩國の失ふ所に相當し且つ皆之に藉りて以て其海上權力を増進するの媒助たるに足るべきものなりき地中海上のシブラルタ

井ひにポルトマホン港及び北米に於る前述の植民地は英國海上權力に對し又其貿易擴張に對する新根據と爲れり之に次ぎ英國自身の膨脹を助けたるものは西佛二國海上權力の衰廢せるに在り蓋し此兩國は陸戰に費す所夥しかりしか爲め勢ひ海軍の衰頽を來さざるを得ざりしなり尙ほ此事に就きては後編に至りて更に述ふる所あるへし和蘭は此戰爭年期中に於て其當然出發服務せしむ可き艦船を懈りて之を出さず且つ其出發せるものも甚た不長なりか故に英國は之か爲めに分擔服務定額以外の重荷を負はしめられたり然れども此懈怠は却て英吉利の利益を爲し之か爲め其海軍は非常の勉勵發達を成すに至れり。

ダンカークに於ける造營物の破壊は歐洲に於る海上兵力の不權衡をして益々甚たしきに至らしめたり何となれば此港は本來第一流の良港に非ず其水も亦甚た深からずと雖も而かも強大なる人工的戰用造營物の存するあり且其地位は殊に英國の貿易を妨害するに適したるか故なり即ち該港は對岸英國サウスホールランド灣及ダウンズ港を距る僅に四十哩にして英吉利海峽は此部に於て其幅僅に二十哩に過ぎず按ずるに此港はルイ十四世治世の初年に於る所得の一にして其改築發達を力めたと恰も其兒を養育す

るか如くなりき是を以て王の此造營物を破壊し港灣を填塞せるか如きは實に非常の割愛にして之を見るも亦以て當時彼王か何等の大逆境に在りし乎を推知するに足る然れども英國の機智なる其海上權力の根據を單に軍事的地位或は戰艦のみに置かさりき即ち當時英國か長期の戰爭及び其終局の講和條約に由り獲得せる商業の利益は甚た大なるものにして英國の素志實に茲に存せしなり西領亞米利加に於る各邦奴隸貿易の認許は英國に對して甚た利益あるものなりしか之に加ふるに英國は巧に之を基礎として此等諸邦國と巨額の密貿易を行へり其利益たる實に巨大なるものにして英國か此諸邦の土地を占領する能ざりし失敗は優に之を償ふて餘り有りしなり又英國は一七〇三年の條約に據り葡萄牙貿易の監督權を握りたるか故に佛國か是より先き南米諸邦に於て之を葡萄牙に讓與したる所の特許權利は主として英國の利益に歸せり又英國に向て佛國か讓與したる北米の植民地は實に軍事的要地なるのみならず又商業的好地位たり此時英國は極めて便宜なる通商條約を佛蘭西及び西班牙と締結せり此締約後數年を経て英國の一大臣は國會に於て此條約を辨護して曰く此平和條約より英國の爲めに如何なる利益を生ぜし乎は第一是れ國富の増加せしと第二近來吾造幣局に於て鑄造せられたる

硬貨の巨額なる、第三平和條約締結以來使用船舶漁業及商品は非常に増加せると、第四輸入税製造業及輸出の著しく發達増進せること、に由りて之を知るを得へし一言以て之を蔽へば則他無し曰く此條約か與へたる所の我各般の通商貿易の興奮に由りて以て之を知るを得へしと是れ也。

眼を轉して和蘭を視れば英國は此戦争に由りて如此利益を得其意氣揚々として海上の主權を掌握し永く之れを失はざりしも之に反して往時貿易に於ても戦争に於ても其競争國たりし和蘭は全く絶望の地位に陥れり即ち該國は戦争の結果として海上若くは植民地若くは在外要鎮共に一も得る所なかりき而かも其佛國との通商條約に由りて得たる所の權利は英國と同様なりしと雖も英國の如く西領亞米利加に於て立脚地を得る能はざりき和約前數年同盟國の尙ほカールスを助けつゝあるや英國の大臣は和蘭に秘して密かに西領亞米利加と條約を結び其貿易上の專占權を取得したり而して此專占權に預り得るものは獨り西班牙人のみなりしを以て其事實上全く獨占と異ならざりき然るに此秘密條約は偶然に發露し大に和蘭をして憤はらしめたり然るに英國は當時歐洲列國同盟に於て極めて必要不可欠的強國なりしか故に他の同盟諸國の爲めに除名せら

るゝの危険は毫も之れ無かりしなり和蘭が陸上に得たるものは唯軍事上の占領地即ち彼の塊領ネーデルラントに於る城砦的市邑のみにして其歳入人口及び資財に至りては些しも加ふる所なく又此際其國の地位を支持する爲に海陸軍事制度の確立を必要とする所の國力を増すの助と爲す能はざりき此の如く和蘭は其從來依りて以て國富を増し歐洲列國の間に立ちて先進の地位を占めたる所の進路を此後は終に放棄するとの已むを得ざるに至れり且和蘭は大陸上の地位危殆に瀕するか爲に其勢自ら海軍を怠るとを免れざりしか當時の歐洲は是れ戦争掠奪到る處に公行せる世なるか故に苟も海軍の整完を怠るの邦國は必ずや其航業と商業との利益を失はざる者莫し而して和蘭は此戦争の間に在りては尙ほ能く其頭角を露はし居れりと雖も衰弱の兆候は其軍器の缺乏に徴して之を掩ふ能はざりしなり故に和蘭聯邦は當時其開戦當初の大目的を達し且つ西領ネーデルラントを佛蘭西より奪ひ得たりと雖も其成功は以て其損失を償ふに足らず此より以後和蘭は長く歐洲の戦争及外交事件を避けて之に干預せざりし所以の者は是れ其幾分は此の如き干預の利益極めて少なきを感知せるに由ると雖も其實因は他無し其國貧弱に陥りたるも且つ干預を爲さむと欲して爲す能はざるとに在りしとを知るへき

也蓋し長期戦争中に於る激烈なる過勞の反動は起り來り地狭く人少なき和蘭の如き一
小國の本色的薄弱は遂に掩ふへからざるに至れり其衰弊の狀態現然たるに至りしはウ
トレント平和條約の後なりと雖も其現象は已に此以前に顯然たりしなり是に於て和蘭
の國位は終に降墜し世間復た和蘭を指して之を歐洲強國の中に數ふるもの無く其海軍
は今や歐洲外交政客上に於て軍事的要素たること能はざるに至り且つ其商業も亦國家
全般の衰微と共に凋落せり。

尙ほ簡單に述べべきは埃地利並に日耳曼に於る一般の結果なり佛國はラインの境地を
讓與し添ふるに其東岸に在る城堡を以てせり埃國は前述の如く白耳義サルヂニア島ヲ
ノルヌス及び北部以太利に於ける西班牙領を領受せり該國は他の事情に關して幾多の
不滿を抱きたるも特にシ、リ、島を得ざるを以て最大の遺憾とし其後頻りに交渉談判
を行ひ遂に之を得るに至れり此の如く埃國は一時遼遠なる外國領土を獲たりと雖ども
其實此等は却て重大なる現象に非ずして日耳曼及び全歐洲の爲めには更に是より重大
なる事件あり他無し即ち普魯西亞の勃興せると是れ也普魯西亞は此時より始めて儼然
たる軍事的新教王國として歐洲大陸中原に顯はれ將來埃地利に對して其國勢力の權衡

を左右すべきの運命を有したり。

以上は是れ西班牙王位繼承の重なる結果にして十字軍以來歐洲社會に顯はれたる變
更の最大なるものなり此戦争に於る軍事的趣味は主として其陸戦に在り即ち古今に卓
越せる二雄將英國のマールボロ公及び埃將ユーリオン公は共に同盟軍に將としてブレ
ンハイム、ラミリー、マルブラクエ、チッソン等の野に戦ひ各偉勳を顯はしたりしとは多數讀
史家の周知知る所たり又一方にはフランダールに日耳曼に伊太利に及び西班牙に於て各
處の陸戦に従ひ其智勇拔群を以て其名を轟かせし名將甚だ多かりき、
海上に於る大戦争は僅かに一回にして而かも殊に其名を擧ぐるの價值なきものなり然
れども予今試みに其直接明白なる結果のみを觀察せむ抑も此戦争に於て利益を得たる
ものは何れの邦國なる乎是れ果して佛國なる乎佛國は唯ボルボン家を西班牙王位に置
き得たるのみに非ずや然らば西班牙なる乎西班牙は唯埃地利家に代へてボルボン家の
君主を戴き以て佛國と一層親密なる結合を成し得たるのみに非ずや然らば和蘭なる乎
彼が戦後に得たる所は城砦的市街と衰萎せる海軍と疲弊せる人民とのみなりしに非ず
や然らば則埃國ならむ乎埃國は僅かに海上強國の助力に依りて戦ひ以てチーアルラン

ト及ヒチーブルスの如き沿海版圖を得たりと雖も尙ほ未だ之を以て利益を得たるものと謂ふへからず然らば則ち其利益を得たる者は果して何れの國なるべき乎予を以て之を見れば是等諸國の如く眼を陸上の獲得に注かざりし所の英國其國に外ならず英國は實に大陸の戦争の爲めに列國に對して其軍資金を支給し且つ其軍隊を以て之を後援したりと雖も此間常に能く其海軍を興し其商業の擴張保護を謀り以て其海上の好地位を占領せり一言以て之を蔽へば英國は未だ曾て敵と味方とを問はず唯海上に於る自己の競争者の衰ふるに乘し之に代りて能く英國の海上權力を建設し且つ常に能く之を養成して隆興せしめつゝありしなり抑も眼を英國海軍の發達に注ぐ者は此際に於る他の諸國の獲得を輕視す可らず何となれば英國の獲得の莫大なりしとは此戰に關せる諸國の獲得を列擧し之を英國に對比するに由りて彌々明白なるを得ればなり故に是等諸國の獲得を擧げむに先づ佛國は其海軍及び航海の衰頽を來し海上に望を絶つに至りしも此戰に由り背後に友邦を有するに至りたるは是れ其利益なりき又西班牙は是れより先き一世紀間に於る其政治的無能力の悲境に沈淪せる後に於て今や此戰の爲めに佛國の如き活々潑地の邦國と親交するを得たるは是れ其利益にして該國は又之に依り其危殆なき

る領土の大部を失はざるを得たり又和蘭は白耳義か弱國の手裡より強國に移りたる爲めに和蘭をして佛國の蠶食を免かれしむるを得たるは是れ該國に對する利益たり又埃國は重もに他國の出費に由りて此戦争を遂げ皆に其宿讐たる敵國の進歩を抑制し得たるのみならずシ、リ、島及ヒチーブルスの如き若し善く之を治むるに良政を以てせば優に海上權力の基礎たるを得べきの土地を得たるは是れ該國に對して非常の利益たりしや疑を容れず然れども此等の總ての獲得を一括するも未だ以て其宏大鞏固共に世界に比類無きの海上權力を専らにする英國の大獲得に比するに足らず蓋し英國の海上權力はアックスブルク同盟戦争の間に於て奮然として進行し西班牙王位繼承の戦亂に及ひて完成せるものなり英國は其卓絶無比の軍艦に由り又他の諸國か疲憊の餘一艦をも備ふる能はざるの窮況に乘し海洋上に於る大商業を支配し而かも今や其艦船は世界の争點たる樞要強固の各部に於て確然たる基礎を有するに至れり英國は當時未だ印度帝國を建設せざりしと雖も其絶大なる海軍力に依り此遠近なる豊富の地方に對する諸外國の交通を制御し且つ印度地方に於る諸國民の海外定留貿易場中に起れる争論に關して其意見を主張するを得たり西班牙王位繼承戦亂中に當りて英國の海上貿易は時ど

して敵國巡洋艦の妨礙損傷する所となるなきに非らずと雖も英國巡洋艦が佛西兩國の商船を奪掠したるに對し他日佛西二國より英國に向て要求を爲すべきとを達觀し唯僅少の注意を加へたるのみ勉めて自國の繁榮を保持し同盟諸國を助けて軍事的効力を致さしめ戰の終ると共に一躍して一新生面を開くに至れり此長久の戰爭は人をして倦厭の念を生せしめ世界到る處困弊疲憊の境に呻吟せざるものなく人民は皆繁榮と平和なる商業の恢復を望めり然れども此際に當りて富力資本船舶航業總て備はり各種起業の利益を増進し以て貨物の交換を正經若しくは不法の手段に依り盛ならしむることを得たるものは當時唯一個英國あるのみにして他邦國は決して之を直ちに行ふと能はず之に反して獨り英國は此戰亂に際し自己の巧智なる措置と他國民の疲憊とに因りて以て其海軍を確立し又其商業を鞏固にせり然るに當時佛國巡洋私艦は常に海上に横行して掠奪を擅まにし海上危険なるに際し英國海軍の完整強盛は即ち同國船舶航海の安全なることを表示し隨て特に同國商船の使用をして多からしめたりき英海軍は能く此掩護に盡力せるか故に同國商船は其安全なる大に和蘭船に優り隨て復かに安全なる運送船なりとの名聲を博したるを以て歐洲列國の運送業は此後彌々自然に和蘭の手を離れ

て彌々英國船舶の手裡に移り來るに至れり而して此の如く歐洲列國商人社會に於て英船を可とするの習慣既に成るや此習慣は容易に動かす可らざるものと爲れり英國海軍の一史家は曰く

予は萬般の事物を集めて之を精細に觀察するに古來英吉利國民の信用此時よりも厚く國民の精神此時よりも隆高なりしこと無かりし乎否やを疑ふ能はず海上に於る吾人の武功及び當時吾英國政府が海外貿易を保護するの必要及び吾海上權力を増進するが爲めに採行せる所の各方法の善く其民心を得たること此數件は彼此相須ちて年々吾國力を増進せしめたり是れ實に一七〇六年の終末王國海軍に於るか如き大進歩を見る所以にして而かも其増進は皆に其船舶の數に於るのみならず又其品質資格に於て之を百年前革命時代若くは其以前に比して長足の大進歩を顯はしたる所以なり要之吾が貿易は此戰役中に在りて減退せるよりも寧ろ増加したるものにして而かも同時に吾人は葡萄牙等の嚴格なる交通に由て著しく利益する所ありたりき。是を以て英吉利の海上權力は吾人が通常聯想するか如き單に其宏大なる海軍のみ存するものに非ず佛蘭西は嘗て一六八八年に於て此の如き大海軍を有したりと雖も火邊

に近く置かれたる葉片の如く忽ちにして凋縮するに至れり然れども亦英國の海上權力は獨り其旺盛なる商業にのみ依れるに非ず佛國の商業は今此講話の到達せる年紀後數年ならずして漸次隆運に向ひたりと雖も一度戦争の一打撃に遇ふや嘗て和蘭の貿易がクロムウェル海軍の爲めに一舉掃蕩せられたるか如く忽ちにして海上より驅逐し去られたり英國が能く卓爾として歐洲列國の上に其海上權力を得たる所以のものは他無し其能く常に戒慎注意して堅忍不拔に養成せる所の此兩要素の互に相須ちて發達せるに由る而かも此大權力の獲得は明かに西班牙王位繼承の戦役より生したるもの多く而かも其起源は此時に在り此戦争以前に於ては英國は單に海國の一なりしか此時以後は實に世界無双唯一の海國と爲り而かも天下復た能く之に亞くものなきに至れり是に於て此海上權力は英國の專占に歸し友邦の之を分つ無く亦敵國の之を妨くる者無かりき且つ英國は獨り其海洋管轄に由り又其廣大なる航海に由り以て無限無量非常の富源を其手中に掌握したるか故に海洋上復た恐るべき一敵無きに至れり此の如く英國が獲得せる海上權力及富力は全然其手裡に確保せるを以て皆に宏大なるのみならず又鞏固なるものありき反之他の諸國の利得たるや單に其程度に於て劣等なるのみならず又其種類

に於ても甚だ薄弱にして即ち多少他國人民の好意に依頼せざるを得ざる者なりき然りと雖も一國の強大富饒は獨り海上權力にのみ歸す可きに非ず海洋を適宜に利用し支配するは由りて以て富を積聚する所の交易の一鏈環たるに過ぎず然れども此鏈環たるや一大鏈環の中央に位する所の大綱環にして之を保持する者は能く他の國民をして利益を捧げしむることを得べきなり英國に在りては歴史の證明するか如く多數の事情彼此互ひに相須ちて以て海洋の注管と利用とを自然に起し來りたるものゝ如し現に西班牙王位繼承の戦役前數年の如きは數々租稅政策の改良を施し以て其繁榮を増進せりマコーレー是等の政策を評して曰く「世界未曾有の宏大なる商業的繁榮大厦を隆興せる堅牢なる基礎は即ち是れ也」と唯茲に疑問として起るものは他無し是等の政策は彼の貿易に傾注し又之に由て發達せる英國人民の才能に依りて容易に之を採用せしめたる乎將た彼等か此政策を採用せるは多少其國の海上權力より生し來りたるには非ざる乎の問題是れ也此問題の解釋如何に拘はらず今姑らく措いて之を茲に論せざるへし唯吾人は英國海峽の對岸に於て英國と競走するに方り此點に向て已に先鞭を着け居るの國民あることを記臆せざるへからず即ち戦争並に商業に由り海上主管權を得むか爲めに其

地位其富源共に特に便利の地に立つ所の一國民あるを見る蓋し佛國の地位たるや實に此特殊の良好點を兼備するか故に其海陸孰れなりとも自己の利益とする所を隨意自在に撰みて以て自國の權力を發達せしむることを得へし之に反し他の諸國か其國境以外に進出して運動せむと欲するときは或は主として陸地險隘の爲めに障礙せられ或は主として海の爲に制限せらる然るに佛蘭西國境は大に之と異なり其長き大陸國境に加へて三箇の海洋に沿接せり而して一六七二年佛國は其外征方針を撰み即ち陸地に依りて其國土を擴張せむと企てたり是より先き有名なる賢相コルベール氏出て、十二年間佛國の財政を統管し其従前累世非常紛亂の財政を匡正して之を整理し佛國王の歳入をして英國王の歳入に倍するに至らしめたり此際全歐列國中に於て佛國に同盟し佛軍の爲めに出兵戦争に従事する諸國の爲めに佛國王は自から軍資を支出し以て之を補助したり然れどもコルベール氏か佛國の爲めにする本來の畫策希望は徒らに大陸に向て外征併呑を事とするに非ずして而かも佛國をして海上權力を得せしむるに在りき然るに陸地出征即ち和蘭との戦争(一六七二年より一六七八年に至る)多年苦心盡力せる所のコルベール氏の諸計畫を妨げ國家の繁榮は之か爲めに其進歩を止め即ち佛國民は外邦との

交通貿易を遮断せられて空しく内地に閉息せざるへからざるに至れりルイ第十四世治世の末に於て非常に不幸なる結果を生せるか是れ實に許多の原因に由るものにして即ち彼の恒久連年無益の外征戦争を事としたる爲めに國力を困弊せしめたること及び其後半生に於る荒蕪なる行政及び全般の驕奢の如き是れなり然れども佛國は實際に於て當時未だ嘗て外國軍隊の侵入を蒙らす其連年の攻戦は概ね其國境或は境外に行はれ而かも自國々内に於てせるとは極めて稀なりしか故に其内國産業か直接に交戦の災害を蒙れることは極めて少し是等の點に於ては佛國は殆むと英國と異なる無く之を他の敵國に比すれば其事情却て優れるものありき然るに其大躰に於て英佛兩國の結果彼此相同しからざりしは何故そ何か故に英國は莞笑し且つ繁榮せるに佛國は之に反して不幸に陥り疲弊を來せる乎何か故に英吉利は講和の條款を指示し佛蘭西は之に屈從せし乎是れ他無し富と信用との異なるに由りてのみ蓋し佛國は孤立獨力數多の敵に對して抗戦せりと雖も此等の敵國は皆英吉利の補助金に由て起り又動ける者なり一七〇六年英國の出納長官書を英國陸軍大將マールボローに贈りて曰く

英吉利及び和蘭は其土地と貿易との富源あるか故に能く此戦役軍費の過度の重荷を

負荷すと雖も其信用は依然として墜落すること無し然るに佛蘭西の財政は著しく涸
 渴し王國外に支拂ふに正金を以てするに非されは其送金高の割増し二割乃至二割五
 分打歩を添加せざる可らざるに至れり。

一七一二二年佛國の歳出は凡そ貳億四千萬弗に達せるに其租稅收入總額は僅々一億千三
 百萬弗にして之より損失及び必要費を控除せば國庫の純收入は僅々三千七百萬弗に過
 きざりき故に當時佛國の財政は充分困難を極めたると言ふを俟たず而かも之を補填す
 べき良策は一も之れ無きを以て豫め將來數年間の歳入を繰り越し且つ頗々無名不義の
 非常手段を施して以て僅に此不足を彌縫せり。

一七一五年の夏即ち講和後二年佛國財政の情勢愈々極惡の點に達せしものゝ如く公
 私の信用は地を拂ひ國に明確なる歳入なく其偶々之れ有る歳入の幾分なるものは既
 に抵當に係れるもの乎然らされは後年度分より繰越されたるものなりき勞力生産も
 消費も皆全國金錢不融通の爲めに塞かりて其活動を保つとを得ず高利貸業は獨り此
 く如き社會の衰頹中に於て自から得々たりき而かも物價は益々騰貴し品質は愈々下
 り人民は之か爲めに壓倒せられたり是に於て飢餓に苦しむ貧民の一揆暴動は民間所

在に簇々蜂起し遂に軍隊中にすら蔓延するに至れり又製造業は衰微し若くは休業
 し乞丐は各市に充滿せり田野は荒蕪に歸し土地は肥料なきか爲めと器具なきか爲め
 と又家畜なきか爲めとに由りて耕すとを得ざりき噫佛朗西王國は其老王と共に死に
 垂むとしたりなり。(マルタン佛國史)

當時佛國は英國の八百萬人に對し千九百萬の大人口を有し又豐腴生産的なる大國土を
 有せること實に上陳の如くなりしか當時は是れ鐵と石炭との盛時將に來らむとするの
 時代なりしなり反之英國に於ては一七一〇年の議會は非常巨額なる國費の支出を協賛
 して佛人を驚殺せり何となれば佛國の信用は甚た薄く否殆むと絶無の姿なりしに英國
 は之に反し其極盛の頂點に在りたればなり此長久なる戰爭中に當り英商人の間に於て
 は實に一大精神の發揮するありて彼等は熱誠以て國內全部の金融を維持し以て其政府
 の廟算企畫を遂行するとを得せしめ而かも之か爲め英國各製造家は非常の獎勵を蒙り
 彼等をして寧ろ禍を轉して福と爲せるの感を起さしめたり。

葡萄牙との條約に依り吾人は非常の利益を獲得せり葡萄牙人は漸く其領土たるブラ
 ヲル金鐵の好成績を知覺せるか當時吾人の連年彼等と行へる大貿易は彼等葡人をし

て好利益を享受せしめたると同時に其好運の大部をして吾人に歸せしめ而かも此利益たる爾後久しく繼續して消滅せざりき然れども若し此事微りせば吾人か此戦争に由りて蒙れる損失は如何ぞ能く之に堪ゆるを得むや吾國に於る流通貨幣は著しく増加したりしか是れ主として其原因を葡萄牙貿易に歸せざるを得ず而して此貿易は吾人か前文にも已に述へたる如く全然吾海上權力の効に歸すへきもの也。此長久戦亂の始めに在りては葡萄牙國王は佛西二國同盟に加はり居たりしも一七〇一年英將ルーク艦隊の武力を以て佛艦隊をゴゴール灣に殲滅したるか故に葡王は大に之に感動し其心を翻へして英國と貿易條約を結びブラザルに於る金鑛産出地金輸送并に其賣捌は特別に之を英商人に委任專賣せしむるの條約を締結せると同時に蘭英艦隊を以て葡國を保護するの盟約を結へり。

又吾英國商船が從來カヂスを経て行へる所の西領西印度との貿易は此戦争の初期に於ては大妨礙を受けたりと雖も此貿易は其後アーチヂューク¹の時代に於て諸地方との直接交通に由り葡萄牙を経て極大なる禁制品貿易を行へるか故に大に其景況を回復せられたり又吾人は西印度に於る西班牙人と貿易して非常の利益を得たり是れ亦

禁制品貿易なり當時西印度の吾植民地は本國政府に向て其保護の等閑に附せらるゝの不平を訴へたりと雖も而かも該植民地の實際に於て其富榮は増し其人口は加はり且つ其商業は往時に比して大に擴張せられたり……此戦争に於る吾英國の國家的目的は特に大體に於て達せられたり他無し則ち佛國の海上權を撲滅しマラガ海戦後吾人は復た該國の大艦隊なるものを耳にせず而して佛國艦隊消滅の爲め同國の巡洋私艦は大に増加せりと雖も而かも之か爲めに吾商人の蒙れる損害は前時代に於るよりも迥かに僅少なりき蓋し是より先き一六八八年に於て佛國王か非常の大艦隊を發遣して吾人に臨めるに當り吾人は其大困難を斥くる爲めに汲々從事し而して一六九七年に於て僅かに此煩はしき戦争を脱するを得たりと雖も此際吾人の負へる國債は非常の巨額に達し僅少の平和年間を以て能く之を脱する能はざるものなりき然るに一七〇六年に於ては吾海上權力大に増進し今は佛國海軍の爲め吾海岸を脅凌せらるゝと絶えて無く却て我國より年々大艦隊を發遣して彼を辱むるに至れり而して吾人は皆に太平洋に於るのみならず地中海に於ても亦大に彼等に凌駕し佛艦等は吾帆影旗色を遙かに望み見るも忽ちにして遁竄するに至れり嗚呼始は彼か如く徹にして而

かも終りは即ち此の如く壯なり吾人英國人たるもの之に對して豈に欣喜せざるを得むや又此海上權力に依り吾人はレヴァント各邦國との貿易を安固にし且つ伊太利諸公侯に關する吾人の利益を増せるのみに止らず尙ほ且つ大に吾勢威をバーバリー諸邦に振ひ且つ又土耳其帝をして向後は佛國の提議を聽くとを憚らしめたり以上は是れ吾海軍力の増進及び其利用方法より生せる成果なりき夫れ此の如き艦隊は實に必要缺くへからざるものに非ずして何そや抑も此艦隊は以て吾國威を宣揚し以て我同盟國を保護し併せて是等同盟國をして我利益を尊重せしむる者也就中其最も重要な結果は是等艦隊が吾海軍力の爲めに其光威を確立したるとに在り而かも當時斯の如くして獲得せる名譽の好果は吾人が現時(一七四〇年)に至るも尙ほ彌々深く感覺する所なり(カムベル氏海軍將官傳)

以上已に其梗概を盡しぬ吾人は爰に蛇足を添ふるの要なからむ佛國史家が『吾巡洋艦は英國商業に依りて其腹を肥したり』と號する時代の間に當りて英國は斯の如く海洋の大勢力として世界に雄視せり然れども英國史家も亦當時其商業上に蒙られる損害の大なることを認めざるに非ず一七〇七年に於て英國上院委員の報告せる所に據れば『開戦以來

英國は三十隻の軍艦及千百四十六隻の商船を失ひ(其内三百は回收せり)我は敵國軍艦八十隻及び商船千三百四十六隻を捕獲し或は之を破壊し且つ百七十五隻の拿捕私艦を捕獲せり』と吾人が已に述べたる如く此時に當り英佛軍艦の多數は私かに掠奪を事としたるか如し然れども其幾部か何等のものを爲したるにもせよ其基礎を大艦隊に置くこと無くして單に巡洋的戰闘のみに從事するものは到底大海上權力を打破する能はざることは明白にして些も疑を容れざる事實たり(シャープ、パール氏は一七〇二年を以て死せり然れどもフォルバン氏、ヂュカッス氏及びヂュグエー、ツルアン氏其他佛國私艦家有名の海員輩出し海上商業に對し古來未曾有の大破壊を行ひたり。

吾人今西班牙王位繼承戦に關する講究を終るに先ちヂュグエー、ツルアン氏の最大遠征に就きて一言せざるへからず他無し是れ氏は此種の海員が能く達し得ざる遼遠なる洋海に航し其行爲は能く當時の私艦業者の意氣を表明し且つ佛國政府が此渦中に捲き込まれたる状態を説明するに適當なるか故なり茲に一七一〇年佛國の一小艦隊リオサヤ、テロを攻撃せるか却て其琛退する所と爲り且其數人は生擒せられ而かも終に斬殺せられたりと云ふ是に於てヂュグエー、ツルアン氏は此凌辱を雪かむと欲し復仇の允許を

佛國政府に請ひしに佛王之を許し數隻の艦船並に其乗員水夫迄も政府より貸附せられたり此際國王とヂュグエー、ツルアン氏を備使する所の私艦商會との間に正式の一契約を結び其費用及び輜重に關する双方契約者各自の負擔を豫定したりしか此内甚た奇異にして又商買的なる條項を含めり即ち出帆後軍人中に於て死亡戰没若くは遺棄せられたる者あらは其各人に就き會社は三十フランの償金を拂ふへし而かも此遠征戰利に對して國王は總利得の五分一を受くるものとす但し難破若くは擊沈せられたる船舶の損失は國王之を負擔すへしと決せり是等種々の條項より成れる一契約に従てヂュグエー、ツルアン氏は六隻の戰列艦七隻のフリゲート及び二千以上の軍隊を受領し一七一一年リオツヤ、チーロに向て進航せり氏は幾多の戰鬪の後遂に該港市要砦を陥れ償金四萬弗(現時の一百萬弗と畧は同額ならむ)及び砂糖五百函を出さしめて之を許せり私艦會社は此冒險事業に由り大約九割二分を利したりしか二隻の戰列艦は歸途に就ける後踪跡を失し杳として其消息を聞くとなかりしか故に國王の利得は蓋し極めて些少なりしならむ。

爰に歐洲西部列國か方さに西班牙王位繼承の戰爭に従事せる間に當り東部に於ても亦一争鬪を開き其結果は重大なる勢力を及ぼしたり即ち瑞典は露西亞と兵を構へ匈加利は奥地利に對して反旗を翻し而して一七一〇年に至りて土耳其も亦遂に其渦中に投ずるに至れり此際土耳其にして若し匈加利を助けたらむには(往時に於けるか如く)大に佛國に利し爲めに當時の形勢を變する者ありしならむ然れども英國史家の言ふ所に據れば當時土耳其は英國海軍に對する恐怖の爲めに遷延決する能はざりしと云ふ然れども土耳其は實際唯傍觀して敢て動かす而かも此間に匈加利は既に鎮壓せらるゝに至れり此時露瑞兩國交戦の結果は露國をしてバルチック海上に優勢を得せしめ佛國舊來の同盟たる瑞典國をして第二等國の地位に降下せしむるに至れり而かも露國は是より以後確乎として歐洲政界に始めて參入し來れり。

○第六編

佛國攝政及び西班牙のアルペロニ氏英國ウォルポール氏并に

佛國フリエーリ氏等の政畧

波蘭王位繼承の戦役

西班牙領亞米利加に於る英國の禁制品貿易及英國と西國との

葛藤

西國王位繼承の戦役と最も重大なる關係を有し以て東西兩大關の働作を逞ふせる二國の君主はウトレクト講和條約締結の後相繼て逝去せり即ちアンナ女王は一七一四年八月一日に逝きルイ十四世は一七一五年九月一日を以て逝けりアンナ女王に繼て英國の王位に即きたる日耳曼貴族ジョージ第一世は英國人民の所撰に係ると雖も此撰擧の原

因は單に舊教信仰の國王を戴くよりは新教信仰の國王を奉するに如かしとの故を以て英國人民は已むを得ずして之を推戴せるに過ぎず王は自黨の冷遇を受くるのみならず王を嫌惡するの徒は遂に多數相集り以て黨を爲し其位を遷らしめ而かも故廟王ゼームス二世の子を以て之に代はらしめむと欲するに至れり是を以て其地位の鞏固を缺けることは疑ひ無きも事實は却て外見程に爾く甚しきには非ざりき之に反して佛國王位の繼承は誰れ在りて之を争ふ者あざりしと雖ども此際新君主は僅かに五歳の幼兒にして攝政を設けざるを得ず而かも其攝政の専制權力は其勢却て英國の主權よりも盛むなるものあるを以て此地位を占めむと欲して相嫉視するもの管に二三のみならず而かも當時王位繼承の順序に於て第二位に在るオルレン公フリップは遂に攝政の位に登り其實權を握るに至れり然るに公の攝政たるや内に向ては己れの地位を奪はむと企つる所の佛國內の競争者に對して戒心すると同時に外に向ては西班牙王フリップ五世の激烈なる怨惡嫉妬をも亦傾意觀察せざるべからざりき何となれば王は西班牙繼承の戦亂に際しオルレン家黨派か陰かに謀りて此フリップ公を推して西國王たらしめむと企てたるものありし時より早く既に此公に對して惡感情を抱き居たれば

なり要するに英佛二國の政府に於ては其状態常に不定不安にして兩國の政事も亦隨て影響を蒙るに至れり顧みて當時佛國と西班牙との關係如何を觀ればルイ十四世は其親族上の關係より努めて兩國の和親を計りたりしか今や其双方の主治者が互に相嫉惡せるか爲めに兩國は遂に相親むこと能はず而かも此種の不和は兩國の眞利益に有害なる結果を與へたり。

攝政フキリッポは當時佛國第一流の政治家として名聲赫々たる僧侶デポア氏の勸告に従ひ英國王に對して同盟の提議を爲し而かも英國の歡心を結はむか爲めに同公は英人の採納すへき手段として商業的利益の讓與を英人に許るし或は死刑の嚴罰を附して自國商船の南海に貿易するとを禁し或は英國石炭の輸入税を輕減し以て其談判を開始したり然るに英國は最初此提議に對して承諾を與へざりしか攝政は決して之に失望すること無く更に一步を進めて當時英國王位の要求者セームス第三世ヲアルプス山外に放逐し且つ是より先き佛國政府がダンカーク港の損失に代ふるか爲め鑿掘を開始せる所のマルデック港を填埋せんとを提議するに至れり是等の讓歩は其一を除くの外は皆是れ佛國海上權力及商業の利益を犠牲とせるものなるを以て英國は遂に條約の締結を

諾し英佛兩國相互の利益を妨げざる限りは互にウトレント講和條約の實行を確保し特にルイ十五世若し其嗣子無くして崩殂せむ乎佛國王位を襲くものは當にオルレアン家なるへしとの議を確定せり而して英國の王位を繼承する者は必ず新教徒なるへしとの條件も亦之れと同時に確保せられたり和蘭は戦後の疲弊未だ全く癒えず爲に此新交渉に關與するを好まざりしか佛國より和蘭商品の輸入税を免除せむことを申し出てしを以て亦共に此同盟に加はれり是れ所謂三國同盟にして一七一七年一月を以て調印せられ而かも佛國は此條約の爲めに爾後數年間英國の拘束する所と爲れり。

一方に於て佛國が英國に對し此の如き提議を爲せる間に當り西班牙は賢能卓越なる一僧の助言に従ひ佛國と同様の同盟を作り且つ同時に其國力を増進して伊太利の舊領を西班牙に回復せむことを期せり賢能卓越なる一僧とは誰れそ即ち新大臣大僧正アルベロニ氏にして同氏は當時はフキリッポ五世に約するに若し歐洲をして向後五十年間平和を保たしめは王をしてシ、リ、島及チ、プ、ルスを復するを得せしめむとを以てせり氏は實に能く鞠躬盡瘁して以て西班牙王國歲入の増加陸海軍の改革及び其商工業並ひに其航海業の振興を計り其進歩は實に顯著なり然れども同氏の本志たる西班牙の舊領

を回復し之と共に地中海上の勢力(シブラルター)を失ひたる爲め大に損傷せられたるを克復せむと欲する至當の希望は惜い哉其佛國に於るオルレアン家の攝政を轉覆せむとするの企謀が其時の宜を得さりしか爲めに遂に之を達する能はさりき元來佛國と西國とは其海上權力の關係上シ、リ、リ島に關して共に友視せざるへからざるの地位に在り然るにアルペロニは此自然的同盟を省慮せずして却て蘭英兩海國に欸を通し商業上の讓歩を以て此目的を達せむと欲し英國に許すにウトレクト條約に依れる諸般特權の享用を以てせり蓋し是等の特權は西國か今日迄遷延して之を與へさりし所なり而してアルペロニは此代償として伊太利に關する事件に於て英國か西班牙に便利を與へむことを望めりと雖も是等の提議は塊領伊太利に關し日耳曼帝國に不利なるものなりしか故にマロウ一世は之を承諾するを喜はさりき何となれば王は元來日耳曼生にして其心尙日耳曼人たるを以てなり此に於てアルペロニは大に怒りて遂に其提議を撤回せり此時に方り三國同盟は佛國の王位繼承に關し明かに現存の順次に從はむことを確保したるか故に萬一を僥倖せる西班牙王フ、リ、フ五世をして一層其憤怒を増さしめたり是等交渉の結果として英佛兩國は相結ひて西班牙に反對するに至りしか是れ兩ボルボン

王國の爲めに實に無謀の政畧なりと謂はざるへからず。

是等幾多の企圖及び感情より發生し來れる歐洲の大勢を觀察せむに塊帝と西班牙王とは共に前年ウトレクト條約の結果サゾイ侯に歸したる所のシ、リ、リ島を得むと欲し佛英兩國は戰亂一度ひ起るときは爲に國內不平黨に好機を與ふる虞あるか故を以て西部歐洲の無事ならむことを望めり然れども英王ジョージの地位たるオルレアン公よりも安全なるものありしを以て後者の平和政略は勢ひ前者の爲めに左右せらるゝの傾向あり特に西班牙王の鋭敏なる惡意の爲めに此傾向をして増加せしめたりき。

ジョージは日耳曼人として日耳曼皇帝の成功を望み英國政治家はシ、リ、リ島を西班牙の手に置かむよりも寧ろ前同盟國にして且つ信用を置くに足るへき友邦の手裡に置かむことを望めり而かも此事たる佛國は其真正政策には反するとも攝政の地位上止むを得ざるの事情あるか爲めに亦英國と同様の意見を抱きウトレクト條約を變更し別にサゾイに與ふるにサルダニア島を以てシ、リ、リ島は之を塊太利に移さむことを提議せり然れども西班牙は今や既に王位繼承戰爭時代の西班牙に非ずアルペロニの苦心に依り其兵力の發達顯著なること人をして喫驚せしむるに足るものあり蓋し氏か西班牙

王フリップ五世に對して嘗て約せし所の五年の年數は僅かに其半を經過したるのみなるを以て同國陸海軍の戰爭準備は猶ほ未だ其豫定の如く振整せされども西國は決して其野心を放棄するの意なし之を以て早晚一大事の爆發すへきは是れ免るへからざるの數なりしか既にして偶然起りたる一小事は端なくも之か破裂を速かにするに至れり即ち西班牙の一高官か此際羅馬より陸路を経て西班牙に旅行せむとし偶々埃領伊太利を通過したるか彼は當時尙ほ西班牙王なりと自稱する埃國皇帝の命に依り叛臣として捕獲せられたり此種の凌辱に對してはアルベロニ氏も其國王フリップの激怒を抑止すること能はず十二隻の戦列艦及び八千六百の陸兵は急にサルヂニア(當時未だツヴォイに引渡されざる)に向て送遣せられ其後二三箇月にして之を征服せり是れ實に一七一七年なりき。

西班牙軍は此際勝に乗して直ちにシ、リ、リ島を衝かむと欲せしこと疑ひ無きなり然れども英佛二國は一層敏活に此間に干渉し將に破裂せむとする一般の戰爭を未發に防止せむとを努めたり即ち英國は其艦隊を地中海に派遣し交渉談判は巴里、維也納及馬德里の三市都府に於て之を開かれたり是等交渉の結果として英佛兩國の同意決定せる所は

前陳サルヂニア島及シ、リ、リ島の交換を遂行し、西班牙には其代償として北部伊太利に於るバルマ公國及タスカニア公國を與ふべく且つ埃帝をして今後は敢て西班牙王位に對し不法暴慢なる主張をなさしめざるへしとの諸項なりき而して此提議は兵力に訴るも之を強行せむと決せり埃帝は最初之を拒みたるもアルベロニの開戦準備は實際に於て彌々増進するを見て遂に此提議を承諾せり而して和蘭も亦此同盟に加入したるか故に四國同盟なる歴史的名稱は爰に生じたり。

西班牙は頑然執拗にして容易に此四國の提議を承諾せざりしを以て英王はマナラルタ一の讓渡を提供して其同意を求むるに至れり而して此の如き提供を爲すに至れるを見る時は當時賢相アルベロニか自國の勢力を増進せしめむと企てたる盡力の如何に熱心なりし乎及びマヨ一一世か此四國同盟に關する憂慮の如何に熱心なりし乎を察するに足らむ此等の状況を察するときは佛國攝政オルレアン公か此交渉の進捗を努めたる行爲は多少是認するを得へからむとす。

アルベロニは其外交手段を全歐に及ぼし以て自國の兵力を支へむと試みたり即ちアルベロニは露瑞の兩國を使嚇してスチュアルド家の爲めに英國を侵すの計畫を運らさしめ

和蘭に於る四國同盟の調印は其外交的機密代理員を使喚して之を沮滯遅延せしめたり
 此時に方り佛國に於ては攝政に對する陰謀起り土耳其人は埃帝に對して其野心を攬起
 し來り英國に於ては不平黨其全部に擾々たるに至れり而かもアルペロニはサヴォイ公か
 シ、リ、島を奪はれて憤懣せるに乗し之を攬りて己れに與せしめむと謀れり一七一八
 年七月一日三萬の西國軍隊は二十二隻の戦艦に護送せられてシ、リ、島の北部バレルモ
 に現はれ而かも其以前に於てサヴォイ兵は既に皆退去し殆ど全市を空うしたり是れメ
 シナ城の防禦甚だ固きを以てサヴォイ兵は皆此城中に集まりて以て西班牙軍に抗抵した
 るなり時にチ、ル、ス亦非常の不安を感じたりしか會々メッシナ合國の翌日英國海軍將
 官バインク(後にト、リ、ン、脚と稱せられたる人にして一七五七年に戦没せる中將シヨ
 ン、バインク氏の父なり)の艦隊來港するに會し僅かに其危急を免るゝを得たり蓋し當時
 シ、リ、王も亦方さに四國同盟の條項に同意したるか故にバインク少將はメッシナに上
 陸すへき埃兵二萬を載せて會々爰に來航したるなり然るに其上陸地に近づくや其市は
 西軍の圍む所と爲り居たるを以て同少將は乃ち西將に書を送り二ヶ月間休戦すへきと
 を勧めたりと雖も西將は斷乎として之を斥けたるか故に少將バインクは埃軍をして伊

太利に於るレ、ソ、オに上陸せしめ己は其艦隊を將み此時南方に轉航せる西國艦隊を追ふ
 てメッシナ海峽を通過せり。

尋て英西兩艦隊間に一場の砲撃ありしも是れ未だ以て戦鬪と稱するに足らず蓋し兩國
 將さに戦端を開かむとするの危機に在るも尙ほ未だ實際宣戦せざるに際しては其一方
 たる者は敵艦に對して何程まで攻撃を施すも正當なるへき乎當時此事英人の爲めに一
 個の疑點たり然るにバインク少將は豫め西國艦隊を捕獲若くは破壊せむことを斷然決
 心せるや疑を容れず而かも此決心は彼か軍人として當然行ふへき所を行へるものとし
 て同列者間の是認する所と爲れり之に反し西國海軍士官は此際何等の行爲に出つへき
 乎些しも決心する所あらざりき蓋し彼等は其數に於て大に英軍に及はず且つ其海軍た
 る近三年来アルペロニか僅かに急卒に復興せるものにして其勢未だ陸軍の如き効果を
 得る能はざりしを以てなり然るに英艦隊は早く既に迫り來れるを以て二三の西班牙軍
 艦は恐怖の餘發砲するに至れり此時英艦は上風に在り襲撃一番直に西班牙軍艦を轟壞
 沈没せしめ而かも西班牙軍艦の僅かに死地を脱してツ、レ、タ港中に逃還せるもの僅々數
 隻に過ぎず於是乎西國艦隊は實際皆無と爲れり一論者は此際バインク少將の動作に關

し其戰鬪隊形に關せずして直に敵を攻撃せるを重視すと雖も吾人は其何の故たるを知らざるに苦む彼のパイソグの眼前に横はれるものは其隻數に於ても其修練に於ても適かに己に及はざるの艦隊に非ずや吾人かパイソグの舉動を以て其有功とする所は寧ろ此に在らずして而かも彼が躬ら其責任を負ひ之を斷行せる果斷に在りとする何となれば是れ大事に臨みて後日を顧慮し逡巡する小心家の決して行ふ能はざる所を能く斷して之を行ひたる者なるか故なりパイソグは單に此時に於るのみならず其他幾多の戰役に際し始終能く其忠勇を奮ふて英國の爲めに其任務を盡し官に現實英國海軍の競争者たる敵艦隊を撲滅するのみならず尙ほ亦併せて未來の競争者たるべき敵國海軍の撲滅を努め以て再び英國海軍の強大を致せり而して氏は此忠勤に對し貴族の榮爵を授けられたり此日の戰鬪に關し英國史家の最も得意とする一文書あり即ち左の如し。

古參の一艦長命を受け其分隊を率ゐて敵艦の北くるを追ひ歸來其司令官に復申して曰く「閣下小官等は當海岸に在る西班牙軍艦を悉く捕獲若くは破壊せり其數は別欄に示し置きたり敬具シーワルトン」

英國著者は此事を擧げて例の痛罵を佛人に加へ英人か此く欄外に放棄して顧みざる艦

船も佛人の筆に上れば其史談は幾多の紙面を填むるに足るへしと説けり實にバツサル岬頭の『所謂る戰爭』の如き冗長に之を記述するの値なきことは彼の艦長ワルトンも亦之を感せしなり然れども海軍公報にして何れも皆ワルトンの響に倣はしめむ乎後來海軍史を草する者は將に海軍公報より材料を得る能はざるに至らむとす。

前記の如く西國海軍は一七八八年八月十一日を以てバツサロ岬頭に撲滅せられ之が爲め從來危殆なりしシ、リーの運命は今や始めて確固たるを得たり此後英國艦隊は恒に該島の周圍を巡邏し塊人を援けて西人を離隔し西人は爲めに孤立して講和前に於ては一人も該島を離るゝ能はず此時に方りアルペロニの外交手段は又不虞の變災に際會して失敗に失敗を重ねるに至れり即ち此翌年佛國は同盟の條款を實行せむか爲め西班牙の北部に侵入し其船渠を破壊せり而して此際佛人は製造中の大艦九隻を焼き且つ佛國大本營附英國武官の教唆に因り其餘七隻に對する船材をも併せて悉く焼き捨てたり此の如く西國海軍は全然破壊せられたりしか英國史家の言ふ所に據れば此一舉は全く海軍に關する英國の嫉妬に出でたる者なり佛國司令官スチュワルト家の庶子ベルウック侯は曰く「此擧たる英國政府か次期の議會に對し銳意勉勵して西國海軍を蕩滅したる

ことを證明せむか爲なりき』と英國海軍史家の説に據れば、バインク少將の行爲は凡て當時に於る英國の企圖を明白ならしむるものあり、嘗て埃英及びサルヂニアの三國共にメッ
ッシナ市及び其城砦を圍むに當り、其港内に在る西國軍艦の占有に關して一場の爭論を生じたることありき、此時バインク少將は私かに謂らく、若し是等艦船の西國に復歸するを許すの約を爲すか如きことあらば、斷して之を拒まざるべからず、要するに是等艦船は關係諸王侯間に不利の論争を醸すの基となるべく、且つ結局英國の占有に歸せざる以上は寧ろ何れの國にも屬せしめざるに如かずと、於是彼は埃軍の首將メルチー伯に勸むるに、該艦の武器を利用して一個の砲臺を築き而かも其艦隊は現存のまゝ之を破壊すべきとを以てせり、他の將官等は此説に對して多少の違言ありしも、遂に之を決行するに至れり、凡そ大事を爲すに當りて恒久無欺なる注意と警戒とを加ふる者能く成功を得る價値あるものなりとするときは、實に英國の如きは海上權力を得べき價値ありと謂はざるべからず、若し夫れ此時及び此種の關係に於る佛國の魯鈍無識に至りては實に言語に絶へたり。

西班牙は災厄滔々として激流の如く其國に注ぎ來るを見、又海軍の力無きか爲め遠隔なる海外所領地を争ふことの到底望み無きとを悟るや、遂に其抵抗を止むるに至れり、於是英佛二國は西班牙王に向て其總理大臣大僧正アルベロニの免官を要求し、フカリッは四國同盟の條款に屈從せり、而して英國の友邦たる埃國は中部地中海地方チーブルス及びシ、リに於て其權力を確め、英國自身はブツラルター及びマホン港に於る勢力を確立せり、今やロバート、ウォルポールは英國に於て勢力を得るに至りしか、氏は其後此有益なる交誼の維持を愆り、以て英國が古來採り來れる政策に違背せり、サッォイ家かサルヂニアに於て領土を有するは實に此時に生まれり、而してサルヂニア王なる稱號の伊太利王なる廣義的稱號中に包括せらるゝに至れるは實に吾人の時代以後に在り。
アルベロニの在職と西班牙の野心とは歴史上の少時期を爲せるか之と同時に又バルチック海岸に於ても一場の葛藤起りて、此後暫く繼續せり、而かも此事件は爰に之を説く必要あり、何となれば是れ英國海上權力か僅に一舉手一投足の勞を以て南北兩海に其威力を揮へる一例を示すものなればなり、是れより先き露瑞の兩國は互に久しく相争ひしも一七一八年に至りて一時之を中止せり、是れ此兩國は波蘭に於る王位の繼承を決定し、且つ英國に於てスチュワルド王家を復興せむか爲め相互平和の關係を復し尙ほ進み

第六編 佛國攝政及び西班牙のアルベロニ氏英國ウオルポール氏并に佛國フレイネリ氏等の政界 波蘭王位繼承の戰役 四二五 四二五

て相同盟せむとの商議を整へたるか爲なり當時アルベロニは此企畫に許多の望を繋きたるも瑞典王の戦歿の爲めに此企畫は全く停止せられたり此に於て露瑞兩國の戦争は次第に進行し露王伯得は瑞典の疲弊其極に達せるを見て全然之を壓倒せむと企てたり然れども若し露王伯得の意志の如くならしめむ乎此際バルチック地方に於る權力の平衡を失し該海を以て露領の湖水と爲すは決して英佛二國の利益に非ず况むや英國の海上權力の如き平時戰時を問はず常に此地方より出づる海軍材料に依らざるべからざるに於てをや於是乎西方歐洲の二國は外交手段を以て之に干渉し特に英國の如きは其艦隊を該地方に派遣したり而して當時丁抹も亦其世襲的讐敵たる瑞典と交戦中なりしか忽にして其鋒を收むるに至れり

然るに伯得大帝は此示威的抑壓に對して非常に憤激したるを以て英國は斷然其海軍將官に命じて艦隊を瑞典軍に合しハッサル岬頭の往事をバルチック海上に再演せしめむことを決心せり於是乎露王伯得は之に驚き急に其艦隊を撤去せしめたり是れ實に一七一九年なり然れども露王は一時英艦を避けたるも彼れ未だ肯へて屈服せずして重ねて瑞典海岸を侵襲せり翌年英國は再び干渉を試みたりしか其時機を失ひしを以て瑞典海

岸非常の罹害を救ふ能はざりしと雖も其効果は前回よりも却て大なるを得たり而かも露王は別に見る所あり且つ自己の觀察及び實驗に依り英國海上權の大勢力を確知せるを以て遂に講和を承諾するに至れり佛人は此好結果を以て専ら自國外交政略の功に歸し英國の瑞典を助けたるは甚た微なりと爲せり而して佛人は説を作して曰く「英人は佛國のバルチック海東岸の所領を失はむことを願へり何となれば佛國若しバルチック海東岸の地を失はば露領は延てバルチック海岸に達し英國商業は容易に該國內地の大源泉に達するを得るに至るべきを以てなり」と蓋し此事たる實際有り得べきの事實にして且つ英國の利益特に商業及び海上權力上の利益は此際確かに英人の求めたる所なりしか如し然れども當時伯得大帝の明智なる能く事情を透視せり蓋し當時帝が最も重視せる所は英國艦隊の有する偉大の勢力と其城下に逼り來り得べき能力とに在り此に於てニスタットの講和條約は一七二一年八月三十日を以て締結せられたりしか此條約に因り瑞典はリヴォニアエストニア及びバルチック東岸に於る其他の諸領地を放棄せり是れ理勢の必然避くべからざる所にして即ち當時小邦か其所領を維持すること歳を逐て彌々困難と爲れるに因る

て相同盟せむとの商議を整へたるか爲なり當時アルベロニは此企畫に許多の望を繋きたるも瑞典王の戦歿の爲めに此企畫は全く停止せられたり此に於て露瑞兩國の戦争は次第に進行し露王伯得は瑞典の疲弊其極に達せるを見て全然之を壓倒せむと企てたり然れども若し露王伯得の意志の如くならしめむ乎此際バルチック地方に於る權力の平衡を失し該海を以て露領の湖水と爲すは決して英佛二國の利益に非ず况むや英國の海上權力の如き平時戦時を問はず常に此地方より出づる海軍材料に依らざるへからざるに於てをやは是乎西方歐洲の二國は外交手段を以て之に干渉し特に英國の如きは其艦隊を該地方に派遣したり而して當時丁抹も亦其世襲的讐敵たる瑞典と交戦中なりしか忽にして其鋒を收むるに至れり

然るに伯得大帝は此示威的抑壓に對して非常に憤激したるを以て英國は斷然其海軍將官に命じて艦隊を瑞典軍に合しバツサル岬頭の往事をバルチック海上に再演せしめむことを決心せり於是乎露王伯得は之に驚き急に其艦隊を撤去せしめたり是れ實に一七一九年なり然れども露王は一時英艦を避けたるも彼れ未だ肯へて屈服せずして重ねて瑞典海岸を侵襲せり翌年英國は再ひ干渉を試みたりしか其時機を失ひしを以て瑞典海

岸非常の罹害を救ふ能はざりしと雖も其効果は前回よりも却て大なるを得たり而かも露王は別に見る所あり且つ自己の觀察及び實驗に依り英國海上權の大勢力を確知せるを以て遂に講和を承諾するに至れり佛人は此好結果を以て専ら自國外交政略の功に歸し英國の瑞典を助けたるは甚た微なりと爲せり而して佛人は説を作して曰く「英人は佛國のバルチック海東岸の所領を失はむことを願へり何となれば佛國若しバルチック海東岸の地を失はば露領は延てバルチック海岸に達し英國商業は容易に該國內地の大源泉に達するを得るに至るへきを以てなり」と蓋し此事たる實際有り得べきの事實にして且つ英國の利益特に商業及び海上權力上の利益は此際確かに英人の求めたる所なりしか如し然れども當時伯得大帝の明智なる能く事情を透視せり蓋し當時帝が最も重視せる所は英國艦隊の有する偉大の勢力と其城下に逼り來り得べき能力とに在り此に於てニスタットの講和條約は一七二一年八月三十日を以て締結せられたりしか此條約に因り瑞典はリヴォニアエストニア及びバルチック東岸に於る其他の諸領地を放棄せり是れ理勢の必然避くへからざる所にして即ち當時小邦が其所領を維持すること歳を逐て彌々困難と爲れるに因る

西班牙國は其嘗て四國同盟の爲めに強奪せられたる條項に對し非常に不滿を抱けるは明白にして何人と雖も其理由を解するに難からざるなり此時より後十二年間は世人の稱して平和の時代と爲す所なれども誰か識らむ此平和たる實に不確にして將來に於る戰爭の種子は已に此時代に於て胚胎せられたることを當時西班牙を激怒せしめたる所の三大不平は第一埃國のシ、リ、ア及びチ、イ、プ、ル、スを領すると第二マ、ラ、ル、タ、ー及びマ、ホ、ンの英人に歸せると第三英商及び英船の西領亞米利加に於て盛に禁制品貿易を營むことにてありき而かも是等諸損害に關し有力勤勉なる致害者は一に英國なると明なり是を以て英國は西班牙に對する特殊の警敵たり然れども當時全歐洲に於て英國を敵視する者は獨り西班牙に止まらざりしなり。

茲にアルペロニ失權の後歐洲は姑らく泰平無事を繼續するに至れり此原因は主として當時英佛二國の宰相が相共に一般の平和を望めるの性質と政略とに在りしなり。佛國攝政の政略及び其理由は讀者の既に知る所なりヂ、ュ、ボ、アは一方には此理由の爲に動かされ他の一方には英國の偶然に起したる惡感情を除かむか爲め西班牙に迫りウ、ト、レ、ク、ト條約より更らに一步を進めて英國に對し商業上の讓歩を爲さしめたり即ち彼は

西班牙をして英國の商船一隻を西印度に航行することを承諾せしめたり而して此船は投錨後は斷えず他船をして之に往復せしめ蓄貨物か一方の舷側より陸揚せらるゝや直に一方より新貨物を積込むの仕組なりしと云ふ既にしてヂ、ュ、ボ、ア並に攝政は共に一七二三年の後半に逝去せり彼等は八年間佛國の行政を司り其間前代の賢相リ、シ、ユ、ーの政策を變更して英國及埃國と結ひ自國の利益を以て此二國の犠牲に供したりき。佛國の攝政及び其空名的行政權は王族の一人に移りたりと雖も其實際の統治者は年少國王當時十三歳なるの太傅たる大僧正フ、リ、ユ、ー氏なりき此時に當り佛廷臣僚中陰かに謀りて此大僧正を貶黜せむと企つるものありしも其企謀は破れて成らず却て其結果は大臣の名稱と大臣の實權とを大僧正フ、リ、ユ、ーに與ふることゝ爲りぬ是れ實に一七二六年なり當時サ、ー、ロ、バ、ー、ト、ウ、ォ、ル、ポ、ー、ル、氏は英國大宰相の位に在り其勢威權力重大にして國家政略の方針は實際舉げて氏の方寸より出てたりしかウ、ォ、ル、ポ、ー、ル、氏及びフ、リ、ユ、ー、リ、氏の主として望める所は平和にして特に西歐の平和に在り是に於て英佛二國は此目的を達する爲め其協力を繼續せり而して彼等は各種の不平を悉く沈黙せしむる能はざりしと雖も多年の間能く其破裂を防止することを得たり此兩人は此の如く其目

第六編 佛國攝政及び西班牙のアルペロニ氏英國ウオルボール氏并に佛國フリュネーリ氏等の政略 四二九
波蘭王位繼承の戦役 四三〇 西班牙領亞米利加に於る英國の禁制品貿易及英國と四國との提携

的に於て相一致せりと雖も其意思に至りては彼此大に相異なれり。ウォルポールの平和を望める所以は、(一)英國王位繼承の尙ほ未だ確定せざるの狀態に在りしか爲め、(二)彼が常に其眼目とせる英國商業の平穩なる發達を計らむか爲め、(三)自己に均しき才能傑出か政府部内に出身し來るとを忌むと同時に戦争一度ひ起るときは之か爲めに許多有力の人才群起して政府に入り來らむとを慮かれるなり之に反し、フリーリは其國王の地位及び自己の權勢に關して一も不安を感すへき理由なかりしも其ウォルポールと同じく自國の平穩なる進歩を望みたる所以は恰かも老年者か自然の安逸を欲するか如く偷安の情より大に戦争を恐れたるなり蓋し彼か其職に就けるは實に其七十三歳の時にして死亡の爲め其職を去れるは九十歳の時なりきフリーリ氏の温和なる行政の下に在りて佛國の國運は大に回復し該國を通過する旅行者は瞥見して其國土民情の大に變化せるとを察知し得るに至れりと云ふ然れども此變化を來せるは單に之を彼の温和なる老人の行政の力のみに歸すへき乎將た戦争の禍を脱して民力は休養せられ交通は自在となり以て世界の他部と離隔せらるゝとなきに至れるか爲めに國民の彈力即ち復舊力に依りて自然に此に至りし乎是れ容易に判斷することを得ざる所とす佛國論者の説に

據れば農業は未だ全國を通して回復せらるゝに至らざりしと云ふ然れども其海洋航業上國運の非常に増進せることは疑なき所に於て是れ其原因は主としてルイ十四世の死後次第に加へ來れる商業上の制限を除去したるに在り即ち其著るしく繁昌せるものを擧ぐれば西印度諸島は特に其榮盛を極め其餘澤は延て之と貿易する内地の各港に及びり蓋しマーチニク島グアテルーア島及び北米洲のルイジアナは熱帶地方にして且つ其地は奴隸の力に依りて耕作せられたるを以て其物産は忽ちに増殖して其收入を母國に捧ぐるに至れり是れ偏に佛國植民地に特有なる家長政治及び軍政管理の然らしむる所に外ならず但しカナダは氣候酷烈なりしか爲め其結果甚だ良好ならずさりき當時西印度に於る佛國の勢力は適かに英國の上位しハイチ島の半部のみにも其價値は優に英領西印度全躰に拮抗するを得佛國製の珈琲及び砂糖は英國製品を歐洲市場外に驅逐するに至れり佛國史家の説く所に據るに地中海及びレヴァント貿易に於ても亦西印度と同じく佛國貿易品は英人を壓倒せりと云ふ之と同時に佛國東印度會社は再興せられ其佛國商品貯藏場たる東洋のプレトン市は忽にして壯大なる都府と爲れり思ふに此東洋のプレトンなる名稱は東洋を想ふ毎に何人も聯想懷起する所ならむ此時に當り印度

第六編 佛國攝政及び西班牙のアルベロニ氏英國ウォルポール氏并に佛國フリーリ氏等の政略 波蘭王位繼承の戰役 西班牙領亞米利加に於る英國の禁制品貿易及英國と西國との關係 四三一

に於る佛國商業及其勢力の主要地たるコロマナル沿岸のボンヂシェリー及ガンマス河口のシャンデルナゴール等は急速に膨脹しホルボン島は富饒なる植民地と爲りフランス島現時のモリシヤス島は其位置印度洋を管制するに適せるか爲めに有力なる海軍根據地と爲れり然れども此會社の獨占權は主要なる印度諸港と内地の諸港との間に限れり而して印度洋諸部に於る運送貿易は私人の自由營業に放任せられ私人の力に依りて迅速なる發達を爲せり此私人的商業は全然政府の力を假らす否寧ろ佛國政府の爲めに厭惡せられたるものにして偏にヂューブレイ氏及ひラブールドチー二人の力に頼りて起れるものなり蓋しヂューブレイ氏はシャンデルナゴールに在りラブールドチー氏はフランス島に在りて是等事業の全局を指揮し以て東洋に於る佛國の權勢を振張せむとしたるなり此等の事業は佛國をして印度半島に於て英國の競争者たらしめ且つ一時は佛國をして將來英皇の得たる如き印度皇帝の金冠を得べきの望を抱かしめたりしも此好企圖は遂に水泡に歸し英國海上權力の爲めに壓倒撲滅せらるゝに至れり蓋し佛國商業は政府の保護を受けず唯其國の平穩と商業上無制限の爲めに一時斯の如き大膨脹を成したるものにして其膨脹の迅速なることは是より先き先代ルイ十四世死去の當

時該國所有商船は僅々三百艘なりしに其後二十年にして忽ち一千八百艘の多數に達せるを見て知るべし佛國史家は之を擧げて論じて曰く世の偏見者は佛國は到底海上商業に適せざるを説き佛國は其國民の活動と共に無限に發達すべき商業に適する者に非ずと酷評するものあれども是れ不當の偏見のみぞ

佛蘭西國民の此自由運動はフリーリ氏の寧ろ喜はさりし所にして彼は家鴨子を孵化せる靴鷄の如き感情を以て是を見たるか如しウォルポール氏及ひフリーリ氏は共に平和を好みたりと雖もウォルポール氏は常に其國民の意向に従ひて事を爲し而して其國民は其海上及び商業上の競争者を惡むこと最も甚たしかりしを以てウォルポールも之に従ひたりと雖もフリーリは不幸にもルイ十四世の政略を襲ひ其眼は大陸にのみ傾注して其以外を觀さざりき彼は前攝政と其方針を異にし西班牙と相争ふを望まずして寧ろ之と相近つかむと欲せり然れども西班牙は英國に對して非常なる敵意を挾むを以てフリーリにして若し之と結はむとせば勢ひ其平和政容を犠牲に供せざるへからざりしか故に一時其目的を達する能はざりき要するに彼れの主として心に企畫せし所はボルボン家の王侯を其隣邦に擁立し親族關係の力に依りて之れを合同せしめ以て陸上より

佛國の地位を強ふせむと欲するに在り是に於て其海軍は年々衰廢に赴くに任せられたり噫彼れ佛國政府は其國民か自ら私人的活動を以て奮て自國の海上權力を回復せむと努めたる實に極めて緊要の時に於て却て冷淡にも之を放棄し去りたるなり是を以て佛國海軍の物質的勢力は大に減退し戰列艦及びフリゲート艦相合して僅々五十隻と爲り而かも此等も亦皆老廢憐むべき状態と爲れり其將さに英國と開戦せむとせる五箇年間に於ても敵の九十隻に對して佛國は僅かに四十五隻を有するのみなりき兩國に於る艦隊戰鬪力の此の如きの差違は此後殆むと二十五年にして起れる戰爭の結果如何を豫告せり

此時に當りウォルポールはフリーエーリの援助を頼み斷然西班牙に對する開戦の決意を發表せり西班牙及び其與國は往々英國に對し之を激怒せしむべき行爲を爲せしか英國は是等の行爲に對し常に其海軍を以て示威運動を行ひ好結果を收めたり此海軍示威運動は英國海上權力の強大を想起せしむるものにして幾多の邦國は此影響を蒙りて屈從せり一七二五年西王及び煥帝は多年其間に蟠れる葛藤を切斷し去り相合して維也納に於て一條約を結へり而して此條約中煥帝はマナラルター及びマホン港に對する西班牙

の要求を是認し必要な場合には干戈に訴ふるも之を助成せむとの秘密條項を含み露西亞も亦此合盟に與せむとするの傾向あり此合盟に對して英佛普の三國は反對同盟を形成し同時に英國は其一艦隊をバルチック海に送りて露帝を威嚇し又一隊を西班牙海岸に派して該國政府を掣肘し且つマナラルターを保護せしめ而かも尙ほ一隊を西領メーシに於るポルトベロ港に派遣し該港に集合せる西國艦隊を封鎖せしめ且つ西班牙貨物の供給を絶ち以て該國王をして其國の地位は米國の金銀に依頼せざるべからざること并に其金銀輸送の大道は既に英國の權内に在るとに注意せしめたり

ウォルポールの戰爭を厭惡せるは實に著しきものにして彼がポルトベロに於る英海軍將官に下すに『唯封鎖せよ決して戦ふ勿れ』との嚴命を以てせるを見ても明なり此結果は英艦隊をして徒らに久しく不健康なる海岸に滞留せしめ船員中夥多の死亡者を生し國民の激昂を招くに至れり傳へ言ふ英國艦隊將官ホシア氏を始めとし將卒三千乃至四千は空しく病死せりと蓋し此事たるウォルポール氏か他日其地位を失ふに至れる諸原因の一なりしと云ふ然れども此時ウォルポールは遂に其目的を達することを得たり即ち西班牙は陸上よりマナラルターに對して無謀痴呆なる攻撃を施せざるも英國艦隊は

第六編 佛國攝政及び西班牙のアルベロニ氏英國ウォルポール氏并に佛國フリーエーリ氏等の政略 四三五
波蘭王位繼承の戰役 西班牙領亞米利加に於る英國の禁制品貿易及英國と四國との葛藤

常に此海岸に屯在し之に對する兵器糧食の供給を確實ならしめたるか故に戦争は公然破裂するに至らずして止みたり是に於て埃帝は遂に西班牙との同盟を解き且つ英國の強迫に因り帝が嘗て埃領チーアルランドに於て賦與せる一東印度會社の特許狀を廢棄したり蓋し此會社は其所在地オステンド港の名稱を取りオステンド東印度會社と稱せざるものなりしか英國商人は之を妬視して此競争者の排斥を強請し尙ほ進みて丁抹に於る同種の競争者を排斥せむことを勉めたり而して英國の此二箇の排斥は和蘭の後援に依り以て其望みを達することを得たり。

ウオルポール氏の平和政略は其自然の結果として國家の富饒と國民一般の満足とを致せるか故に自國商業の非常に毀損せられざる限りは容易に之を持續するを得たり是を以て西班牙がシナラルターに關し時々暴慢無禮の舉動を爲せしことあるも此等は尙ほ其平和政略を破るに足らざりき然れども西班牙は今や英國商業に對して一層の損害を加へ英國も終に之を默視する能はざるに至れり請ふ之を記述せむ是より先き西班牙領亞米利加に於るアシメントの讓渡即ち奴隸賣買權の讓渡及び南米派遣の年船に關しては吾人已に之を説けり然れども是等の特權は該地方に於る英國商業の一部に過ぎず

西班牙が其植民地貿易に關する組織は最も狹隘にして且つ最も束縛的の性質を有し西班牙は其植民地を鎖して外國と貿易せしめざらむことを企つると同時に自ら其需要を充たすを努むるとをも忘れたり此の如く貿易の自由を制限束縛したる結果は密貿易即ち禁制品貿易は盛に公行するに至り此等密貿易は盛に其米洲に於る所領の全部に起り而かも其大部分は英人の行ふ所なり蓋し英人はアシメントに依りて正當なる貿易を行ひ且つ年船を利用して不法的貿易若くは無免許の貿易を行ひたるなり此密貿易組織は疑ひもなく西國植民家資本家の大部分に利なるものにして彼等は常に之を喜び又之を奨勵し且つ植民地行政長官に在りても或は賄賂の爲め或は地方の輿論の爲め或は實際禁制する能はざるか爲め常に之を默許せり。

然れども西班牙臣民中亦多少の志士無きに非ず彼等は常に英人の特權を濫用して西班牙の企業を毀損し且つ本國政府が此種の收入の遁脱に由り財政上并に威嚴上に於て非常の損害を蒙むれるとを慨嘆せり於是乎西班牙政府は始めて從來の怠忽を悔悟し漸く其弛廢を緊收し頽壞を恢復するとに着手せり此往昔の葛藤に於る西班牙の行爲を叙述せる言句は不思議にも近時我が合衆國の關係せる一爭議に適用するを得其語に曰く『條

第六編 佛國攝政及び西班牙のアルベロニ氏英國ウオルポール氏并に佛國アリューリ等の政略 四三七
波蘭王位繼承の戰役 四 西班牙領亞米利加に於る英國の禁制品貿易及英國と西國との葛藤

約文面の指示する所は今や一々履行せられたり唯此條約を書寫せる當時の精神は業に已に消失せるとを記臆せざる可からず』と此に於て英國船舶は此際尙ほ其修理給水等の爲め西領港灣に入るの自由を有せりと雖も和親及通商的交通を行ふの利益は之を享有すると能はざる者とせられ英國船舶の西班牙領米洲に到れるものは嚴密なる猜忌を以て之を警戒せられ海岸警護の嚴酷なる搜索を受け且つ各種の抑制妨碍手段を盡して之を英船に施し其正式年船に依りて行ふとを許されたるものを除くの外一切の植民地貿易を妨害せむと欲せり若し西班牙にして嚴密なる警戒を其海岸に加へ且つ其領海上に於て煩雜なる關稅規則を履行するに止めたらむには是れ當時の商業的觀念上普通の事なるを以て甚たしく損害を他國に加ふるとも有らざりしならむ然れども西班牙政府の意氣と當時の事態とは決して此般の程度に止まらざりき蓋し其海岸線の延長幾百裡に亘り又無數の島嶼の其間に散在せる國に在りて能く其海岸を警戒し且つ有効的に之を封鎖するとは決して企て得へきの事に非ず又彼の剛膽冒險死地を避けず千里を追ふて走り之を得るは自己の權利なりと思惟する所の貿易商及び航海業者の如きは區々たる刑罰罰金を恐れ或は西國政府の激怒を顧慮して其射利を止むるか如きこと有らざり

き當時西班牙政府は其勢力甚た強からざりしか故に此際自ら其國商人の感情を利用し該商人の面前に於て英國政府に迫り英國船舶を監督制御し且其特權の濫用を制止するを要求履行する能はず故を以て此弱小なる邦國は他強國の爲めに抑壓せられ又苦しみられ憤怨の餘遂に究策に出で全然不法の手段を用ふるに至れり是に於て戰艦及海岸警護艦に命し西國領外なる大海に於て隨意に英船を停止搜索せしめたり而して微力なる西國政府は些も其臣民を制御すること無かりしを以て彼等は其暴慢なる本性に任じて自由に此種の搜索を行ひ其中には正當なるも不法なるもありて侮辱暴戾殆ど至らざる所無かりき近時西國官吏と合衆國及米國人民との間に一交渉起りしか其原因前件と畧は相類し其結果も亦畧は相似たり。

西國軍艦の不法暴戾なる搜索臨檢を行ふとの始末報聞か英國に達するや非常に人民を激昂せしめたり一七三七年西印度商人が下院に請願せる言に曰く

過去幾年間西國は自國海岸を護衛するの口實を以て其巡洋艦を派遣し吾か船舶は之か爲め屢々停止搜索を蒙るのみならず剩さへ大海上に於て不法專横なる捕獲を被むりたり而かも西人は吾船長船員を虐待し且つ其船を引致して西班牙港に到り其貨物

を没収するを常とす是れ明らかに兩王國間に成立する所の盟約に違背するものに非ずして何そや而してマドリットに於る王國大臣は吾人の懇訴に對して些も省みる所無し思ふに此の如き凌辱は忽にして吾人の商業を撲滅するに至らむとす云々。

一七二九年の後十年間ウオルポールは戦争の破裂を防遏せむと欲して非常の盡力を爲せり此歳セゾイールに於て一條約締結せられ之に因りて從來の葛藤を解き英國は其四年前迄有せる商權を回復し西班牙は直ちに六千の兵を派してタスカニー及びバルマを占領することゝなれりウオルポールは其國民に諭すに戦争は彼等をして從來西國領地に有せる商業上の特權を失はしむべきことを以てし又西班牙に對しては斷えず交渉談判を行ひ英國人民の囂々を鎮靜ならしむべき讓歩及び報償を得むことを勉めたり此時に當り波蘭王位繼承に關して一戦争忽ち起り佛王の義父は波蘭王位要求者の一人として一方に立ち埃國は其反對者を助けたり然るに西班牙及佛國は共に埃國を敵視する者なるか故に此際二國は遂に相合同すると爲り而してサルヂニア王は此同盟の力に依りミランを埃國より奪ふて之を其所領ピードモンに附加せむと欲するか爲めに又之に與するに至れり。

英國及和蘭の局外中立は決して埃領チーデルランドを攻撃せざるへしとの條件に依り確保せられたり是れ埃領チーデルランドの一部たりとも若し佛國の占領する所と爲るときは之か爲めに英國海上權力を危ふすべきを以てなり一七三三年十月同盟諸國は埃國に對して開戦を宣告し其軍隊は伊太利に侵入せり然るに西班牙人はチーブルス及シリ島に對する多年の渴望を充たさむとするの念専らなりしか故に急に他國軍に離れ去りて獨り南方に轉進せしか西班牙軍は今やシリ島の海上を管制し且つ該國民の輿望を有せるを以てシリ及びチーブルスは容易に打破せられ西王の第二子は其王位に登りてカール三世と稱し兩シリ於るボルボン王國は茲に建設せられたりウオルポールの戦争を嫌惡するの甚しき遂に彼をして多年の同盟を棄てしめ其結果たる中部地中海の管制權を轉して英國必然的仇讐に歸せしめ了む。

ウオルポールは此の如く埃帝を見捨たりしか何ぞ圖らむ彼は其友フリーリーの爲めに賣られたる者ならむとは佛國政府は表面上埃國に反對して西班牙と同盟せるか之と同時に亦一方に向て埃國と共に英國に反對する秘密條約を結へり即ち其交渉の文に曰く如何なる場合を問はず苟も均しく埃佛兩國に利ならむ乎其商業上に蒙る惡弊特に英人の

爲めに受くる惡弊は悉く之を除くべし而かも若し英人にして故障を唱へむには佛國は其陸海兩軍の全力を擧げて英人を撃退すべし」と而してホーク卿の傳記記者の指示するか如く此條約は佛國か方さに英國自身と表面上最も親密なる同盟を結ひ居たる時代に於て密かに締結せられたるものなりき是より先きウヰリアム三世が曾て英國及全歐を喚起し共に兵を執りて之に反抗せし所の佛國覇業の一大政畧は此時初めて此の如くに成立せり。

願ふに若しウヰルポールにして此秘密合意を夙とに察知したらむには氏は之を以て其平和維持説の好論據を得たるものと爲せしならむ何となれば氏は其鋭敏非凡なる政治的智能に依り普通人の尙ほ未だ豫想する能はざる所の危険の存在を感知し下院に對して下の如き言を爲したるを以てなり其言に曰く「若し西班牙人にして自己よりも有力なる強邦國の秘密的後援無からむには吾か英國に向て彼等は決して諸君の證するか如き凌辱損害を加ふるとを敢てせざりしならむ」と而して彼は又自己の意見を吐て曰く「英國は佛國并に西班牙の敵手に非ず」と。

フリューリは實に其舊友にして且つ同級政治家たるウヰルポールをして憐むべき最期

を遂けしめたり波蘭王位繼承に關して二ヶ年間の戦争起りしか此戦争は其後直ちに滅亡せる所の波蘭なる一紛亂國の統治者を定めむか爲めの争にして之を喚起せる特別問題の如きは實に些々たる一小事に過ぎざるか如し然れども之に關係せる諸國の行爲に由り歐洲政界に一大變動を來せるか爲め遂に主要の者と爲れり一七三五年十月に於て佛埃二國の合意成り其後サルチニア及西班牙も亦此盟約條項を承諾せり其要點は下の如し即ち「波蘭王位に對する佛國派の要求者は爾今其要求を放棄すべし然れども彼は其代償として佛國の東部に於るパール及びローレーンの公國を受領すべし而して彼の死後其義子たる佛國王は充全なる主權を以て之を支配すべし」と云ふに在り而してシ、リ、一及ネーブルスの二王國は西班牙派ホルボン家の王子ドン、カ、ロ、スの所領と確定し埃國はバルマを復領せりサルチニア王國も亦伊太利に於る其所領を増加したり上述の如く佛國は平和の愛護者フリューリ氏執政の下に在りてパール及びローレーンの二領土を得たるか是れ大に其國力を強めたるものにして此般の所得たる彼の主戰的統治者か渴望するとも容易に得へからざる所なりき而して之と同時に其對外的地位も亦英國の損失に因り坐ながら之を保障するを得たり何となれば英國は中部地中海の管制權を抛ち

て之を佛國の同盟國たる西班牙に移したるを以てなり然れどもフリードリッヒが英國商業を防遏すへしとの秘密條約は遂に其効を奏する能はざりしことを考へ又佛國海軍の衰耗に對する英國海上權力の偉大なるを想へは同氏は之か爲めに蓋し斷腹の思ひありしならむ初め佛西兩國間に成り後兩シ、リ、國の同盟せる彼の條約は當時に於ては單に英西二國間に蟠れる關係に過ぎざりしか此中には將來ボルボン家と英國との間に於る大戰爭を惹起し延て大英帝國の建立と合衆國の獨立とを來たせる處の大事件の種子を包藏せる者なりき。

西班牙の暴行に對する苦情の喧囂は陸續として英國に起りウォルポールの反對黨は此事を視て以て奇貨居くへしと爲し常に之か煽動に努めたり。

ウォルポールは今や齡既に六十を超え其壯時より篤く自から信して之を實行し來れる所の政策を更ゆるの能力を有せざりき然るに今や各異國各異族間に於る銳烈不可抑の諸般の衝突起り來り彼れの威壓政策も和手段も亦之を翻縫する能はざるに至れり元來英人は西印度及西領米國の開放を渴望し西班牙政府は之に向て抵抗を逞ふせしか此抵抗は其宜しきを失ひ該國は大海に於て英船に對し不法の搜索を行ひ又其船員を虐待

し爲めに大にウォルポール反對派の勢力を強めたり即ち當時數多の虐待事件は英國下院に提出せられ且つ其調査の結果に由りて西人か英人を苦めたるの事實は大に明亮となり西班牙人は常に掠奪を行ひたるのみならず大に英國船員を虐待し之を獄裡に投し最下等の勞働を強ひ憐むへき生活を爲さしめたりとの事實は着々證明せられたり就中其最も有名なるものは某商船の船主マニョックスの事件にして其言ふ所に據れば彼は西班牙人の爲めに其一耳を切り去られたりしか此際西人は彼に命するに其耳を携へて英國王に參謁し而かも凡そ英人にして此處に來るものあらは皆之と同様の痛苦を受けしむへきことを告ぐへき旨を以てせり云ふ而して彼は此痛苦の際如何なる感情を帯ひたりし乎の問に答へて曰く『我は其心神は之を神に托し理非の判断は之を吾國家に托せり』と云へり抑も此種の人物の口よりして此種の金言を發せるとは大に疑を挿むへき所にして爲めに此說話全部の信否を疑はざる能はざらしむ然れども當時英國民激昂の極度に際して忽ち此種の事件の起れるより國民感情の激潮は沛然としてウォルポール調停翻縫策を捲き去り西班牙に對する開戦は一七三九年十月十九日を以て英國に於て宣告せられたり此際英國の主張せる所は從來西人の主張實行し來れる搜索權を公然放

棄[○]す[○]と[○]及[○]ひ[○]北[○]米[○]に[○]於[○]る[○]英[○]國[○]の[○]要[○]求[○]を[○]公[○]然[○]認[○]識[○]す[○]る[○]こ[○]と[○]に[○]在[○]り[○]き[○]而[○]し[○]て[○]此[○]等[○]要[○]求[○]中[○]
 マ[○]ル[○]サ[○]ア[○]州[○]の[○]境[○]界[○]論[○]も[○]存[○]在[○]せ[○]り[○]蓋[○]し[○]マ[○]ル[○]サ[○]ア[○]は[○]輒[○]近[○]建[○]設[○]せ[○]ら[○]れ[○]た[○]る[○]所[○]の[○]英[○]國[○]植[○]民[○]
 地[○]に[○]し[○]て[○]西[○]領[○]ア[○]ロ[○]リ[○]ダ[○]は[○]之[○]と[○]其[○]境[○]を[○]接[○]す[○]る[○]者[○]な[○]り[○]き[○]。

此の如く英國か其真相の意見に反對して之を勵行せる戦争は何等の範圍迄德義的に之を是認すへきものなる乎は英國論者の間に於て從來可否兩説共に熱心論争せられたる所なりき。

抑も植民地の商業に關する西班牙國の法律は其精神毫も英國の航海條例の精神と相違ふ所なし而かも西班牙海軍士官の地位は是れより五十年の後西印度に於る一フリゲイト艦の艦長としてチルソンの有せる地位と殆むと同一なりき即ち當時米國船及米國商人は既に其母國と分離せる後なりしも尙ほ其從來植民地として享受し來れる所の商業上の利益を享くるとを得たり於是英國商業の利益を保護するに熱心なるチルソンは大に航海條例を勵行し之か爲めに西印度各地英領人民及び植民地政廳の惡感情を起さしむるに至れり願ふに此際チルソン及其助力者は不法の搜索を行へること無かりしか如し何となれば英國勢力の強大なる強て不法の手段を用ひさるるとも以て能く充分に自國

船舶の利益を保護するを得たればなり然るに一七三〇年乃至一七四〇年の間に於ては西班牙の勢力甚だ微弱なりしを以て勢ひ正當の行爲のみに頼りて自國の利益を保護する能はず苟も自國に損害を加へたること明白なるものは其何れに在るを問はず之を發見する毎に之を捕獲し適法の地域以外に在るものと雖も亦捕獲權を行はむとし爾後之を實行せり。

教授バルロース氏の著書ホーク卿の傳記中の記述は當時ウォルポールに反對なる主戦派に對し全然同情を表せるものなるを以て若し事情に暗きものにして此書を通讀せば下の如き斷案を下すとに躊躇せざるへし即ち何れの國と雖も西國の主張せるか如き搜索權を認むる能はずと雖も西班牙人か植民地に對する母國の權利は正しく損害を蒙れりと云ふこと是なり此際吾人の研究すべき問題は當時英國人民か其商業上及び植民上の利益を擴張せむとする慾情の如何に禁し難かりし乎又此慾情に因りて如何に爭論を惹起せし乎の點に在り蓋し英國論者の想像するか如く佛人も亦之と同様なる慾情に驅られて活動せるならむ然れどもフリーリーの性質及び其一般の政客と佛國人民の天性とを見るときは其大に然らざることを發明すへし佛國に於ては當時の輿論を表示すへ

き國會も無く又反對派もあさりしを以て吾人は今之を知るに由なし而かもフリーエリの性質及び行政に對し種々の論評を試むるに至れるは實に此時以後に在るなり願ふに英國人は寧ろフリーエリか佛國の爲めにローレーンを得ボルボン家の爲にシ、リリを得たるの技倆を稱しウ、ルポールの彼に凌駕せられたるを誹る然るに佛人の彼を評するを見れば彼は一日又一日單に唯其高齡に於る安逸を求めて生活し佛國の疾病を醫するを努めずして却て魔酔劑を以て之を昏迷せしめたり尙ほ彼は其死に至るまでは此靜眠を延ふる能はさりきと云へり此後西英兩國戰端を開くに當り西國は佛國と結へる防衛同盟の利益を得むことを請求しフリーエリは止むを得ず一艦隊を派遣したり然れども彼の之を爲せるは實に已を得ざるに出てたるなり此艦隊は二十二隻より成り當時方さにフェロール港に集合せる西國艦隊を護送して米國に到らしめ英國の攻撃を防止せり。

(註) 一七三九年乃至一七四四年の間に於て佛國、西班牙、交戰中なる英國に對して有せる特殊の政治上の關係は特に爰に之を説明せざるへからず何となれば是れ實際陳腐の見解なりと雖も一種の國際義務に關する見解なるか故なり即ち佛國は西

國との防衛同盟に依り後者か或種の戰爭に關する場合に於ては一定の援軍を送りて其艦隊を助くべきの義務を負へる者とし此種の援軍を送るも是れ英國に對して敵對の所爲を爲すものに非ずと主張せり而して佛國艦隊か條約の條項に依り斯く西國艦隊と共に運動する間は是等艦隊其者は固より英國の敵なりと雖も其他の佛國々民及び其他總ての佛國海陸軍は全然局外中立にして中立者の有する特權は悉く之を享有すべきものなりとせり英國は無論此般の見解を認むるの義務なく直ちに佛國の行爲を以て戰闘行爲と認定するを得たるなり然れども佛國は此舉を以て全く戰闘行爲と謂ふを得べきものに非ずと爲し英國も亦其後實際に於ては佛人の主張を認容せり但し此關係たる到底佛英兩國は公然たる開戰を促すべきものなりしを以て此後一七四四年に到り實際兩國は戰を交ふるに至れり蘭人も亦此後數年にして佛國に對し同一の要求を爲せり即ち蘭人は一方に於て佛國と交戰中なる埃國に大援軍を送り尙ほ他の一方に於て佛國に對し局外中立の特權を得むことを主張せり。

此際フリーエリは尙ほウ、ルポールに對して辨解を試み且つ其和解を爲さむとを望めり佛國の一論者曰く是れ甚だ感服すへからざる空望にして吾海上權力は氏の爲に損害

第六編 佛國攝政及び西班牙のアルベロニ氏英國ウ、ルポール氏并に佛國フリーエリ氏等の政界 四四九
波蘭王位繼承の戰役 西班牙領亞米利加に於る英國の禁制品貿易及英國と四國との交渉

を蒙り又之か爲めに開戦の當初より東洋に於る優勢を佛國に握らしむへかりし方針は妨害せられたりと他の佛國論者は曰く『然れどもウォルポールの顛覆に至りフリーリは始めて自から其従前執政中佛國海軍を衰廢に委したるとの大謬誤を悟れり彼は此頃に至りて自から海軍の重要なるを始めて感得せり彼はチープリス及びサルヂニアの兩國王か佛國との同盟を棄つるに至れる所以は全く英國艦隊のチープリス及びセノアを砲撃し且つ其軍隊を伊太利に輸し來るを恐れたるか爲なるとを知れり佛國は偉大國たるへき此一要素を缺きたるか爲め黙々として最大耻辱を呑み且つ國際法を犯して吾商業を暴掠せる英國巡洋艦の暴戻に對し僅かに不平を訴ふるを得たるのみにして而かも復た之を奈何ともする能はざりき』と。

以上は是れ佛國艦隊か單に西班牙人を保護するの範圍に於てのみ英人に抗敵すへしとの制限に服せる時と公然開戦の宣言せられたる時との間に經過せる所謂空名的平和年間に起れる事實なり此等諸般の事實を茲に説明するとは固より難事に非ず蓋し英佛兩國の首相は不言の間に相一致して表面上決して相交又せざる線路を進まむとせり即ち佛國は自由に陸上より膨脹するの方針を取り英國人か嫉妬を招かざる間は自由に此方

針を以て進行せり而してウォルポールは正に海上より膨脹せむことを謀り此方針を以て自由に利益ありと爲せるなり此利害を冒さざる限りは佛國の陸上に膨脹することには英國の關せざる處なりしなり此進路はフリーリ元來の意見にして又其希望なりき斯の如く一は陸に依りて其勢を張らむことを求め一は海に依りて其力を伸べむと欲したる者なるか其孰れか果して智なりし乎は今や將さに起らむとする戦争に由りて以て之を判示せられむとす何となれば既に一方にして西班牙を以て其同盟と爲す以上は戦争は到底起らざるを得ず而かも其戦争は必ず海上に起るへきか故なり然れども此兩大臣は共に其政畧の結果を見るに及はすして逝けり即ちウォルポールは一七四二年に於て其政權を奪はれ一七四五年に至りて死しフリーリは在職中一七四三年一月二十九日を以て逝けり。

佛國攝政及び西班牙のアルベロニ氏英國ウォルポール氏并に佛國フリーリ氏等の政畧
波蘭王位繼承の戦役 西班牙領亞米利加に於る英國の禁制品貿易及英國と西國との葛藤 四五一

○第七編

一七三九年英國と西班牙との戦争

一七四〇年奥國王位繼承の亂

一七四四年英國に對する佛國、西班牙の同盟

英將マッシュウス氏アンソン氏及ホーク氏の海戦

一七四八年エーラ、シャベルの平和條約

吾人は今や一大連続戦争の開端に達せり此戦争たる殆むと半世期の久しきに涉り其間僅かに少時期の平和ありしのみ此戦や一種特別著大なる本色を具へて以て既往の諸戦争及び將來の戦争と相異なる所を識別するに足るものあり爰に注意すへきは此争鬪は世界の各部を包含し各處に諸般の關係を生せしも主たる紛争は歐洲に存せること是な

り然り而して世界の歴史上海上の管理遠洋諸國の支配植民地占領の如き大問題は一に皆此戦争の結果如何に存し隨て此等諸問題に屬する富の増殖如何も亦之に依りて決せられたり而して大艦隊を海面に泛へ海上を以て之か戦場に轉するに至りしは殆むと此長戦争の終局の頃なりしとは實に奇と謂ふへし此戦に由り海上權力の價値は世に證明せられたるは是れ固より事の當初より明白なる結果なりしなり唯其久しく海戦なかりし所以のものは他無し海上權力の眞理如何か未だ佛國政府の認識する所と爲らざりしに因る佛國の植民擴張に努力せるは既に昔人の知る所なり然れども多數の豪傑ありて之に與りしに非ず管理者は皆冷淡にして不信切なり隨て海軍の事亦遺忘して顧みず是れ佛國が海上權力問題に對して失敗を取る發端にして一時其海上權力の破滅を來せし所以なり

以上は將に來らむとする戦争の特質なり今左に英、佛、西の三強國が歐洲以外の各戦争地に於ける相互の關係を説明せむ。

當時英國は北米に於て本來の合衆國たるメイン州よりマサチューセッツ州に至る十三個の植民地を有せり此等の植民地に於ては英國特有の高尙なる植民の組織能く發達し自治自

第七編
一七三九年英國と西班牙との戦争
一七四〇年奥國王位繼承の亂
一七四四年英國に對する佛國、西班牙の同盟
英將マッシュウス氏アンソン氏及ホーク氏の海戦
一七四八年エーラ、シャベルの平和條約
四五三

存にして而かも其民は忠勤の情に厚く同時に農を勉め商を營み將た漁業を兼ぬる自由人民の團躰を形成せり其國土の性質を曰ひ其地の産物と曰ひ其長き海岸線に沿ふて投錨碇泊に便利なる港灣を有すと曰ひ將た彼等自身の特質を曰ひ彼等は既に海上權力の諸要素を具備せりと謂ふへし斯の如きの其地と斯の如きの其民との上に英國海陸軍は堅く其基礎を西半球に据へしなり而して英國植民は甚しく佛人とカナダ人とを嫉視せり。

佛國はカナダとルイジアナとを領せり當時ルイジアナは今日に於るよりも廣く世人の注視する所なりき佛國は其他尙ほ自己の發見地なりと稱してテハイヲ河とミスシッピ河との間に横はれる全部潤澤地を占領せむことを主張せり是れセントローレンス河とメキシコ灣間との必要なる關鎖なるを以てなり然れども此中間の地方に於ては當時尙ほ特定の職業として見るべきものなく又米洲西方に向て無限に自から擴張すべき權利あるとを主張せる所の英人も此地方に對しては尙ほ未だ判然たる要求權を有せざりき佛國人の強勢はカナダに存せり而してセントローレンス河亦能く彼等を輸送して其國の中心に到らしむニユーファウンドランドとノバスコシアとは彼等既に之を失ひ

しもクローアプレートン島は尙ほ能く彼等の爲めにセントローレンス河と同名灣内の鎖鑰を爲せりカナダは佛國植民制度の特色を有し而して其制度は實に此地に不適當なりき其政廳は家長政と軍政と僧侶政治とを兼ねたるか如きものにして個人冀望の發達を妨げ尋常一様の集會をたに抑へたり植民は商業を棄て農業を擲ち唯一時の衣食を得て以て足れりとし而して武器を取て銃獵に従事せり彼等か主なる交易品は唯毛皮のみなりき又彼等の機械的技術に乏しかりしかは内地航行の船舶をも製作する能はずして其供給を英領植民に仰きたるを見て知るへし唯彼等の強銳なる所以は武事を主とし一般に武器を帶ふるの習俗を爲し各人皆兵卒たりし點に在りき。

英と佛とは其本國に於て既に相反對するの色あり其植民地も亦此風を繼承せり是を以て兩國の領地相對峙し社會上及び政治上互に睨離反目せり佛領カナダの西印度を距ること遠く其冬期の氣候の好良ならざるか如きは其の佛國に對する價值を低減するを免れず加之其財源及び人口共に遙に英領に劣れり即ち一七五〇年に於てカナダの人口は八萬人に過ぎず之に反して英領の人口は百二十萬人に達せり實力と財源とに於て斯の如きの不權衡を有するにも拘はらず佛國のカナダを有する唯一の利益は他無し之に依

第七編

一七三九年英國と西班牙との戦争
一七四〇年英國王位繼承の亂
一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟
英將マックスウェル及ホルク氏の海戦
一七四八年エーラフシヤバルの平和條約

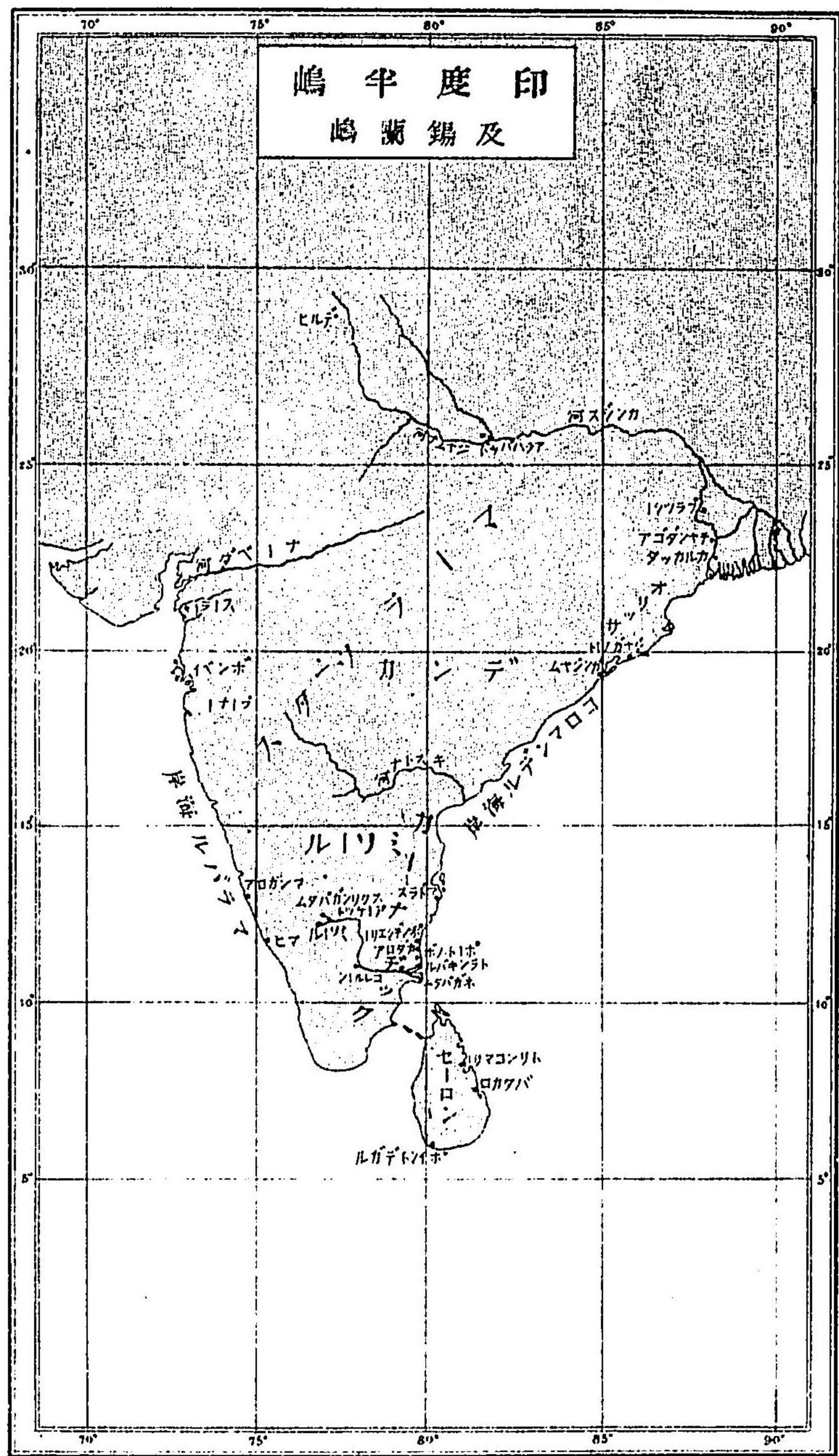
りて以て其近海を直接に支配し若くは一朝事あるの日に當りて其兵力を直に配布するを得ることは是れなり。

當時西班牙は墨西哥及び其以南の米洲諸邦を領するかに北米大陸に於てフロリダ半島を有し其名稱の下に廣漠たる地方を包含せり然れども此半島は此長戦争に際して必要なる土地には非ざりき西印度及び南米に於て西班牙は主として今日尙ほ西領亞米利加諸州として世に稱せらるゝ地方其他キューバ島ポルトリコ島及びハイテイ島の一部分を有し佛國はグアドループ島マーティニック島及びハイテイ島の西方半部とを有し而して英國はジャマイカ島バーバドリス島及び其他の小島を有せしか地味の豊饒なる商業的物産の多き氣候の尙ほ酷烈ならざるか如きは此等諸島をして植民戦争上特殊なる功名心の目的たらしむるに足る然れども當時事實上此戦争中に於て未だ嘗て各島侵略の企圖を實行せしものあらず唯西班牙の嘗てジャマイカを恢復せむと企てたることあるのみ其他の諸島に對しては奪奪を全ふせるものあらず蓋し其理由は他無し是れより先き海上權力に依り各島侵略を事とせる英國か北米大陸に於る英人大團結の企圖の爲めに其海軍侵略の方針上に大影響を受け居りたるか故なり爾餘の一層狭小なる西印度

諸島は其地彈丸黒子の如く而かも孤立するを以て苟も海上霸權を有するの強國ありて之を領するに非されは能く之を支持するを得ず蓋し此等諸島は軍事上二重の價値あり即ち一方には斯の如きの強國一朝之を領せば因て以て軍事上の根據地とするに足るべく他の一方には自家の財源を増し若くは敵の財資を減せしめ以て我商業上に利するあり而して此等諸島に關する戦争は商業上に關する戦争と謂ふも可なるべく島嶼自身を以て敵の貨物を満載せる船舶若くは護送船にも喩ふことを得へし是を以て此等諸島は最終の結果終に其大半英人の手裡に落つるに至る迄の間は轉々其所有者を變ずること恰も通貨の如くなりき而して諸大國は各此等商業の燒點地に幾分の領地を有するか故に各其大艦小船を此地に導けり願ふに大陸は軍事上時候の不順なりしより此傾向を生したりしならむ而して竟に曠日彌久の長戦争をして光耀著明ならしめたる艦隊運動の大半は此西印度に於て起りたり。

此他尙ほ遠隔せる地方に於て英佛兩國互に其雌雄を争ひ其輸贏を賭せしか此戦争も亦北米に於るか如く遂に此繼續戦争中に其局を結ひたり是れ即ち印度とす印度に於ては二國共に直接に政務と商業とを合せて處理する東印度會社に依りて代表せられたり此

第七編 一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年英國王位繼承の亂 一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟 英將マンスフィアソン氏及ホーク氏の海戦 一七四八年エリフンバールの平和條約 四五七



等の會社の背面には各其擁護者として立つ所の本國あり本國官吏と會社派遣の監督員
 及び社員との間には直接に密着の關係を有せり此の時に當り英國主要の植民地は西海
 岸に於てはボンベイにして東海岸に於てはガンジス河口のカルカッタ及びマドラスな
 りき此外マドラスの少しく南方に當り英人には一般にフォートセントジョージとして
 知られ時としてはカンダリーナゴアと稱せらるゝ都府あり此地に居留地の設立せられた
 るは尙ほ後日の事なりとす而して當時ボンベイカルカッタマドラスの三監督廳は互に
 相獨立し單に本國に於る管轄廳に對してのみ責任を有せり。
 佛國はガンジス河に沿ひカルカッタの上部なるカンダリーナゴアと東海岸に於てはマド
 ラスの南方八十哩なるボンデイシェリーとに居留地を建設し西海岸に於てはボンベイ
 の南方遠く距りてメーヘに第三居留地を設立せり然れども佛國は既に前編にも記述せ
 しか如く印度洋に於てフランス島及びボルボン島なる近海諸島の如き恰好なる中間
 泊地を占領せるか故に一層莫大なる利益を有せり之に加ふるに佛國には此の時に當り
 て二人の俊傑出るありて佛領印度半島與其他諸島拓植の諸事務を處理し之か主管たり
 是れ實に佛國をして一層幸運ならしめたりき二人とは誰そやヂューブレール氏とラブリー

ルドンチー氏と是なり此二人の智能膽力は當時在印度の英國士官中に其比類を見ざる所たり而して此二氏は互に其赤心を吐露して國事に努力するや能く印度に於る英領植民地をして之か爲に衰頽に傾かしむるを得たりしか偶々二氏の間海陸孰れを以て邦家の權力の基本とすべきやの一大問題に關して意見の衝突を來たせり蓋し此の衝突たる元來佛國地理上の位置より胚胎し來れる自然の結果にして固より免るゝ能はざりしものぞすヂュブレールの心事を言へば固より商業的利益に眼を注かざるに非ずと雖も彼れの理想は印度に一大帝國を組成して以て佛國をして印度諸侯間の覇者たらしめむとするに在り此目的に向ひ彼は大手腕と敏捷とを以て運動し敢て倦色なかりしと雖も恐らくは是れ多少野心的空想迷執たりしならむ乎彼れ始めて印度に至りてラブルドンチー氏と相見るや一爭論は起れり蓋しラ氏の意見はヂュブレール氏に比して一層簡朴にして且つ堅固なり即ち氏は海上の覇權を設定せむとを欲せしなり其設計たる東洋の譎詐陰險なる不確定の砂上に空中樓閣とも稱すべき大帝國を建設せむと企つるよりも寧ろ佛國との交通を敏活にして海上權力を張らむと欲するにあり或佛國の歴史家マルタンの佛國史にしてヂュブレールの理想を以て寧ろラ氏の企圖に優れりと爲し此時

の事^〇に^〇關^〇して^〇チ^〇ー^〇フ^〇レ^〇を^〇評^〇して^〇曰^〇く^〇「^〇當^〇時^〇海^〇軍^〇の^〇劣^〇弱^〇は^〇實^〇に^〇彼^〇か^〇進^〇行^〇を^〇停^〇止^〇せ^〇し^〇め^〇たる^〇なり^〇」^〇と^〇然^〇れ^〇ど^〇も^〇ラ^〇氏^〇も^〇其^〇身^〇素^〇と^〇海^〇員^〇たる^〇を^〇以^〇て^〇其^〇視^〇線^〇を^〇海^〇上^〇霸^〇權^〇に^〇注^〇か^〇さ^〇る^〇に^〇あ^〇ら^〇さ^〇り^〇き^〇彼^〇の^〇西^〇大^〇陸^〇に^〇在^〇り^〇て^〇は^〇英^〇領^〇植^〇民^〇地^〇に^〇比^〇して^〇カ^〇ナ^〇ダ^〇は^〇非^〇常^〇に^〇底^〇弱^〇なる^〇を^〇以^〇て^〇到^〇底^〇海^〇上^〇權^〇力^〇に^〇依^〇り^〇其^〇實^〇狀^〇を^〇轉^〇換^〇す^〇る^〇に^〇足^〇ら^〇ず^〇と^〇雖^〇も^〇印^〇度^〇に^〇於^〇る^〇競^〇争^〇は^〇一^〇に^〇是^〇れ^〇海^〇上^〇權^〇力^〇の^〇強^〇弱^〇如^〇何^〇に^〇賴^〇て^〇決^〇す^〇へ^〇き^〇なり^〇。

以上は三強國か其國外の戦争劇場に於る相互の關係なりとす亞弗利加西岸に沿へる植民地に就きては未だ論及せざりしも此等地方は單に貿易上の碇泊地たるに止り軍事上必要を見ざるの地なりき當時喜望峯は和蘭人の有に屬せり和蘭は當時の戦争には主要の地位を占めたるに非ず唯英國に對し好意を表する中立國として存立し且つ本世紀の初めの戦争には英國と同盟して終に其亡滅を免れたりき今左に簡單に各國海軍の狀態を説明せむ是れ爾後の講究に關し緊要なるを以て也但し船舶の數量及び其狀態に關しては明瞭精密なる説明を與ふる能はずと雖も其各國艦隊の關係的實力は明らかかに之を評定するを得へし即ち英國當年の海軍歴史家カムベルの說に據れば一七二七年に於て英國の海軍は六十門以上の砲を載せたる戰列艦八十四隻と五十門砲艦四十隻とフリゲ

トト及び其他の小船五十四艘とを有せしか一七三四年には其數減して軍艦七十隻と五十門砲艦十九隻となれり一七四四年には西班牙との四個年間の戦争後其數稍々増して軍艦九十隻と小軍艦八十四隻となれり佛國海軍は同年に於て軍艦四十五隻と小軍艦六十七隻とを有せり一七四七年に於て第一戦争終局の頃にはカムベルの說に據れば西班牙國海軍は軍艦廿二隻に減し佛國の海軍は三十一隻に減したるに英國海軍は百二十六隻に増加せりと云ふ佛國歴史家の說に據れば此等の數字に就き多少明かならざる點ありと雖も佛西兩國艦數の非常に減少せられたりしと其殘存せる諸艦亦多くは老衰して其効力を減し造船工廠亦既に材料を缺乏したりとの點に就きては諸說皆一致せり海軍の斯の如き怠慢は時に多少の變動ありと雖も一七六〇年乃ち此等戦争の終局迄殆むと同一狀況を以て繼續せり此に至りて國民始めて海軍の必要を感じ之を恢復することに努めたりと雖も時機既に遅く佛國の損失せる大部分は之を償ふこと能はざりき蓋し當時英佛共に長日月の平和後なりしを以て海軍の素養訓練と其管理との點に於て根底より缺陷する所あり已に送致せられたる武器は其効をなさず其醜態は恰かも人をしてクリミヤ戦争の破裂に際して英軍の不規律を發表せる醜評を想起せしむ然れども是

第七編 一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年英國王位繼承の亂 一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟 英將マッシウス氏アンソン氏及ホーク氏の海戦 一七四八年エーララシヤムルの平和條約 四六一

より先き佛國海軍全滅の事實は彼等をして再び之を奮位置に恢復するの必要に逼らしめ近世の進歩せる科學を利用したるを以て英國の同種類の艦船よりも遙に優勢なる新造艦船を裝して之を海上に進航せしむるに至りたり唯茲に注意すべきは盡く書を信ずれば書なきに若かざることを是なり何となれば佛國の論者は英艦の速力佛國に優れりと主張し居るに係らず同年代の英人は亦之と反對なる事を記して英艦の速力は劣れるとを慨嘆し其苦情を鳴らし居ればなり然れども一般に言へば一七四〇年より一八〇〇年に至る間に製造せられたる佛國艦船は同種類の英國艦船に比して其設計と曰ひ其容積と曰ひ共に優りしとは世人の一般に首肯する所なり固より英國は水夫及び士官の性質と數量との二者に於ては佛國に優ることは明なり蓋し英國の艦隊は其善惡に拘らず常に航海に従事し士官は身未だ嘗て航海の業を全く離るゝの暇わらず之に反して佛國に於ては一七四四年に士官總數の五分の一は實際其職に従事し居らざりしと云ふ此般の英國の長所は其後優勢の海軍を以て佛國軍港を封鎖せるの際實際上に於て之を試みられ益々其力量を増加せり而して佛艦の海上に出づるや忽ち其實際の熟練を缺くの不利を發見せり他方に於ては英國海員の數は實に多し然れども商業上亦海員の需要多くし

て到底軍事のみを彼等を使用するを許さず一朝戰時に當り之を召集せむとせば全世界に散布出沒せるものを召還するを要す而して艦隊の一部も亦水夫の缺乏の爲めに之を運轉を止めざるを得ざりしことあり斯かる間斷なき執務は固より善良なる海員を養成すること明なり然れども唯恨むらくは壯年血氣の士の概ね遠地に散在し其家に在らざるを以て之か補缺は病人若くは庶弱殆ど言ふに足らざるか如き人衆中に求めざるを得ず從て平均上國民全體の品質をして薄弱ならしむるの傾向あるとを吾人若し更に當時の航海者の状態を詳かにせむには世界巡航の目的を以て出帆せるアンソンの航行記事及び戦闘準備の艦裝を爲せるホーク氏の艦隊記事を讀むと緊要なりとす但し其記事や今より之を見れば殆ど信用すべからざるものにして其結果亦頗る慘狀を極む是れ獨り衛生上缺くる所ありたるのみならず其派遣されたる艦質材料の海上生活に適せざりしに由るものなり當時英佛兩國海軍に於ては共に士官の精撰任免を行ふこと猶ほ雜草の芟除せざるべからざるか如くなりしに當時尙ほ宮廷及び政治上の状態は影響を軍事上に及ぼすと盛むなるのみならず泰平の餘弊を受け急に此般の精撰をなすと能はず故に當時の急務に處して畫策過らす身を挺て能く戰場の責任に堪ゆるか如き好丈夫

第七編 一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年英國王位繼承の亂 一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟 英將マズシウス氏アンソソン氏及ホーク氏の海戰 四六三

夫○も○奮○て○之○を○拔○擢○す○る○こ○と○能○は○さ○り○し○は○吾○人○の○遺○憾○と○す○る○所○な○り○斯○の○如○く○兩○國○共○
に○其○素○養○極○め○て○乏○し○く○一○世○紀○以○前○の○士○官○と○も○云○ふ○へ○き○舊○廢○の○士○官○に○頼○り○て○海○軍○を○維○持○
し○隨○て○其○結○果○の○不○良○な○り○し○は○怪○む○に○足○ら○さ○り○き○。

一七三九年十月英國は西班牙に對して宣戰を布告せしか英國當初の計畫は先づ西班牙
領南亞米利加植民地を攻撃するに在り蓋し之を征服するの易くして多額の捕獲物を得
へきことを豫想したればなり第一の遠征は海軍將官ヴァノン氏之を率ゐて同年十一月
出帆し果斷なる襲撃を以てポルトベロを略取せしか唯一萬弗の鹵獲ありしのみ而して
西班牙の艦船は皆港外に逃走せり既にしてヴァノンがシアマイカ島に歸るや偶々多數
艦船の來援するあり陸兵一萬二千も亦已に來着し居れり即ち此援兵を以てカータマ
并にサンチアゴ、ド、キエバを攻撃せしか此二ヶ處共に非常なる失敗を取れり其原因は他
無し此時海將と陸將と相軋したるに因る是れ海陸將官共に相互の勤務の何たるを理
解するの能力なき時代に在りては怪しむに足らざる也有名なる海軍佐官兼小説家マ
リアット氏はカータマの攻撃を叙するに當り諧謔的誇大の筆を弄して此誤解の要點
を示して曰く陸軍は思へらく海軍は厚さ十呎の石造胸壁を破碎するに足るものならむ

ど○而○して○又○海○軍○は○怪○む○ら○く○何○故○に○陸○軍○は○直○立○三○十○呎○の○石○造○胸○壁○を○一○躍○し○て○跳○過○せ○さ○り○
し○や○と○。

第二の遠征は其司令長官の堅忍と不撓とを以て世に知られ特に其遭遇せる困難と最後
の奇果とに由りて有名なりとす即ち一七四〇年司令長官アンソン氏の之を率ゐて出帆
せるもの是れなり此行や其目的とする所クープ、ホルンを回航し南亞米利加の西海岸
に沿へる西班牙の植民地を攻撃するに在り然れども艦隊の管理其宜を失ひ爲めに行進
滯滞して一七四〇年は終に一も爲す所なかりき其クープ、ホルンを過ぐるや季節殊に
悪しく連日連夜非常に激烈なる暴風の襲ふ所となり艦隊は潰散瓦解して復た收拾すべ
からず是に於てアンソン氏は無限の危地を踏み儘にジャンフェルナンデスに於て其一
部を再集し得たり二艦は英國に歸り第三艦はチロリの南方に流失せりアンソン殘餘の
三艦を率ゐて南米洲の海岸に沿ふて巡航し多少の捕獲を爲しペータ府を掠奪せり又ハ
ナマに近接しヴァノン少將の艦隊に連合し若し成し得へくむは之と共にバナマを攻陥
し以て同地峽を占領せむとの志望を抱きたりしも同少將のカータマに於る大失敗を
聞き其志望を一變して其航路を太平洋に取りアカバルコよりマニラに到る毎年定期航

第七編

一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年英國王位繼承の亂 一七四四年英國
に對する佛國西班牙の同盟 英將マッシウス氏アンソン氏及ホーク氏の海戦

海を爲す所の二艘の西班牙艦船に遭ふて之を沈没せしめむと決心せり時にアンソン氏は其殘艦二隻の中更に一隻の航行に堪へざるを認め之を破碎せざるへからざるの境遇に陥れり因て殘艦一隻を率ゐて進み竟に非常手段を斷行して西班牙大船を奪ひ能く其目的を遂げ通貨百五十萬弗を獲得せり要するに此遠征たる許多の危難に遭遇し單に西班牙植民地の恐怖と此より結果する擾亂とを惹起せしめたるに止り軍事上一の裨益する所無かりしと雖もアンソン氏か能く終始其逆境に處して泰然屈せず遂に其効を奏するに至りしは亦以て能く其任務を果せるの名譽を荷ふに足る。

一七四〇年内に於て全歐洲を震動し一般の兵亂を惹起するの二大事件現出せり而して英國と西班牙とは此時已に干戈を交へ居りしなり抑も二大事件とは何ぞや一は此歲五月フレドリック大王普國の王位に登りしことにして他は此歲十月嘗て西班牙王位の要求者たりし埃地利帝チャールス六世の崩御せしこと是なり帝男子なし遺言して其長女マリアテレサに其主權を與へたり蓋し此承位たる帝か生前苦辛して百方其外交的政略を運らし以て其鞏固不動を計りたる所に於て歐洲諸強國の共に之を擔保せし所なりしなり然れども女帝の位置の外見上甚た薄弱なることは端なくも他の各邦國諸君主の大

望心を刺激したり就中獨逸撰舉侯バヴァリア國君は埃國全部を自ら繼襲して之か帝位を承くべきの要求を爲し而かも佛國は實に之か後援煽動を爲せしなり之と同時に普國王は復シレシヤ州を要求して直に之を奪取せり他の諸強國亦其大小如何を問はず或は埃を助け或は他に與し各此好餌に向て其分配を求めたり之に反して獨り英國は其王のハノバール國撰舉侯たりし故を以て錯綜せる關係上よりし此際特に撰舉侯領と相約して中立を守るべき契約を爲せり然れども英人の輿望は皆非常に埃地利に同情を表せり既にして西領米州植民地に對する遠征軍の失敗と英國商業の非常なる損失とは彼の多年平和主義を以て泰平を粉飾せし所の首相ウォルポール氏に反對する英國人心の激昂叫喚をして大に増加せしめたり氏は終に一七四二年を以て辭職したるか故に之に代りて新内閣の起るや英國は公然埃地利と同盟せり時の國會も亦埃國女帝に對して單に軍資金補助金を贈るに止まらず援兵を埃領ネーデルランドまで送致すべきとを議決せり此時に當り英國勢力の下に立てる和蘭は已に條約を以てマリアテレサの繼位を是認することとを約せしか故に英國と均しく亦埃國の爲めに毎歲補助金を送ることを議決せり是に於てか國際問題の奇異なる現象は再び起れり乃ち蘭英二國は主位に立たず唯客位に

第七編 一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年埃國王位繼承の亂 一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟 英將マックスウェルアンソン氏及ホーク氏の海戦 一七四八年エーラ、シヤバルの平和條約 四六七

在りて、埃國女帝の爲めに援兵を出し、其佛國に對する戰爭に加はれり然れども、各其本國の國民として、佛英互に平和の位置を保てり、又海上に於ては、英が埃に對すると同一の關係を以て、佛國は西班牙と防禦的同盟を爲し、補助者の地位に立てり、而かも尙ほ英國とは平和を保てるか、如く裝ひたりき、此時英船佛艦に對して攻撃せしことありしか、佛國論者は未だ兩國公然干戈を交ゆるに至らざるに、此事ありと説き、眞面目の語調を以て、非難せるは頗る奇と謂ふべし、一七四〇年佛の艦隊亞米利加に航行せる西班牙艦隊の一部を救助せしことありしは、既に記載せし所なり、一七四一年西班牙は明かに埃地利の敵國として大陸戰爭に加はり、パーセロナより陸兵一萬五千を送り、伊太利に於る埃地利領地を攻撃せしか、英の海軍少將ハドックは地中海に於て之を捜査發見せり、時に佛國軍艦十二隻亦共に此處に在りしに、佛將官は英將官ハドックに告て曰く、余も亦西班牙人と同しく出征進攻の途に在り、貴邦弊國未だ宣戰に至らざるも、卿若し西班牙人と戦ふの意あらば、余も亦之に加はり戦ふべし、余か帶ふ所の本國の命令は此の如し、此時佛西同盟軍艦隊の勢力は英軍に比して殆むと二倍に當れるを以て、ハドックは卑怯にも手を空ふしてマホ港に退歸せり、ハドックは此失錯に依り忽ち其職を免せられ、海軍將官マッシュウス之に

代り英國地中海艦隊司令長官とサルマニア王の主府チユリンに於る英國公使とを兼任せられたり、一七四二年英の某艦長其艦隊を帥めて西班牙商船を追撃し、西班牙船のセントトロベツ港内に佛國入るに及び、尙ほ之を追尾して港内に入り、佛國の自ら中立を唱ふるにも拘らず之を焼き拂へり、同年マッシュウス將官は又其部下の代將官コムモドールマルチンに命じて一部分の艦隊を帥めてチーブルスに至り、ホルボン王に迫り王が北伊太利に於て西班牙軍に與みせしむる爲め派遣せる二萬の兵士を退却せしめむことを要求せしむ、王は暫時商議の猶豫を乞ひしに、將官マルチンは自己の時計を出して曰く、「一時間猶豫を與へむ」と、王已むを得ず、マルチンの要求に従ふ是に於てか、僅々廿四間の滞在は能く埃國女帝の爲めに危害なる敵軍を退かしめ、伊太利に於る西班牙軍は海上より交通進入するとを全く遮斷せられたるか故に、其勢力極めて細微と爲れり、之に反して英國は海上に横行し、チーブルスに於て其威勢を張れり、セントトロベツとチーブルスとに於る上記二個の出來事は佛國の老翁フリーリに非常の感動を與へ、根底より堅固不拔なる海上權力の範圍と必要とを認識せしめたり、然れども彼れ之を悟るの時機已に遅かりき斯の如くにして、英佛兩國に於る睽離反目の原因は日一日に増し、兩國共に戰爭の客位者た

第七編 一七三九年英國と西班牙との戰爭 一七四〇年埃國王位繼承の亂 一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟 英將マッシュウス氏アンソン氏及ホーク氏の海戰 一七四八年エーラ、シャハルの平和條約 四六九

る口實を去らざるべからざるの時機は彌々迫れり是より先き英國はサルヂニア王をして
 埃國の左祖者と爲らしめたるか爲めに大に其海上權力と富實とを増すを得たり初め
 ザルヂニア王は英佛兩強國の間に介立し彼此何れに與みせむ乎の去就に惑ひ爲めに左
 視右顧して利害を考究せしも英國地中海艦隊の優力なる以て其深く結托すべきことを
 知り特に英國より軍資補助金を得たるか故に遂に其意を決して陸兵四萬五千人を送り
 此大戦争に加ふることを英國に約束し一七四三年九月を以て此條約に調印せり十月佛
 國の老翁フリュイリ既に歿しルイ十五世は西班牙と條約を結ひ公然英國とサルヂニア
 に對し宣戰を布告し伊太利マナラターマホン、マホ、マホ等に對する西班牙の要求を
 贊助せむことを約せり此に於てか現實の戦争直ちに起らむとす然れども宣戰は尙ほ猶
 豫せられ而かも古來最大なる一海戰は表面上平和の時期に於て行はるゝに至れり。

一七四三年の終りに臨て西班牙國王イソフアント、フカリッパは密かに其兵を發して以
 てゼノトス共和國の海岸に上陸せしめむことを企てたり然れども英の艦隊之を妨害し
 西班牙艦隊はツローンに逃れ英艦之を圍繞し四個月を経て出づる能はさらしむ此危難
 に際して西班牙王はルイ十五世に哀願しルイ十四世時代の海軍勇將たる八十歳の老將

官ドクールを將とし艦隊を率ゐてマニョア若くは自國の港内(其何れなるや詳かならず)
 に西班牙軍を護送せしむるの命令を發せしむることを得たり當時佛國海軍將官は敵の
 攻撃を受くるまでは敢て自ら進みて發砲すべからざるの命令を帶へり而して該將官は
 西班牙軍艦をして充分に協力せしむるか爲めに(但し其戰鬥力に對しては充分なる信用
 を置かさざりしも)嘗て蘭將ルイテルの用ゐたる故智に倣ひ西班牙軍艦をして佛國の艦列
 内に交列せしめ以て之と共に進み戰はしめむことを望めりと雖も西班牙將官ナバロ之
 を聽かず故に他の戰鬥隊列を取り即ち先づ佛艦九隻を前衛とし中堅は佛艦六隻と西艦
 三隻とを以てし後隊は九隻の兩艦を以て組織し總艦數廿七隻は此隊形を以て一七四
 四年九月十九日ツローンより出帆せり英國艦隊は偵察の爲めヒュレ沖を航海しつゝあり
 しか遙かに之を望み見て直に追躡を始め廿二日に於て英艦隊の中堅と前衛とは西佛聯
 合艦隊に追及せり然れども英軍の後隊は逆風の爲め當時尙ほ數哩の後方に在りて前軍
 と連絡を全く失へり(第七圖參照)此日風は東方より吹き兩艦隊共に艦首は南方に向ひ而
 かも英艦は上風の地位に立てり今其双方艦隊の隻數を比するに英艦は聯合艦隊の二十
 七隻に對する二十九隻にして兩軍殆ど相若けり而して英軍は全艦に於て二隻多きも其

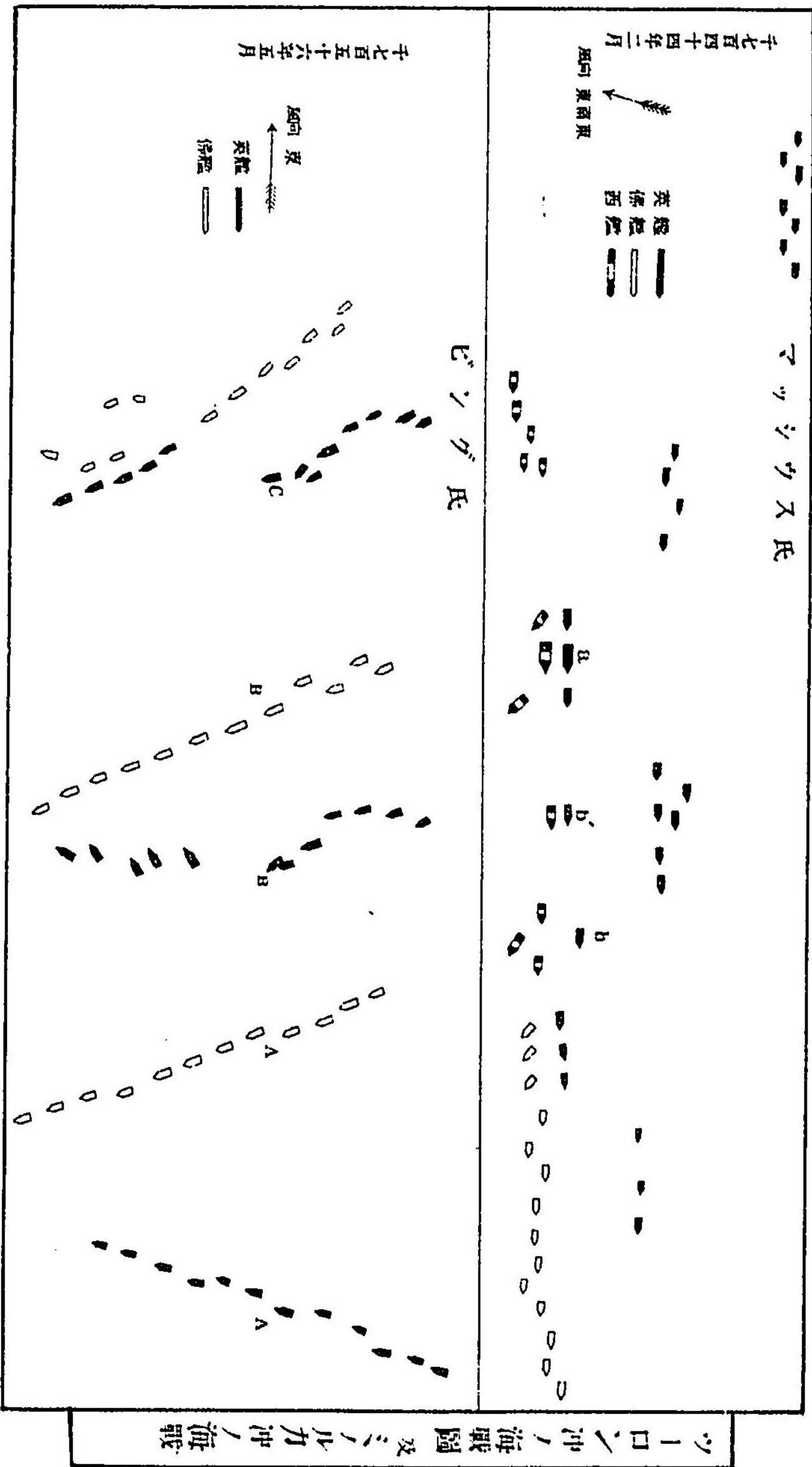
第七編

一七三九年英國と西班牙との戦争
 一七四〇年埃國王位繼承の亂
 一七四四年英國
 一七四八年エーラ、シヤハルの平和條約
 一七四〇年埃國王位繼承の亂
 一七四四年英國
 一七四八年エーラ、シヤハルの平和條約

後隊の連絡を失せるか爲めに却て劣勢に陥れり或は曰く此後隊司令官の斯の如き遅緩なる進行を取りしは其上上官たるマッシウス少將に對する悪感情より出てたる者也と後隊司令官は自ら辨明して其分離の位置より滿帆の速力を以て本隊に追及せむと企てたりと云ふも當時後隊が實際攻撃を爲し得る地位に立ちながら徒に遷延逡巡して終に攻撃せざりしとは事實なり而して彼の陳疏する所に據れば此日戦闘隊形を作るべき信號は恰も開戦の信號と同時に飄へれるを以て戦闘隊形を作らむと欲すれば戦闘を開始するの暇なく二者一時に爲すと能はざるを以て寧ろ其一を取りたりと此技術的辨解は其後軍法會議の容るゝ所となれり此の如くマッシウス少將は其後隊司令官の怠慢遅緩の爲めに太甚たしき不便を感じたるも戦闘を猶豫するときは敵の遁逃する虞あり故に自己の前隊恰も敵の中堅と相並行して進むに當り戦闘開始の信號を掲げ直ちに自から挺進し線外に出て自己の九十門砲の旗艦を以て敵の戦列中なる最大艦ローヤル、フネリ、フネリを攻撃せりフネリ、フネリは百十門の砲を有し西班牙將官の旗を樹てたる者なり

(第七圖中)。マッシウス少將の前後の兩艦は其旗艦を助けて勇戦奮闘せしか此突撃は誠に好く其時

第七解 戰圖



機を得たり何となれば此時偶々五隻の西班牙艦は遠く後方に在りて散亂し西國將官の
旗艦を掩護するを得るものは單に其前後の兩艦に過ぎず又他の三隻の西艦は佛艦と共
に既に遠く先方に去りて其急に應ずる能はざりしを以てなり此時に方り英の前隊は聯
合軍の中堅と戦へり而して聯合軍の前隊は敵を受けず即ち英艦の配列線頭より方向を
轉して上風に出て英艦を挾撃せむことを企てたり然れども英の三先頭艦長の慧眼なる
直に之を悟り退却の信號あるにも拘らず斷然其位置を保ち以て敵の企圖を阻絶するこ
と二回に至れり然るに該三艦長は此戦の終りし後に及て其信號に服従せざりしを以て軍法會議に問はれ爲めに免黜せられたり按ずるに三艦長の信號に服せざりしは固
より不可なれども其實は謹慎にして正當の行爲なりしを以て其後舊位に復したり然る
に此行爲は漫然思慮なき中堅の艦長等に依りて模倣せられたり唯前に記せる後隊司令
官并に前隊中の艦長等は之に模倣せざりき前隊中の艦長等は其司令長官マッシウス少
將加敵と接迫して非常に激戦するに際し僅かに遠距離より砲撃を繼續せるのみ茲に此
際に當り特殊の一例外として見るべき勇敢なる事跡あり他無し後來有名なる海軍將官
として知られたる艦長ホークか先づ彼の最初の敵を擊退し更に司令長官マッシウスの

第七編

一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年奧國王位繼承の亂 一七四四年英國
に對する佛國と西班牙の同盟 英將マッシウス氏アンソンの氏及ホーク氏の海戦
一七四八年エーワシヤベルの平和條約

行爲に倣ひ前隊中に於る彼の位置(第七圖中)を離れて英艦五隻と激戦せる一西艦に接
 迫突撃し(第七圖中)遂に之を捕獲せること是なり是れ此日の唯一の戦利物たりしなり
 英の前隊司令官も亦其後續艦と共に英氣を鼓して接戦せり余は茲に自餘の戦況を詳説
 すること爲さるへし何となれば軍事的機密上に於ては何の効益も無ければなり而
 かも此戦の最要なる結果はホークの功名を擧げたるに在り英王及ひ其政府は共に此戦
 争に於る彼の功勞を永く記憶せり抑も此戦に於る英國艦長の不能力と其過失とは英國
 海軍の多年抱き來れる海上覇權を握るの希望を空ふしたりと謂ふも過言に非ず蓋し當
 時英國は四十年の長年月に渉れる戦争の第一戦たる此海戦に於て一大勝を制して以て
 海上覇權を握らむと欲せしは事實なり然るに其結果は豫想に反して一大失敗に陥りた
 りき然れども此戦争は海軍士官に教ふるに平生の素養鍛鍊の必要を以てし凡そ戦闘の
 際に於て狼狽の耻辱を受くると無からむと志さすものは宜しく平素に於て常に豫め能
 く戦闘の形勢事情に注目して之を講究し平素の鍛鍊修養を必要とすへきとを教へたり
 き。

(註) 近世海戦史上に於て古今各時代の海軍士官を警醒するとツィロン戦闘に如く者

莫○し○然○る○所○以○は○他○無○し○此○戦○か○海○軍○の○比○較○的○弛○緩○不○振○な○る○時○代○の○後○に○於○て○起○り○た○る○を
 以○て○特○に○各○士○官○の○名○譽○心○を○痛○く○試○験○し○之○を○鼓○舞○し○た○る○か○故○也○著○者○の○判○断○す○る○所○に○據
 れ○は○凡○そ○海○軍○士○官○其○素○養○の○準○備○を○怠○り○自○己○本○職○務○上○の○智○識○並○に○凡○百○海○戦○に○必○要○な○る
 感○覺○を○缺○乏○す○る○と○の○醜○態○危○險○を○該○士○官○各○人○に○能○く○教○示○し○た○る○も○の○は○此○ツィ○ロ○ン○戦○争
 也○蓋○し○吾○人○普○通○の○人○類○は○決○して○卑○怯○な○る○者○に○非○ず○然○れ○ど○も○其○危○急○萬○死○の○際○に○臨○み○警
 視○即○斷○神○の○如○く○能○く○適○當○の○進○路○を○取○り○て○其○宜○し○き○を○失○は○さ○る○の○大○能○力○は○天○下○其○人○極
 め○て○稀○れ○な○り○と○す○吾○人○は○唯○各○自○の○經○験○を○積○み○或○は○反○省○に○由○り○て○以○て○臨○機○即○斷○神○の○如
 き○の○能○力○を○得○へ○き○の○み○之○を○得○る○の○多○き○と○少○き○と○は○是○れ○其○人○素○養○の○深○淺○如○何○に○在○ら○む
 の○み○若○し○夫○れ○其○經○験○と○反○省○と○を○缺○き○た○る○士○官○は○一○朝○事○に○臨○み○其○決○斷○を○失○し○指○揮○命○令
 の○宜○し○き○を○得○ず○之○か○爲○め○に○其○任○務○を○誤○ま○る○に○至○ら○む○と○す○ツィ○ロ○ン○の○戦○は○實○に○之○を○證
 せ○り○此○役○免○黜○せ○ら○れ○た○る○各○艦○長○中○の○一○人○某○氏○の○人○と○爲○り○を○評○す○る○衆○説○に○據○れ○は○此○人
 は○此○役○失○錯○終○身○不○治○の○汚○名○を○被○む○る○前○に○在○り○て○は○海○軍○同○儕○中○に○於○て○誰○あ○り○て○之○に○匹
 する者無き高尚なる資性を以て推稱せられたる程の人物なりしと云へり同氏と同時
 代の人にして善く其人と爲りを熟知せる衆紳士は此役免黜一件の原因を聞き其不可

第七編 一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年英國王位繼承の亂 一七四四年英國
 一七四八年エーランドの平和條約 一七四〇年英國王位繼承の亂 一七四四年英國
 一七四八年エーランドの平和條約 一七四〇年英國王位繼承の亂 一七四四年英國

争的事实たるも尙ほ肯て之を信せず而かも大に驚愕して叫て曰く……剛勇果敢彼
か如きパリシ大佐にして豈此くの如き怯懦未練の舉動あるへけむや吾輩は到底之を
信する能はずと云々。

此某大佐なる者は海軍に服役すると廿五年の久しきを経而かも艦長と爲りて海外に
服役すると既に十一年なりき(チャーノック氏著海軍將校傳)此他の免職者も亦其大事
に臨む以前に於ては好評を有せし人物なり就中此際軍法會議の受審を避けむか爲め
に其身を海外に隠匿せしリチャードノアリス氏の如きは此役前に在りては殊に尊敬
すへき名譽を有せし人物なりき。

茲に注意すへき一要件あり他無し此ツィロン海戦に於る失敗は多數の英國海員の卑怯
に類する失行に起因せる者と推料すへからさると是れなり蓋し此失敗の原因は第一艦
長等か素養の缺けたると軍事能力の缺乏と第二アドミラルの指揮其宜しきを得ざると
第三上長官として往々免るへからざる粗暴豪慢に對する麾下の惡感情とにして此三者
の結合より來れるものなり論して此に至れば上官の上官に對するや須らく赤心を人の
腹中に置くの熱情と好意と無かるへからざるを知るに足らむ是れ實に戰勝の爲め直接

に必要なるのみならず其他の戰勝の要素を胚胎せるを以てなり他の要素とは何そ人間
の呼吸とも謂ふへき精神是なり精神の一到は能く萬般の事を成すとを得せしめ至嚴至
酷の練習但し斯かる練習か世に奏功せし例を聞かすと雖もか到底達し能はる企圖を成
功せしむ此精神や實に靈妙の働を有し誠に皇天唯一の賜と謂はむも不可なし而して古
來其最も高尚なる實例はテルソンに於て之を見る彼カトラファルガに艦隊を集合す
るや旗艦に來會せる諸艦長彼と相見ると満悦の情抑へむとして抑ゆへからず中將其人
の位階をたも忘れむとするに至れり此際戰死せる艦長ダツフ氏の書狀を見るに左の言
あり曰くテルソンは實に愛すへき優等の人物にして而かも信切なる長官たり該將官麾下
の將士は皆各其至誠を以て彼か爲めに死力を效たすとを樂み彼か希望に充分に副は
むとを願ひ唯其敵に接するの遲きを憾む配下は命を受くるを樂むの切なるよりテルソ
ンの命せむと欲する所の何たる乎を豫知せむとを欲せりとテルソンも亦自ら此崇拜的
服従の價値を知りしか如くナイル戰爭の際ホー卿に送れる一書の中に「余は實に兄弟の
一隊を指揮するか如き幸福を有せり」と記せり以て其熱情を見るに足る。

ツィロン沖海戦に於るマッシウス少將の行爲は其熱練と其結果とに比すれば、酷に過く

第七編 一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年英國王位繼承の亂 一七四四年英國
に對する佛國西班牙の同盟 英將マッシウス氏アンソン氏及ホーク氏の海戦 一七四八年エーラ
シヤハルの平和條約 四七七

るの悪評を得たり蓋し本國に於る喧噪と軍法會議の問題を多く生したるとに因れるなり司令長官マッシュス少將自身及び艦隊司令副長官其他廿九隻中の十一艦長は皆軍法會議に問はれたり而してマッシュスは當時自ら隊列を破壊したる者として免職せらる然れども其實狀は彼の戰鬪線を脱して敵に接近せし時他の艦長等皆彼に隨從せきりしに外ならず然るに之を罰するは是れ賊に其杖を悪て其樹を枯らすと謂ふへく又愛蘭人の殺伐なる争鬪の情を愛して之か格鬪に用ゆる牡牛を喰はむとするど一般の判決と謂つへし副司令長官は前に記せし如く職務上至當なる過失として赦されたり嗚呼彼は戦争の際遙かに後方に在りたるを以て却て脱線の非難を免れたるなり十一人の艦長中に於て其一人は死亡し一人は逃去し七人は或は免職せられ或は休職を命せられ唯殘餘の二人のみ赦免せられたり又顧みて佛軍西班牙軍戦後の状況を見るに同じく互に罪狀過失をのみ告發し佛艦隊司令長官ド、クール中將は免職せられたり反之西班牙艦隊司令長官中將ナヴァロは其戦功を賞せられ、ピクトリヤ侯爵と云へる榮爵に叙せられたり是れ實に僥倖の甚たしきものにして僅に敗走を免れたるの戦争に對しては無上の僥倖榮典と云ふへし佛人某曰く戰鬪の際彼は輕傷を負へりと稱して甲板を去り實際は佛の某艦

長之に代りて指揮せし者なりと。

抑も此戦争は四十年前のマラガ沖戦争後始めて起れる活劇にして大に英人を刺激せり是に於てか海軍將校の淘汰の方法等も着々施行せらるゝに至れり然れども奈何せむ時機既に遅く直に當時の戦争の急務に應ずること能はざりき夫れ英國海上權力の一般の價値は其最初の時期及び後世に於る如き隆盛の場合に於て之を見るを得ずして寧ろ其中間時代即ち不遇なる逆境に際して之を見るを得之を譬ふるに恰も貴重なる能力の如くにして其存するや價値の何れに在る乎を知る能はずと雖も一朝之を失へば遽に其必要を感じて搜索措かざるか如し當時英國海軍は方に其連遼の運に向ひ海上の女王は自己海軍の練習せる勢力強盛無双なるか爲めと謂はむよりは寧ろ強敵無きの故を以て其海軍に精妙なる結果を導くこと能はざりき既にして一七四五年に於るクープ、ブレトン島を征服せる最も確實なる成功はニューイングランド植民兵の力に頼り而して英國艦隊も亦之に強力なる應援を與へたり蓋し兩地の隔絶せること彼の如き位地に在りては海軍は陸兵の爲めに唯一の交通機關たるを以てなり。

然れどもツィロンに於る失策覆轍は東西兩印度に於る英國艦隊の高等將官の再ひ之を

踏みたるか爲めに東印度に於てはマドラスを失ひたり然るに又此等海軍士官の老邁せる状態に加るに遠く本國を離るゝ海軍をして其活動を逞ふするを得さらしむるの因を生したり他無し即ち英吉利本國の不安全なる状態にしてスチュアート家の縁者今尙は生存し英國に襲來せしこと是れなり一七四四年に於る佛國大將サックスの帥みたる陸兵一萬五千人の來襲は英吉利海峽艦隊の働きとダンカークの沖に於て敵兵の運送船を轉覆せしめたる暴風雨とに因りて之を免かるゝことを得たりと雖も實際の危難は其翌年に於て起れり即ちブレテンダー(スチュアート)家の王位要求者か突然として不意に蘇格蘭に上陸せるより北方の埃國一時に暴起して之に響應し其襲撃の速かなる一舉直に英蘭を衝かむとするに至れること是れなり史家の説く所に據るときは此時王位要求者の終局の目的は殆ど達せらるゝに近かりしと云ふ此の如く英吉利本國の不穩なる状況は端なくも英國海軍力を減殺せしめたり然れども之を外にして尙ほ其衰退を促かせる原因あり乃ち英國か當時大陸に於る佛國の運動作戦に反對し之に抵抗するに當りて屢屢なる手段を取りたるは是なり當時佛國は日耳曼を眼中に置かすして埃領子ラランドを襲へり英國は之を見て其海上の利害を忘却し單に佛國をして之に勝たしめさ

らむことのみを願へり蓋し英國は商業上歐洲に於る優位を占め居るも若しアントウェルプ、ブラスステッド、シエルトの如き名市にして一朝其競争國の手に移るときは其損害や少小にあらず英國の爲めに謀るに其豫防策は佛國の要地を奪ひ以て異日の抵當と爲すに若かす然れども當時英政府の薄弱なると其海軍力の缺乏せるとより之を實行する能はざりき又海軍衰頹の一原因は一七三九年以來英國の對歐的行爲かハノーヴァ家君主の爲めに制せられたるに在り即ちハノーヴァ家の英國に君臨するや其生國たる大陸領地を支配せむと欲するの情に切にして強硬の意見を偷安苟且の内閣會議に提出したると是なり此時に當り英國の輿望は第一ウヰリアム、ピットをして政界の上位に立たしめむとを希望せしも彼は久しく其位置を得る能はざりき是れピットか英吉利的感情の切なるか爲めに自然外來のハノーヴァ家を輕侮し因て以て王を怒らしめ其入閣を妨けしめたるに由る以上列記する如く種々の原因即ち(一)本國內の争亂(二)チーデルランドに於る利害(三)ハノーヴァ家の狀況等の諸原因は互に相結合して海軍發達の妨害を爲し第二流の内閣をして海軍の戦争に適當の指揮と適當の活氣とを與ふること能はざらしめたり然れども當時若し海軍の狀態にして真正に好良ならしめば海軍は却て内閣の方針に活

第七編 一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年埃國王位繼承の亂 一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟 英將マッシュウズ兵アンソン氏及ホーク氏の海戦 一七四八年エーラ、シヤハルの平和條約 四八一

動を興へたりしならむ然るに海軍の状況は不良なりしを以て英國と其特殊の敵國間との戦争に於ては遂に何等の影響をも起さざりき一七四五年以後大陸に於る争亂の問題は遂に左の二個に歸せり第一普魯西、西班牙、サルチニアは今後、埃領中何の部分を取すへき乎の問題にして第二蘭英兩國の佛國に對する惡感情は如何にして之を撫慰し以て平和に復せしむへき乎の問題即ち是れ也。

茲に諸海國は今や方々に戦争に従事し殊に英國を然りと爲す佛國大將サックスは此大陸戦争中斷えずフランダルに在りて佛國陸兵を指揮せしか彼れ其現在の狀勢を國王に報するに僅々六語を以てして曰く君主よ平和はメーストリヒトの城内に在り」と此言や實に卓見たり此堅城一度ひ開け佛兵は直にモイゼ河より路を取りて和蘭合衆聯邦に入れり蓋し英國の艦隊和蘭艦隊と連合して海上攻撃を妨けたるか故に佛軍は此路より進軍する外良策無かりし也一七四六年の終りに至り佛國は蘭英同盟軍の抵抗あるにも拘らず殆ど白耳義の全部を降せり此時に至る迄和蘭は其援助金を以て埃地利政府を維持し又其ネーデルラントに於る軍隊を以て埃國の爲に戦ひしは事實なりしも表面上佛國と和蘭合衆聯邦とは平和を保ち來れり是を以て一七四七年四月佛陸軍の蘭領フラン

ダルクを襲ふや故さらに揚言して曰く余は唯共和國の大統領の英埃兩軍に與ふる保護を除去せしめむか爲めに其國內に軍隊を送るのみ決して其地を奪ふの野心あるに非ず若し夫れ出兵上不得已占領せし土地の如きは彼にして我敵に助勢すると無きを證明せば直に之を返却せむのみ」と然れども是れ遁辭のみ戦争の進行中此年内に於て許多の土地は陥落せり此の如く佛陸軍の連勝は蘭英兩國を脅迫して平和條約を結はしむへきとを促し冬日の間に於て其商議を開きたりと雖も雙方の要求條件互に妥協に到り難くして往復討議の爲めに時日を費すか故に佛將官サックスは尙ほメーストリヒトを圍み條約の締結を強促したるか時方に一七四八年四月なりき。

此時に際し海戦の記すへきもの絶えて無きに非ずと雖も唯其活潑々地的快戦無きのみ現に一七四七年内に於て英佛艦隊二回の衝突を爲し佛の海軍戰鬥力は終に全滅するに到れり此二回共に英軍は疑なく優勢なりき然るに當時佛國艦長中には機に處して非常に勇敢壯烈なる戦を能くし或は又其寡勢を以て大敵に當り而かも能く力戦して最後に到る迄堅忍不拔の抵抗を試みたる者ありき是に由て吾人は戦畧上の教訓を得たること少からず教訓とは他無し若し敵にして戦争の結果に因りて敗走し又は戦はざるに先ち

第七編

一七三九年英國と西班牙との戦争
一七四〇年埃國王位繼承の亂
一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟
英將マッソンウズ兵アンソン兵及ホーク兵の海戦
一七四八年エーララシヤールの平和條約

其○勢○力○の○劣○弱○な○る○や○直○ち○に○潰○走○す○る○場○合○に○臨○ま○は○司○令○長○官○の○命○の○下○る○を○待○た○す○他○の○場○
 合○に○は○命○令○を○待○た○さ○る○可○ら○さ○る○こ○と○明○な○れ○ど○も○此○好○機○に○乗○し○て○直○ち○に○之○を○追○撃○す○る○を○
 可○と○す○又○司○令○官○た○る○者○も○此○場○合○に○は○直○ち○に○總○追○撃○の○號○令○を○下○さ○し○る○可○か○ら○す○と○謂○ふ○に○
 在○り○此○點○に○關○し○彼○ヒ○ー○チ○ー○ヘ○ド○の○追○撃○を○躊躇○し○た○る○所○の○佛○將○ツ○ー○ル○ヴ○ル○氏○の○過○誤○は○既○
 に○記○述○せ○し○所○な○り○今○茲○に○論○究○す○る○所○の○諸○戰○例○の○第○一○回○に○於○て○は○其○英○艦○隊○將○官○ア○ン○ソ○ン○
 は○佛○艦○八○隻○に○對○し○て○十○四○隻○を○有○し○其○艦○數○上○に○於○て○優○れる○の○み○な○ら○す○各○艦○亦○強○大○な○り○き○
 第○二○回○に○於○て○は○英○將○官○エ○ド○ワ○ー○ド○ホ○ー○ク○は○敵○艦○九○隻○に○對○し○て○十○四○隻○を○有○せ○り○但○し○此○場○
 合○に○は○敵○艦○稍○々○大○な○り○き○二○回○共○總○追○撃○の○號○令○は○與○へ○ら○れ○た○り○而○し○て○其○結○果○は○共○に○紛○戰○
 亂○闘○と○爲○れ○り○此○際○取○る○へ○き○の○方○法○は○唯○一○あ○る○の○み○乃○ち○第○一○に○必○要○な○り○し○は○逃○く○る○敵○に○
 追○及○す○る○に○在○り○之○を○爲○す○に○は○其○速○力○最○も○早○く○且○つ○先○頭○に○在○り○て○其○地○位○最○も○好○き○も○の○を○
 し○て○敵○を○追○撃○せ○し○む○る○に○在○り○蓋○し○追○撃○者○中○の○最○も○早○き○者○は○逃○去○者○の○最○も○遅○き○も○の○よ○り○
 は○速○き○こ○と○必○せ○り○故○に○敵○は○之○を○捨○て○し○走○る○乎○然○ら○ざ○れ○ば○救○護○の○爲○め○に○全○艦○隊○を○駐○め○さ○
 る○可○ら○す○第○二○回○の○場○合○に○於○て○は○佛○國○代○將○官○レ○タ○ン○ヂ○ュ○エ○ル○氏○は○敢○て○遠○く○逃○走○せ○ず○し○て○遂○
 に○英○艦○の○追○及○す○る○所○と○爲○れ○り○彼○は○商○船○二○百○五○十○隻○を○護○送○す○る○分○艦○隊○の○指○揮○官○た○り○し○か○

此○時○其○部○下○の○一○艦○を○派○し○商○船○を○護○し○て○逃○走○せ○し○め○身○は○唯○八○艦○を○以○て○止○ま○り○敵○と○商○船○と○
 の○中○間○に○立○ち○泰○然○と○し○て○敵○彈○の○亂○飛○し○來○る○を○待○て○り○英○艦○之○に○追○及○す○る○や○其○隊○を○二○列○に○
 分○ち○佛○艦○縱○隊○の○左○右○よ○り○之○を○夾○撃○す○佛○艦○は○頑○固○な○る○抗○戰○の○後○英○艦○の○爲○め○に○其○六○隻○は○捕○
 獲○せ○ら○れ○た○る○も○商○船○は○免○か○れ○た○り○而○か○も○英○艦○は○空○しく○他○の○敵○艦○二○隻○を○逸○し○て○無○事○に○本○
 國○に○生○還○す○る○を○得○せ○し○め○た○り○勢○此○の○如○く○な○る○を○以○て○若○し○此○時○英○將○ホ○ー○ク○に○し○て○其○慣○用○
 の○長○技○た○る○猛○斷○果○決○を○以○て○挺○身○突○撃○す○る○こ○と○あ○ら○は○敵○將○レ○タ○ン○ヂ○ュ○エ○ル○は○直○に○之○に○應○
 して○接○戰○し○衆○寡○敵○せ○さ○る○と○は○始○よ○り○之○を○甘○し○猛○勇○の○働○を○爲○し○此○一○大○活○劇○に○於○て○正○に○此○
 二○大○優○の○妙○技○を○演○出○せ○し○な○ら○む○佛○國○士○官○某○氏○は○恰○も○此○時○の○狀○を○寫○し○て○曰○く○彼○か○泰○然○と○
 して○能○く○我○か○商○船○を○防○護○す○る○や○恰○も○海○岸○に○於○て○陸○兵○の○集○合○隊○を○救○護○し○若○く○は○其○展○開○を○
 掩○護○す○る○爲○め○に○防○護○を○與○ふ○る○か○如○く○敵○前○に○立○て○之○を○恐○れ○す○而○か○も○能○く○挺○身○奮○闘○せ○り○戰○
 は○正○午○よ○り○午○後○八○時○に○亘○り○し○か○其○効○力○に○依○り○て○我○か○護○送○艦○六○隻○は○商○船○と○共○に○虎○口○の○危○
 難○を○脱○し○得○て○我○か○二○百○五○十○の○商○船○は○其○所○有○主○の○手○に○返○る○を○得○た○り○是○れ○實○に○堅○忍○不○拔○な○
 る○防○禦○の○賜○物○に○し○て○レ○タ○ン○ヂ○ュ○エ○ル○以○下○其○艦○長○等○の○熱○心○銳○意○に○向○て○深○く○謝○せ○さ○る○可○ら○
 す○見○よ○我○か○八○艦○を○以○て○敵○の○十○四○艦○に○對○す○其○苦○心○盡○力○思○ふ○へ○し○僅○々○た○る○八○艦○の○司○令○官○は○

第七編 一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年英國王位繼承の亂 一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟 英將マシウス氏アンソソン氏及ホーク氏の海戰 四八五

此際若し敵を避けむと欲せば則避け得らるべきの地位に在りしも敢て逃避せず従容として其敵艦隊の來るを待ち亦能く其麾下の將士をして深く其景慕崇信を司令官に措かしめ萬卒皆能く名譽の戰爭に堪へ實に壯烈にして且つ剛毅なる防戦の最も明確なる微證を顯はしたり而して彼の降りたるは其力竟に支ふ可らざるに由る今其敗餘の狀を見るに四艦は全く其帆樫を失し他の二艦は唯其「フォリアマスト、スタンディング」を残したるのみと「ツロッド」著佛國海軍戦記以上兩軍の動作は吾人に賞賛すべき研究の材料を與ふ即ち我軍優勢なりと信するときは其勢に乘し直に敵を追撃すべく又其戦到底敗戦なりと見るも若し一個特殊の目的を有せば之を貫徹せむか爲めに徹頭徹尾勇敢に戦ふへし然るときは必ずや其結果を奏することあるべき事是なり尙ほ一言附加すべきものあり他無し「ホーク」は此際自ら一層遙に追撃を逞ふすること能さりしか故に一小艦を派して西印度に急走せしめ同方面に屯在せる英艦隊に向て佛國商船隊の同海に近づき來るべきことを告げ以て之を要撃捕獲すべきの準備を整へしめ遂に其一部を略取し全く此一戦の終局を結はしめたることは是れなり是れ實に「鬪龍點睛」とも謂つへし吾人は此に到て歴史上の妙優等か活潑々地に其劇を演し絶世の妙技を盡して其秘訣を吾人に示せる

とを喜ぶ願ふに世の兵學者は此妙技活劇に對して必ずや感謝して措かざるべき也。吾人は今や茲に將に此戦争の記事を了り講和條約に入らむとするに臨み印度に於る英佛兩國の形勢に就きて一言せむと欲す是より先き印度に於ては英佛兩國共に同等の勢力を有し共に東印度會社なる者を以て其本國を代表せしめ而して佛國は半島上に於ては「デュープレイ」氏をして諸海島に於ては「ラ、ブールドンネー」氏をして佛國を代表せしめたり「ラ、ブールドンネー」氏は一七三五年印度に派遣せられ爾來彼の無限の天才は發して機慧の策と爲り何事に向ても其處理宜しきを得ざる無く殊に彼の經營に於て最も其力を致せしは此等諸島をして海軍の大根據地たらしめむとする所の宏遠なる大計畫に在りき是れ實に其根底より基礎を鞏むるを要する事業たりしなり是を以て彼は此事業に關して諸般の必要を満たさむとを勉め貯蓄場の如き船渠工廠の如き城砦の如き將た海員の如き凡そ是等必須の要件事物は百方力を盡くして之を集め之を設けたるか故に多少に拘はらず皆之を準備設置せり既にして一七四〇年佛英兩國間の戦争將に起らむとするや彼は東印度會社に請求し一分艦隊同氏か請求したる者よりも尙ほ小なるを其手に得而かも彼は之に依りて英の東印度貿易及び航運業を荒壞頽破せむとを志望せり

第七編 一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年佛國王位繼承の亂 一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟 英將「マツシウス」兵「アンソン」氏及「ホーク」氏の海戦 一七四八年「エーラ」の平和條約 四八七

然れども一七四四年戦争起るや佛國印度會社の所見に依り以爲らく本國に在りては英佛兩國戦を交ゆるも遠隔せる地方に在りては兩會社供に干戈を動かすの必要無しと乃ち中立を守らむことを欲せしか故にラ、ブールドンチー氏は此際英船を攻撃す可らずとの命令に束縛せらるゝに至れり中立に關する此の如き矛盾の狀態は是より先き既に關佛間に於ても起れることあり即ち表面の名目は平和と稱し實際上埃軍の爲めに兵を送れるとは前にも述べたるか如し印度に於る英佛の平和は在印度海上權力の薄弱なりし英人に取りて利益たり故を以て英國は直に其中立の申出を承諾し在印度英國會社は決して本國政府にも亦本國海軍にも敢て關係せざるべき旨を明言せり是に於てラ、ブールドンチー氏の先見ある計畫を以て之を獲得せる所の佛國の利益は空しく水泡に歸し先づ戦はむと欲して其意を得ず獨り久しく袖手傍觀せざるを得ざりき此時に際し英國は其分艦隊を東方海洋に派遣し印度及び支那間に於る佛國船を捕獲せしめたり是に到りて佛國の在印度會社は始て其迷夢を破り斷乎として戦はざる可らざる所以を知れり此時英國分艦隊は佛船の一部を捕獲し得て印度海岸に寄港し一七四五年七月英分艦隊は佛領印度の政事的首府たるボンヂシェリー沖に顯はれ英領マドラス總督か近日將に陸

上よりボンヂシェリーを攻撃せむとするを以て該英艦隊は海上より之に應援すべきの計畫なり是に於て平ラ、ブールドンチー氏の時代は始て茲に來れり。此時に方りチ、ブレイは印度半島の中部に於て佛國の覇權を張るの基礎を建てむか爲めに宏大なる企畫を爲せり今氏の經歷を尋ぬるに氏は其初め二等書記生として會社の勤務に従事せり然るに其才力に富めるや昇進最も早く擢てられて東印度の要地たるチヤンダルナゴールに於る通商局長と爲りしか氏の絶倫なる智勇を以て該局の勢力と事業とをして極大なる擴張を致さしめ以て大に英國の貿易を疲弊せしめたるのみならず時としては其一部を奪ひ去れり一七四二年更らに榮進して植民地の總督と爲り其地位を以てボンヂシェリーに移れり此に於てチ、ブレイ氏は其政略を縦横に發揮して以て印度を佛國の治下に從屬せしめむとに着手せり同氏は思へらく「今や世界の形勢上歐人は海洋を越へて全世界に蔓延擴張するに到れり願ふに東洋も亦將來歳を遂て歐洲人種の増加を來たし而かも東洋人と歐人との觸接するとは歳を遂て益々増加すべきの時機は到來せると亦已に久し此時に當り古來屢々外國より征服せられたることに慣へる所の此東印度の地は今や復た將に歐人の爲めに征服されむとしつゝあるなり而して

第七編

一七三九年英國と西班牙との戦争
一七四〇年埃國王位繼承の亂
一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟
英將マッソン氏アンソン氏及ホーク氏の海戦
一七四八年エーラウの平和條約

此好餌たる必ずや佛人の收獲に歸せしめざるへからず之か唯一の競争者は夫の英國に在り』と蓋し彼れの政略は印度の内治に干涉するに在り尙ほ之を詳言すれば第一に外國の獨立せる植民地の長官として其位置は彼れ既に之を保てり第二にはクレイトモガル(印度大帝)の臣下として此位置は彼れ今汲々として求めつゝあり大に干涉政略を行ふに在り或は印度大帝の勢力を割き或は強力を以て之を壓し或は正々堂々たる同盟を結て佛國の勢力を其内部に進ましめ或は印度の兩酋長をして相争はしめ而かも其平衡未だ定まらず雌雄決せざるに乘し一方に加ふるに佛人の勇氣と練習の力を以てし以て其平均を轉動せしむるか如き是れ皆彼の用ゐむとする所の詭計たりボンヂシェリーは一小港に過ぎずと雖も彼か此政略的計畫を弄するの地位としては最も適當せり而かもモガル大帝の主府たるデルハイとは非常に其地と隔るか故に此等詭計の跡を隠くし暗々裏に侵略的擴張を爲すに適せり是に於てチェンブレイはベンゴールに於る現今の位置を維持しボンヂシェリーの周圍に於て印度南東の佛國根據を堅めむことを計れり。抑も海上權力の問題と前述せる諸計畫との關係を正當に判断せむとせば茲に最も注意を要するものあり他無し今やチェンブレイの眼前に横はる一大問題の起り來れると是

なり即ち其問題は如何にして印度諸州及び諸人種を征服して帝國を組成せむ乎に非ずして如何にして英人の遮斷を脱せむ乎の問題是なり彼か嘗て盡きたる主權掌握の粗太なる夢想は是より數年後に於る英國の實際の事業にも超ゆること能はず元來歐人の能力は無限のものに非ず假令他の歐人の反對力に由りて其能力を減すること無しとするも其程度は有限のものたるを免れず若し夫れ印度に於る歐人の勢力に對し他歐人の反對を爲す者は何を以て有力と爲す乎と問は、他無し只其制海力如何に存するのみ蓋し白人の能力は強大にして能く少數を以て大軍と對抗し能く之に堪ゆると雖も氣候の酷暑は彼等の到底久しく耐ゆる所に非ず故に印度の如き極熱の地に於る白人は暑熱を避くる爲めに之をして新陳交代せしめざるを得ず故に歐人は印度に於ては殊に海上權力を必要とす然るに是より先き印度に於ては各處海上權力の行動は極めて平穩にして嘗て有爲活潑の顯象を見さりき然れども印度海戦の最初に於る英國海軍將校の不能力と且つ此の如き海戦に於る結果の索莫として見るに足らざるとにも拘はらず海上權力か終に決然不可争の勢力を顯はし以て印度争奪の最終大勝を效したることは明白にして疑ひ無き也斯く論すればとて吾人は印度帝國の建設者たる當時の英國雄傑クライヴ其

第七編 一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年英國王位継承の亂 一七四四年英國に對する佛國四班牙の同盟 英將マッシカス兵アンソン兵及ホーク兵の海戦 一七四八年エーラ、シヤハルの平和條約 四九一

人の性質と経歴とに對して之を蔑視する者には非る也。

(註) 佛國政府は印度を回復せむか爲めに非常の力を竭くし昨年其將官エム、ラリーを
して大軍を帥めて出發せしめたりと雖も余は信す若し案外の僥倖を成すとなくむは
必ずや彼等は本年一七五九年の終るを待たずしてカーナチックに於て死に瀕するに
至らむ彼等は一切の供給を其土地より仰くを得ざるも之に反して我艦隊の優勢なる
とどカーナチック沿岸の我等同胞は金錢其他諸般の貨物を本州(ベングール)より供給せ
らるゝを得る事實とは其彼此利害の差實に言ふ可らざるものあり我若し此利を適當
に利用せば必ずや其土カーナチックを並に印度に於る何れの場所の敵地をも皆疲弊荒
敗せしむるに至らむこと必せり云々(クライヴよりピットに送れる信書一七五九年一
月十日カルカッタ發クライヴ氏のクライヴ傳是れクライヴの言にして彼か此所に指
點せるベングール州の管制權と利用とは漸く近年に到りて英人に依り始めて成就せらる
るに至りたるを記臆せざる可からずデュープレイ氏時代には彼等未だ之を所有せざ
りし又此手翰に於るクライヴの先見は悉皆其當を得たるとは今後述ふる所に據りて
之を知るを得へし。

抑も二七四三年以後二十年間若し英佛其處を異にし佛國艦隊にして印度半島海岸及び
之と歐洲間との海上を制せしならむには彼のデュープレイ氏の計畫は蓋し成就したる
へし誰か之か全敗を斷言する者ぞ此事に關して某佛國歴史家言へる有り曰く「海軍の劣
弱は實にデュープレイの進歩を止めたる主要元因なり佛國王室の海軍は彼デュープレ
イ氏の時代に於ては未だ嘗て一度ひも東印度に到りしことおらさき」と以て其遺憾の
状を見るへし尙ほ左に簡短に話頭を進めむ一七四五年英の陸兵ボンヂシェリーを圍ま
むとし其本國海軍之を助く然れどもデュープレイの政略其良効を奏しカーナチックの
酋長(ナポツ)はマドラスを攻撃せむとしたるか故に英人は之か爲に牽制せられ之を如
何ともすると能はずしてボンヂシェリーの襲撃を中止せり翌年ラ、ブールドンチー氏は
始めて活劇場裏に現出し英將ペイトンと戦へり此戦や互に勝敗無かりしと雖も英將は
遂に其海岸を棄て、セイロンに走り海上の主管權は佛人に歸せりラ、ブールドンチー氏
か此時ボンヂシェリーに上陸するや直ちにデュープレイ氏と不和を生し本國より彼等
に與へたる所の命令の齟齬せるより益々其惡感情を高めたり九月ラ、ブールドンチーは
海陸よりマドラスを攻撃し遂に之を陥れたり然れども其地の英支配官と相約し贖金を

第七編

一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年佛國王位繼承の亂 一七四四年英國
に對する佛國西班牙の同盟 英將マックスウェル及ホーク氏の海戦
一七四八年エーラ、シヤハルの平和條約

以て之を賄はしめ二百萬弗の償金を拂はしむヂュープレイは之を聞くや非常に怒り「一旦略取せる以上は是れ我有なり」と唱へ降服の條件を無効とせむとを主張せりと雖も剛正なるラ、ブールドンチーは堅く之を拒みて曰く「男子として既に之を約せる以上は此の如き不名譽の所業を斷して爲すべからず」と斯の如く爭論進行して未だ決せざるに際し激烈なる旋風起りて彼の艦船の二艘を破壊し其他の帆檣を摧けり其後幾くも無くしてラ、ブールドンチー氏は佛國に歸りたるに彼の豪氣と熱心とは當時の人に稱せられずして却て罪科に因り三年間の入牢を命せられ之か爲め健康を害して遂に死せり彼の印度を去りたる後ヂュープレイは直ちに降服の約定書を破りマドラスを攻めて之を陥れ英國植民を追放して更に其城砦を増築し以て其防禦を固めたり既にマドラスの根據を固めたる後ヂュープレイは重ねて兵を發し英人の居留せる要地フォート、セント、ダビッドの堡砦を攻め之を圍めりと雖も英國艦隊の近くや遂に其圍を解かざる可らざるに至れり時に一七四七年三月なり。

上記述したる佛國海軍の不幸は英國をして此歳を終る迄獨り海上の主人公たらしめたり此冬に至り英國は更に東洋未曾有の歐洲艦隊を印度に派遣し之に搭載するに許多

の陸兵を以てせり其司令官海軍少將ボスカウエンは陸軍大將の任務を兼ね總指揮官として之を帥め一七四八年八月艦隊はコロマンデルの沖に現はれ海陸共同してボンヂン、エリーを攻撃せしもヂュープレイは逆へ撃て英の陸兵隊を扼し英の陸兵は敢て進撃する能はず唯其艦隊は海上より之を攻圍するのみと爲れり既にして英艦隊は疾風の爲めに困難し十月遂に其圍みを解く暫にして歐洲戰爭に終りを告げしめたるエー、ラ、シャペルの講和條約の報知は印度に達せりヂュープレイは此本國の報知を得て其元氣を恢復し再び佛國領地上の基礎を強固にせむか爲め其饒賤にして且つ堅忍なる行爲を試み之に頼りて以て彼の海上戰爭の危運を救避せむとを企謀せり然るに悼むへしヂュープレイの天才を以て其堅忍を以てするとも海軍の援助なきに於ては到底海上よりする攻撃に對して其地位を保つ能はず隨て千辛萬苦其多年經營せる所の經綸施設は皆水泡に歸したりき。

茲にエー、ラ、シャペル講和盟約の條件の一はマドラスを以て英人に返し其代として北米植民の征服せるルイスバークを佛人に與ふるにあり而かも北米植民は之を棄るを惜みヂュープレイはマドラスを放棄することを悲めり此の事情は以て後日奈翁か我はビス

第七編

一七三八年英國と西班牙との戰爭
一七四〇年英國王位繼承の亂
一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟
一七四八年エー、ラ、シャペルの平和條約
英將マックスウェル、アンソン、ホークの海戰

チヌラ河畔に於てボンヂシェリーを再び征服すへしとの言を説明するに足る蓋し英國は其海上權力に由りルイスバークを改更せしか故に之を捨るは大に惜むべきか如しと雖も之をマドラスと交換したるとは實に英國の大利益なりき然れども英領米國植民は決して此交換に甘むせず彼等は能く自國の海軍の勢力如何を知り且つ又彼等の海岸を距る遠からざるの地方に於て更に一地を征服すると能はざるの理無きを知れり顧みて印度の状況を見るにマドラスを返還せるの事實は生來の印度諸侯を驚愕せしめたと非常にして之か爲めにチヌラプレーの印度人望を失へるとも亦極めて大なり何となれば彼か其勝利の間は威權赫々として印度内地の各諸侯を壓倒したれども一朝にして忽ち其地位を失ふに至りたればなり蓋し彼等印度諸侯の驚くと實に其理あり彼等は單に其結果のみを見て未だ其結果を惹起すの一大勢力あるとを知らざるか故なり其勢力や決して甲乙人物の上存せず又君主にも存せず將た政事家にも存せず然らば何の上存する乎曰く海上の支配權に屬す此點に就きては佛國政府は獨り能く之を看破し到底強靱なる英國艦隊と拮抗して斯る遠隔の地に根據を据へむとは望む可らざることゝ爲し斷然之か希望を絶て海軍を送らざりき是れ自家の心事自家能く之を知りたりとや謂

はむ乎然るにチヌラプレーは自ら之を悟らす其後數年間尙ほ辛苦して一大家屋を東洋的陰謀詭計終始欺む無く合離常無く虛實知るへからざる砂礫の上に建築せむと欲し無益の勞力を費せしは實に憐殺するに堪へたり。

以上の一般戦局を結へるエーラ、シヤヘルの條約は一七四八年四月三十日英佛蘭三國之に署名し同年十月に到りて他の各國總て之に署名したり今其結果を見るにシレシヤを普魯西に與へバルマを西班牙のインハント、フカリップに與へポードモント以東の伊太利領地をサルヂニア王に與へたるか如き總て埃國の或る部分を割與せむことを除く外は條約一般の性調は各國の地位を戦争以前と同一なる状態に恢復せしめむとするに在りき抑も其戦争中許多の大事變故を生し許多の民命財産を費消せしの後其終局は徒らに各國をして其當初と大約同様なる位置に復せしめたと此役の如き者は未だ曾て他に類例を見ざる所なり佛英及ひ西に就き事の大局を概括すれば最初英西二國の間に於てせる戦争の破裂に際し之に増加せる所の埃國王位繼承の争議は戦局の方向をして全く別途に轉せしめ而して此紛紜は十五年間永續し殆どマリヤ、テレサの在位よりも長きに至れり又佛國は舊敵たる埃地利家の危難を見るや直に其攻撃を復た新たにせむとせ

第七編 一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年埃國王位繼承の乱 一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟 英將マックスウズ氏アンソン氏及カーク氏の海戦 一七四八年エーラ、シヤヘルの平和條約 四九七

り佛國の此の如く容易に事を擧ぐると均しく英國も亦容易く佛國の企圖に反對し日耳曼の政事上に於て佛國の勢力を振はさらしめむことを圖れり是れ英王が特に日耳曼の利害に關して留意し居るか故なり佛國の爲めに謀るに佛國の真正政略としては甲乙二策あり即ち甲はライン河及び日耳曼の通路に據り埃帝國の中心に向て直に戦を開くべき乎又乙はチーデルランドの如き遠隔せる地方を占領するに在る乎甲乙の二途孰れか優れる乎未だ遂に判す可らざるものあり然れども佛國は竟に乙策を取れり初め佛國はバザアリアと相親みて其領地を利用し又當時兵力強精を以て正に頭角を露はせる普魯西と互に相結へり是れ此戦争最初の状況なりき而かも他の一方にはチーデルランドに於る敵狀其後漸く變動し來りしを以て佛國は之を忌みて其海上權力を打ち碎かむとせり而かもチーデルランドは埃國に向て軍用補助金を送りたると佛西兩國の商業を壓倒したるとに由りて佛國の嫉妬を受けたるか爲めに此際佛軍の大打撃を蒙るに至れり此時に方りルイ十五世は其企圖の遂に成し難きを見佛國の艱難不幸を西班牙王に辨明し以て平和を結ふとを促せり當時佛王は既に陸兵を以てチーデルランド及び和蘭の一部を占領し居たるに一朝意を屈し其歩を譲り彼か如き講和條件に従ひたるを見れば

亦以て佛國の困弊は非常なりしことを推知すへし蓋し佛王は大陸に於て斯の如く成效せしと雖も其海軍は全く消滅し植民地との交通は全く遮断せられたり而かも當時の佛國政府は果して能く植民的大望某著述家の記せるか如きを懷抱せしや否や今之を知るに由無しと雖も之を要するに當時佛國商業の非常に衰頽沈淪せしことは明かなり。以上は是れ此一大戦争の末段に於て佛國が遂に究迫して和議を結ぶに到りたる状態なりとす然るに英國も亦是より先き西班牙領米洲諸邦に於る貿易上の論争と其海軍の能力なるとの故を以て遂に大陸戦争に加入せしか其戦争の爲めに非常の不幸に遭遇し遂に殆ど八千万磅の負債を受けたることを一七四七年に至り始めて發見せり而かも其同盟者たる和蘭は陸上に於て連敗し當時敵の大軍は國中に侵入しメーヌストリヒトの要地は圍中に在り大脅迫の下に平和條約を結へり當時和蘭の財源は全く空乏と爲り却て佛國に對して負債を起さむことを要求するに至れり或人曰く和蘭市府に於て金錢の乏しき此の如きことは未だ嘗て見ざる所なり即ち一割二分の利を拂ふも金銀貨幣を借ること能はさりしなりと形勢斯の如きを以て若し當時佛國にして英國海軍に對し得るの海軍を有せばチーデルランドとメーヌストリヒトとは固より之を掌握しつゝ以て充分に

其○戰○勝○の○利○益○を○全○有○す○る○こ○と○を○得○た○り○し○な○ら○む○然○り○而○し○て○英○國○の○狀○況○此○の○如○く○大○陸○に○於○て○非○常○に○窮○迫○せ○し○も○尙○ほ○其○能○く○對○等○の○條○約○を○結○ぶ○を○得○た○り○し○所○以○の○も○の○は○他○無○し○其○海○軍○力○に○依○て○以○て○海○上○を○管○制○す○る○と○を○得○た○れ○は○な○り○

英○佛○西○三○國○の○商○業○は○總○て○非○常○な○る○困○難○に○遭○遇○せ○り○然○れ○ど○も○其○得○失○損○益○の○差○引○上○に○於○て○英○國○の○獲○得○せ○し○利○益○は○他○の○二○國○に○比○す○れ○は○多○き○こ○と○二○百○萬○磅○に○上○れ○り○之○を○他○の○方○法○に○依○て○示○せ○は○佛○西○兩○國○の○其○船○舶○を○失○ふ○こ○と○三○千○四○百○三○十○四○艘○に○超○過○し○英○國○は○三○千○二○百○三○十○八○艘○を○失○へ○り○然○れ○ど○も○此○數○字○を○比○較○せ○む○と○せ○は○宜○し○く○其○兩○者○の○商○業○上○船○數○の○總○額○と○此○損○失○額○と○の○比○例○を○見○る○と○を○忘○る○可○ら○ず○均○し○く○是○れ○千○艘○の○損○失○な○る○も○英○國○の○失○ひ○た○る○と○佛○國○の○失○ひ○た○る○と○は○比○例○上○非○常○な○る○相○違○あ○り○て○其○損○害○も○亦○隨○て○著○る○し○き○大○差○あ○り○

某佛國論者曰くレタンヂェニル氏の分艦隊大敗の後佛國々旗は重ねて海上に顯はれたると無し六十年以前に於ては百三十隻の軍艦を以て組織せられたる佛國海軍は今や僅かに二十二隻を以て組織せらるゝことゝなれり捕拿用私艦は毫も獲る所なく而かも其保護も無くして各處に散在するが故に常に英艦の捕獲する所と爲れり之に反して英國海軍は全く其競争者無く毫も困苦を受けずして自在に各洋海上に横行濶歩

せり彼等は一年内に佛國商業より七百萬磅を奪ひ去れり然れども此海上權力は能く佛西植民地を奪ふとを得へきの實力ありしと雖も彼等は上官の指揮命令に對して一致結合するとなく又堅忍して其志を貫徹せしむるの氣力に乏しきが故に大勝を得ること能はざりしとラヘルニスボンホルス著佛國海軍史

要之佛國に其海軍を缺くか爲めに其戰勝の結果を棄てざる可らざるに至り之に反して英國は其海上權力假令當時英人は其最良利益を收むる迄に之を利用すると能はざりしにもせよを有せしか故に其位地を保持するとを得たり

一七三九年英國と西班牙との戦争 一七四〇年英國王位繼承の亂 一七四四年英國に對する佛國西班牙の同盟 英將マシュー・シムズ氏アンソン氏及ホーク氏の海戦 一七四八年エーヴル・シヤム・ヘルの平和條約

明治二十九年十一月廿六日印刷
明治二十九年十一月三十日發行



翻譯者兼
發行者

東京市京橋區築地四丁目一番地

水交社

右代表者

東京市京橋區築地四丁目一番地
鈴木木光

長

印刷者

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
山本鉄次

郎

發行所

東京市京橋區宗十郎町十番地
東邦協會

會

印刷所

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
英秀株式會社

舍

賣捌所

東京市京橋區銀座四丁目
八尾

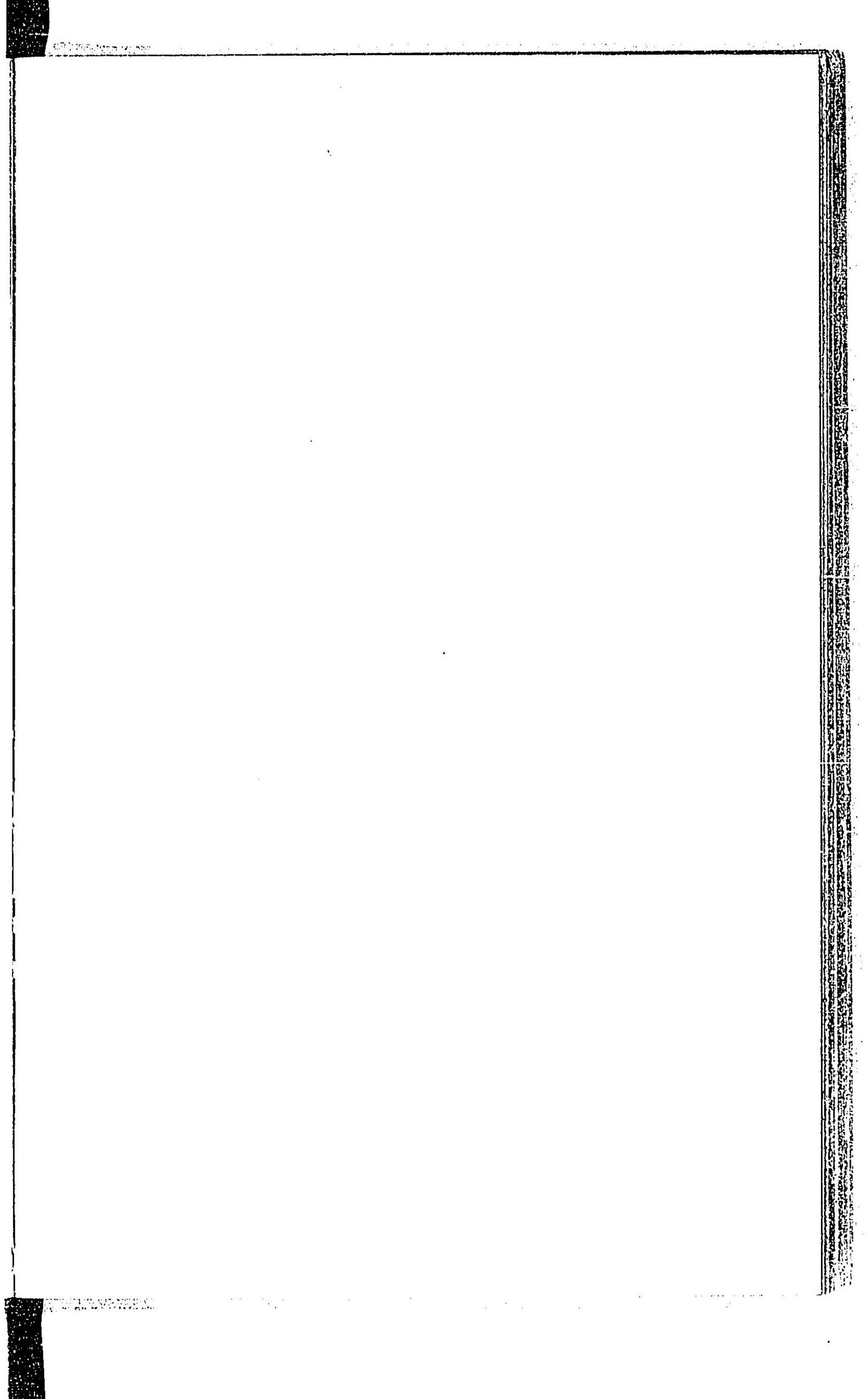
商店

全

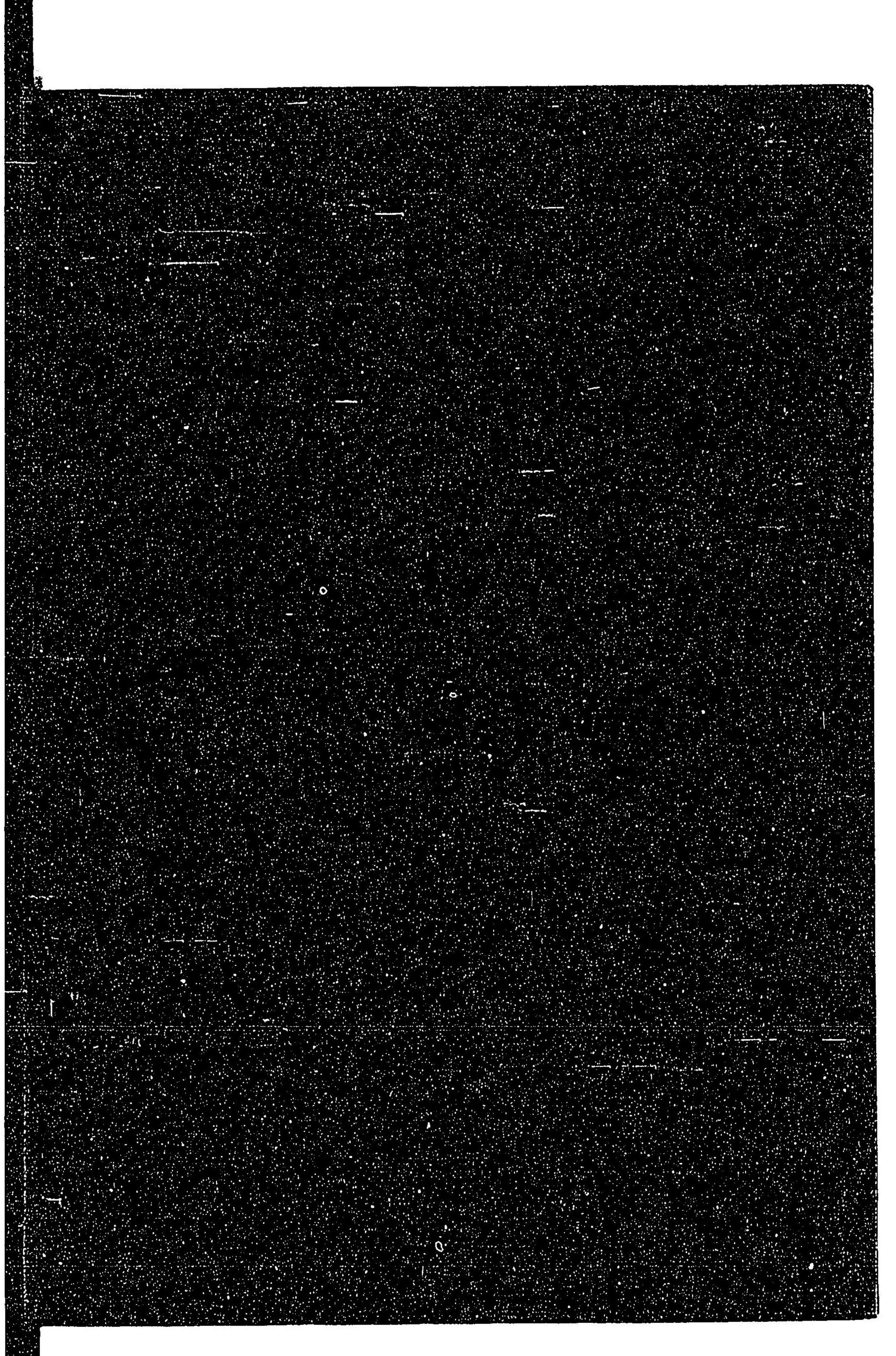
東京市神田區表神保町
八尾

書店

ITD-60







74
16
M

003542-001-7

74-16

海上権力史論

エー・テー・マハン/著

上

M29

ACD-0071

